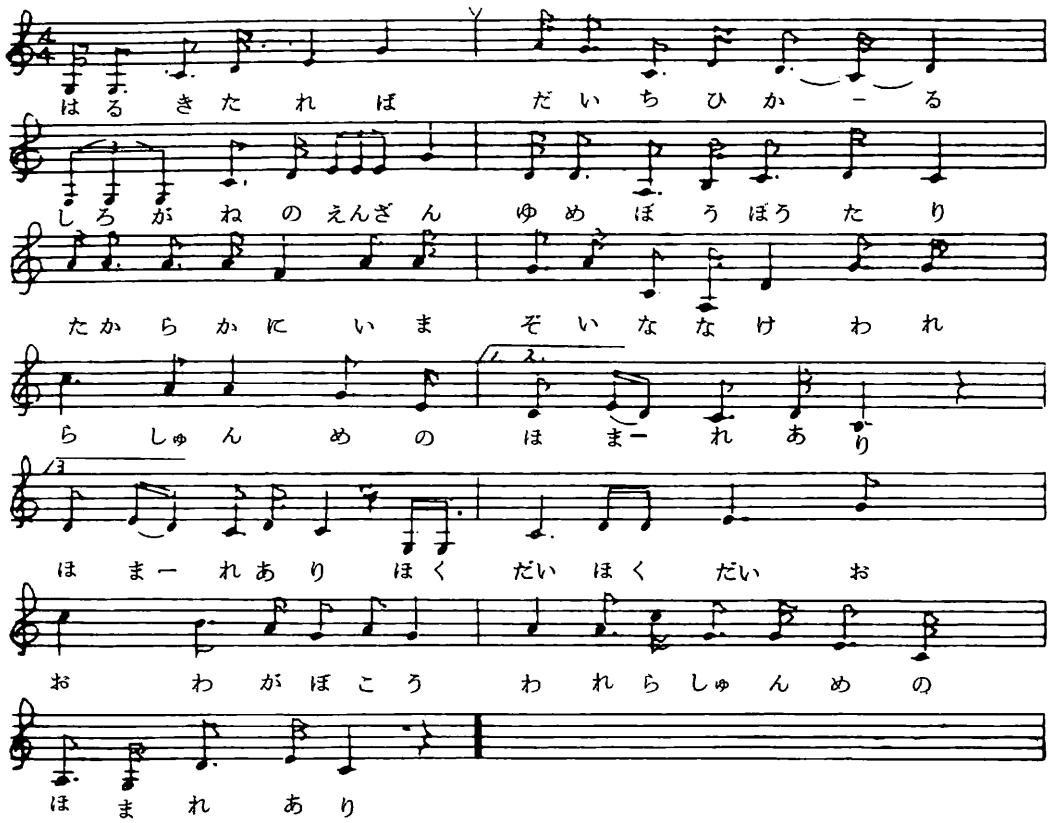
昭和59年度

No.30 部報

北大馬術部

北大馬術部讃歌

作詩　三浦　清一郎
作曲　滝沢　南海雄



北大馬術部讃歌

一、
春来たれば、大地光る
銀の遠山　夢茫々たり
高らかに　今ぞ嘶け！
われら駿馬のほまれあり

二、
時来たれば　旗をかざせ
青雲の旅路に　意気軒昂たり
高らかに　今ぞ嘶け！
われら駿馬のほまれあり

三、
雲流れて　旅路遙か
青春の孤杖　泥濘はばめど
凜然と　進みて行かむ
駿馬のほまれあるかぎり
北大！　北大　おゝ我が母校
われら駿馬のほまれあり

上本浩之と北楽院号

国枝由紀とノエル号

嶋田明美とドン・ホッパー号

丹野宏昭と北雛号

中川千夏子とオオカリヒメ号
（モデルバーンにて）

平石哲生と北冴号

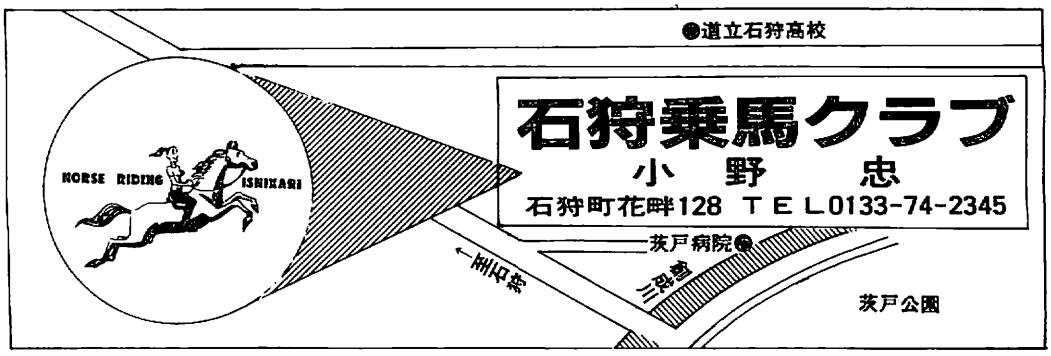
森田敏とドン・ホッパー号

平山復志と北紫雲号

目　　次

巻　頭　言 …… 小池　寿男 …… 1
平　　静 …… 岡田　光夫 …… 2
馬術の要諦 'The Half-Halt' …… 半澤　道郎 …… 3
前主将から …… 平石　哲生 …… 6
役員紹介 …… 7
決算報告 …… 9
行事報告 …… 10
戦績報告 …… 12
全日学観戦記 …… 西村　幸祐 …… 20
ALL JAPAN観戦記 …… 中村　康利 …… 21
調教報告
　ドン・ホッパー号 …… 森田　敏 …… 24
　北姫号 …… 谷山　豊三郎 …… 26
　北雛号 …… 丹野　宏昭 …… 30
　北皇子号 …… 町田　憲司 …… 32
　北耀号 …… 山田　和男 …… 34
　北紫雲号 …… 平山　復志 …… 36
　ノエル号 …… 国枝　由紀 …… 38
　北銀号 …… 半澤　道郎・名越　正泰 …… 40
　北冴号 …… 平石　哲生 …… 42
新馬紹介
　北玲号 …… 長屋　清隆 …… 43
離厩報告
　オーロラホマレ号 …… 山田　和男 …… 47
　ゴージャスライフ号 …… 陣川　雅樹 …… 48
　スカイナーホース号 …… 陣川　雅樹 …… 49
　オオカリヒメ号 …… 中川　千夏子 …… 50
　烈々風号 …… 森田　敏 …… 52
　北将号 …… 田中　保之・平石　哲生 …… 54

スターライト号 …… 小役丸千加子 …… 56
北大水産学部活動報告 …… 上本　浩之 …… 60
ＯＢ対抗戦 …… 63
東京ＯＢ会便り …… 64
卒部にあたって …… 上本　浩之 …… 66
…… 国枝　由紀 …… 66
…… 嶋田　明美 …… 67
…… 丹野　宏昭 …… 68
…… 中川　千夏子 …… 70
…… 平石　哲生 …… 70
…… 平山　復志 …… 71
…… 森田　　敏 …… 71
自己紹介・他己紹介 …… 75
北海道大学馬術部名簿 …… 93



巻　　頭　　言

部長　小　池　寿　男

昭和の年代も６０年を迎えた。人生でいえば還暦にあたり、一つの節目ともいわれている。馬術部の歴史の中で今年がどのような年になるかはわからないが、昨５９年は馬の出入りの激しい年であった。その中でも特筆すべきは、永年にわたって北大馬術部の代表馬としてのみでなく、その活躍から学生馬術界に名を知られた名馬、スターライト号の引退である。名馬も年齢には抗し難く、第１線での活躍は遠のいたとはいえ、新しい部員へのコーチ役として活動していたが、昨秋ついに引退離厩し、余生を農学部第１農場でおくることとなった。永く在厩し、活躍した馬であることから、北大馬術部に関係された方々の中にはいろいろとこの馬との思い出を持たれている方も多いと思う。これも時代の一つの節目と云う感をいだかせる出来事である。

厩舎および馬場のある北１８条通りの環境も大きく変りつつある。南北に長く、北８条から北２４条までに存在する北大キャンパスのうちで、東西を貫く道路はこの１８条通りのみである。したがって札幌市の発展につれてこの道路の交通量も飛躍的に増加し、道路としての重要性を増している。この道路は従来から札幌市の都市計画の中では環状道路の一部として幹線道路とされており、この北大構内の部分を除くと環状道路の大部分はほぼ完成している。したがって、この部分の改修が注目されることとなる。学術研究の場としての北大と、都市機能を考えた札幌市の立場との違いからなかなか進展がみられなかったが、近年この１８条道路問題はやや具体化のきざしがある。そうなると馬場の位置や広さについても大きな影響があることとなる。したがって、早い機会にこの問題についての対策をよく考えて対応していく必要がある。このような面からも、今年は１つの節目となるものと考えられる。

今年も３月の卒部生を送る季節となった。今年も数名の部員が巣立っていくことになる。なおしばらく学内に残る人もいるが、また卒業して社会人となるものもいる。これもまたそれぞれの人にとっては人生の節目として大切なものである。４年間の部活動の間に有形無形のものを得たことと思う。その得るところや感ずるところは人それぞれに異っているにしても、これがその後の人生にどのように生かすかをもう一度考えてもらい度い。

今年が昭和６０年と云う一つの節目を迎えた年ともいえるので、それに関連した２・３のことを述べたが、馬術部としても飛躍のための一つの節目としたいものである。

（昭和６０年２月２８日）

平　　静

岡　田　光　夫

平静とは静かで落付いている事を云う。そして平静をよそおう、平静にかえる、平静を保つと云う使い方がされる。この言葉を持ってきたのは馬乗りにも極めて大切な言葉だからである。試合であと二三人で出場順がまわってくる時、緊張は高まり、呼び出しそして出発のベルの時に緊張は最高調になってくる。やたらにのどがかわく。動悸がする。尾ろうな話だがやたらに尿意をもよおす。この様な感じは大多数の人が経験した事であろう。皆平静を失ったからである。さて入場敬礼とそしてスタートの合図、障害の経路を意識してかしないでか夢中で障害をかけ抜けゴール、そこではじめて全身の力が抜けてしまった様な虚脱感、この様な経験は大部分の人が味わいくりかえされてきた事であろう。さて馬術と云うものは他の競技と違ってスタートまで心の戦い、いわば平静を保つための時間がない競技と云ってさしつかえない。準備馬場ではこれでよいだろうかと云った心の迷い、そして待期馬場での試合進行に伴うあせりにも似た感じ、しかし馬術では人だけではない、馬と云う選手と一身同体にならなければならないものがある。むしろ馬が平静を缺くことが人の心を乱す事が多いのではないだろうか。馬にとっても普段の練習と違う観衆、馬場のかざり、動きまわる馬場補助員の動きどれ一つとして刺激にならぬものはない。先日ロスオリンピックでピストル競技で金メダルを取った蒲池選手の「金メダルへの道」と云う講談を聞いた。日常坐臥・家庭でも電車の中でも絶やさない練習と工夫の話も感銘を受けたがメキシコ大会からオリンピックに出場しつづけロスオリンピックを目指していた時ふとした事で大事な右手を鎌で切り「もうピストルは持てない」と云われながらもピストルの握りの部分を削って改造し、引金が引ける様になり再び血のにじむ様な練習、努力と全時に精神統一いや精神を自分で制禦する工夫をはじめられた。そしてオリンピックの時射台に立って脈を計ったら平常の数どおりであった時、一時は体調が悪いのではないかと思ったけれどやがて自分の平静心に気がつきそれからは隣りに誰がいたか、何点を打ったかも全然記憶がなく集中が出来たと云う話であったが、本当に心にしみる涙の出る様なお話を淡々とした口調で話される氏の顔を又新しい畏敬の念を持って壇上を仰ぎみた。

私の云いたい事は試合出場とはこの様にきびしいものであり、むしろ自分自身でいくらきびしさを求めても限りのないものである事、試合に当っては自分の精神を制禦出来ないまでも自分は勿論、乗っている馬も平静な状態で出場出来れば結果はともかくとして満足の行く試合をしたと云う心のやすらぎを得る事が出来ると思う。又試合のたびに少しずつでもこの境地に近づける努力が大切な事である。試合の経験不足、特に国際大会の様に我が国の競技会の現状とはかけ違った試合に人馬ともになれなければならないと云う事はオリンピックの度に云われている事は皆さん御承知の事と思う。武道では「心技一体」と云う言葉がある。馬事公苑入口の百練自得と云う言葉は技術面だけではない。精神面の事がその裏にひめられていると思う。今日も練習が行なわれている、今日の目標を作り、工夫して行く、そして一歩一歩自分の目標に達する。そして馬には絶えず話しかけて騎手の心を伝える。この事を忘れないようにして行きたい。

馬術の要諦'The Half-Halt'

第6代部長　半　澤　道　郎

馬術用語、The half-halt、Le demi-arrêt、Halber-Arrêt はThe halt 又はThe full-halt に関連して作られたものと考えられる。この邦訳語は「半減却」が一般に用いられ、稀に「半停止」が使われている。英、仏、独語から訳すならば「半停止」の方が妥当であり、減却（正しくは減卻）を使うなら寧ろ「半」を除いた方が扶助の内容を示すものであると思う。然し、辞書には減却は「へること、へらすこと」とあり「停止」の意味が無いので、完全な停止を要求しない扶助の名称としては「減却」の方が簡明である。然し後に述べるように、この扶助は馬の注意力と平衡を増加するもので単に「へらす」ことでは無いので、英、仏、独なみに「半停止」を使う方が根拠が明かで無難であると考えられる。

Gunnar Hedlund [1]は著書の中に、停止（halt）は一回か二回のhalf-halt で達成され、停止自体、馬が停まるまで続けられる一層強い抑制扶助のhalf-halt であると云っている。またDietrich Felgendreher[2]は、真にコントロールされた前進運動はhalf-halt の使用なくしては達成されないとして、馬を前に出すことと同様に半停止（half-halt）の使用は、人と馬の訓練の開始の時から始めなければならない極めて重要な扶助であり、訓練によって人と馬が経験と知識を得て、高度に洗練された複雑な運動ができるようになっても、なおこの扶助操作の訓練と実行は続けなければならないものであると述べている。

FEIのRules For Dressage Events、16th edition、(1983) P30. Article408、The half-halt の項を翻訳すると次の如くである。「半停止（half-halt）は種々の運動をする前、又は歩調をより低くか、より高く変える際に、馬の注意（attention）と平衡（balance）を増加する目的で行う、殆んど目に見えない、殆んど同時に行う、騎手の騎座（seat）、脚（legs）および拳（hand）の共同動作の扶助である。重力を僅かに馬の後軀に移すことによって、前肢が軽くなり、全体としての馬体の平衡が良くなるために、後肢の踏み込み（engagement）と腰の平衡が得易くなる。」（註、日馬連発行の国際馬術連盟、馬場馬術競技会規程第16版の訳文には重要なところが脱けているので訂正する必要がある。）

またDietrich Felgendreher の定義は「半停止の要素は騎手の前進（pushing driving）扶助と抑制（holding又は停止stopping）扶助とである。騎手は背（back）、騎座、脚の推進扶助で馬を瞬間的の停止の拳（stopping hand）の方に押し出すのである。換言すれば後（うしろ）からの推進（前進）を柔軟な拳で受け止めようとするものである。この瞬間的の 'holding hand' は荒い 'pull-ing hand' と区別しなければならない。半停止には引っぱる扶助は含まれない。騎手の拳と馬の口との接触（contact）は騎手の推進扶助によって馬を衡に押し出すことによって強められるのであってこの増加した接触は馬によって騎手に与えられるものであって、騎手が手綱を引っぱることによって馬に強制するものではない。また半停止の演技はほんの瞬間的の出来事であって、騎手の推進と抑止の感

覚が合わないで、瞬間より長くなれば、半停止の扶助の効果が得られないで、馬の騎手の扶助に対する応答は誤った方向になる。」と述べている。Felgendreherは、half-haltは極度に重要な扶助で、適切に使えば馬の後軀の踏み入みを良くし、前肢を挙揚するが、その程度は扶助の効果と馬体の許容度によるとし、この扶助は馬に運動に対する注意をさせ、馬の注意力、服従性及び、従順性をチエックすることができると同時に、騎手に対しても扶助の使用が適切であるか否かを自分で注意するのに役立つと云っている。

またBritish Horse Society から出しているEquitation[3)] の中には「half-halt は殆んど目に見えない、停止(halt)の穏かな変形であって〝運動に於ける馬の瞬間的の収縮〟(Von Blixen-Finecke)で、次の場合に行う扶助である。即ち(a)馬の注意と平衡を増加する。(b)後軀の踏み込みを助け、刺激を与え、前肢を軽くする。(c)騎手が馬に対し何かを求めていることを馬に予告する。」とし総ての運動に於て馬に前進を考えさせることが効果的で、そのために前進扶助が抑制扶助よりも重要である。騎座と脚の扶助を後軀に活力が出る様に適用すれば、馬体の他の部分の筋肉にも影響を与える。(後軀にだけ分離して作用するのでは無く、馬体の全体に影響を与える。)この前進の扶助に対し、拳を以てする手綱の瞬間的抑制操作により、馬の活力と注意力、前進気勢が馬に内蔵されて、上記の(a)(b)(c)の結果をもたらすのである。

もし半停止が効果的であれば、馬体の背は柔軟(弛緩)となり、運動は律動的(調子を取って歩く)になる。これは背が前肢と後軀の間の連接桿の作用をするためで、もし背を硬くするか、強く張ると、拳の扶助が前肢や後軀に及ばないで、馬は頭を揚げ、背中を凹(へこ)ませhalf-haltの圧縮効果(compressing effect)は失われる。手綱(拳)の扶助を使った後に、騎手は瞬間的に拳で、馬が自分で自分を支え、手綱の支持に頼らないことを知らせるようにすることが必要で、その為には騎手自身も手綱に頼らないで、騎座と脚とで、馬を手の内に入れる様に心がけなければならない。半停止の扶助は調教(訓練)が進むに従って益々重要となるが、若い馬には漸時に適用し、正確に受け入れるように教えなければならない。

初心者が乗馬を始めるに当って最も重要なことは馬をrelaxさせrhysmicに前進運動をさせることである。然し前進扶助を教えると同時に初心者の段階でhalf-haltの扶助を教えなければならない。然し半停止の扶助の感覚は教師が口で教えることは出卒ない。何故かというと教師が騎手に半停止の扶助を指示する時には、既にその適当な瞬間(timing)が過ぎているからである。それ故この扶助は騎乗者自身が試行錯誤(trial and error)を繰り返して、その使用の正しい瞬間(timing)と、感覚(feeling)を偶然に出会うことによって覚えるのである。

British Horse Societyの書には半停止の組織を(a)瞬間的に騎座と脚の推進扶助を適用する。(b)拳を瞬間的に馬が前に出ようとするのを抑制する。その結果馬は速く前進するよりも一層収縮する。(c)もとの接触(contact)に戻る前に手綱の緊張を瞬間的に譲る。というように説明している。この扶助を与える瞬間(timing)が非常に重要で、与える時機と長さ、扶助の強さがこの扶助の効果を決定すると述べ、そのtimingと強さは運動の種類により、馬の体形、個性、柔軟性、従順性、平衡の程度調教程度によって著しく異なると述べている。敏感な神経質の馬は短かく軟かい半停止の扶助に最もよく反応し、深過ぎる騎座と強い扶助には抵抗する。鈍感で不注意の馬には強い扶助を使用する必要があると

述べている。

このように半停止の扶助は馬と騎手との間の継続的な連絡手段であり、総ての運動の開始、移り変わり、および運動中に度々行われるもので、Tallandの乗馬学校のSivewright夫人の著書[4]の中に、FEIの事務総長のMr. Fritz WidmerがSpanische Reit Schuleのある"Bereiter"に日常の約45分間の練習中に何回位half-haltを行うかを訊ねた時に、「考えていないが、場合によっては300～400回と思う」と答えがあったとColonel Nybloeus氏が話されたことが記されている。Felgendreherは場合により12mの直径の円周上又は馬場の長い側で続けて10回位の半停止の扶助を使うと述べている。

British Horse Societyの書には障害飛越に於いて馬を従順にし、コースに於いてbalanceと、Rhysmを得るためにhalf-haltの扶助を使うとか、正しいhalf-haltの扶助が出来るようになってから駈歩のピールエットをやる可きであると云うようなことが記されている。またHedlundは正確な円周上に乗る場合馬の姿勢を準備する場合、駈歩発進のとき突進させないため、伸長速歩で馬の頭が余り低くなった時に短節の半停止扶助を使用するとか、蛇乗り、その他方向変換の場合、二蹄跡運動に入る場合等にこの扶助は必要であると述べている。

印南清先生の「馬術読本」[5] 41頁、後篇の基礎的事項の第2項、馬術とは？その考え方、の第4に日本馬術連盟発行の馬術教範[6] 第1篇、馬術の要領、通則第23項を引用して馬術の基本を詳細に説かれているが、その要領は一言で云えばhalf-haltの演技によって達成されると申しても過言でないと思われる。私流に言えば"The half-halt"は"前進力を内蔵する抑制の扶助"であって馬術の要諦である。

〔参考書〕

1) Gunnar Hedlund:This is Riding, Harrap, London, 1981.

2) Dietrich Felgendreher:Back to Basics, The Half-Halt, Dressage&CT, P,36 Oet, 1982.

3) Brilish Horse Society:Equitation,Training of Rider and Horse to Advanced Levels, 1982.

4) Molly Sivewright:Thinking, Part3, 31 The half-halt, P, 307, J. A. Allen, 1979.

5) 印南　清：馬術読本、中央公論社、昭和46年（1971）

6) 日本馬術連盟：「馬術教範」昭和49年（1974）.……その他……

前　主　将　か　ら

平　石　哲　男

『結果が総て』という点から見て、自分が主将を務めた去年一年、これは失敗でありました。

主将の任に就き、まずやろうとした事は、馬の調教方法の見直し。『輪乗りを中心とした基本的運動を正確に行ない、同時に基本的扶助を見直す。』というものでしたが、〝従来の北大方式とのギャップをどう埋めたら良いか解からない〟、〝自分自身経験も実績も無いに等しく、確たる方針が解かっていない〟　等の理由により、成功しませんでした。それらを埋める為、部班運動とミーティングを極力行ない、最後まで押し通しましたが、単に僕が部員皆に強制したにすぎなかったようです。ただ、私個人の考えですが、やはり基本的運動、基本的扶助は文字通り基本なのですから、他の運動の妨げとならない程度に取り入れた方がいいのではないかと思います。

７月に、公認大会を北大主管で開催させてもらいました。場所は碧雲クラブを借りました。ところで碧雲クラブで公式試合が開かれるのは初めて、また私達も半沢杯以外、大きな試合を主管したことがないということで、部員達、碧雲クラブ関係の方、ＯＢの方、皆に世話をかけてしまいました。特に部員達には、過大な労働を負担させてしまいました。

しかし、試合を主管する事には、いくつものメリットがあると思います。まず馴致をしてから試合に臨めます。また、クラブ内の各役職がどうあるべきかはっきりします。それに、今回はあまりにも作業が多かった為、そんな余裕は無かったでしょうが、部員皆んなにやり終えた時の満足感、自分達でもできるという自信が生まれれば最高だと思います。これも私個人の考えですが、碧雲クラブ、北大馬術部共催の試合は、毎年開催したらいいと思います。

最後に、この一年間、現役の皆んなはもちろん、岡田監督、半沢先生、ＯＢの方々、石狩乗馬クラブの方、碧雲クラブの方、札幌競馬場の方、その他いろんな方にお世話になりました。本当に有難うございました。

木材　建材　一般金物　塗料　建築金物

有限会社 まるへい商事

札幌市北区北24条西５丁目☎736-5331～3

役員紹介

主　　将

町　田　憲　司

◎　現在のクラブの状況

○　戦　　績　　5年連続全日学団体出場ならず

○　馬　　匹　　１０頭（サラ８頭、中半・軽半１頭ずつ）

ドンホッパー	15才	昨年功労馬を授かる。馬体に老いを感じるが、まだまだ元気。
北　　姫	12	体力、素質は十分。北日学の二走を目標に／
北　　雛	10	馬格は小さいが、調教ができており、小障碍程度なら確実。
北　皇　子	10	昨年、全日本に初出場。来年に賭ける。目標、日本一。
北　　耀	15	今年が最後のチャンス。ピーターも最後に花咲くことだろう。
北　紫　雲	8	ＯＢの野中さんに調教を依頼している。北日学を目標／
ノ　エ　ル	11	昨年１０月より、ＯＢの斉藤勝雄氏より寄贈していただく。
北　　冴	8	馬格、素質は十分。今年、障碍を確実に／
北　　銀	6	今年で２年目。半沢先生、ＯＢの名越さんに調教を依頼する。
北　　玲	5	新馬。石狩乗馬より１０月に交換入厩。ＯＢの長屋さん調教中。

○　部　　員　　１７名（1年目５名、２年目９名、３年目３名、うち女子９名）

○　年間経費　　６００万円、収入元の３００万円はバイトによる。

○　バイト　　朝日新聞、乾草作業、競馬場（中央・道営）、生協棚卸、等

○　練習時間　　（冬 ― AM 5：30～7：45／夏 ― AM 5：00～7：30）いつでも見に来てください。

○　目　　標　　北日本学生大会において、二走、総合の権利を３頭以上とり、全日学に団体で出場すること。

後悔したくない。精いっぱい、自分の信じる道を突き進みたい。現在、部員が減少傾向にある。このことに関して、確かに不安がないわけではない。だが、過ぎたるは及ばざりし、であり、後悔先に立たず、なのだ。今、一番大事なことは、部員一人一人が気迫と誇りを持ち、クラブ全体が覇気に包まれ、一心一体となることだろう。

団体を組む、という目標。これは、決して私一人のものではない。一人で成せるものでもない。１７

人の部員と、大勢のＯＢの方々、そして、１０頭の馬たちがいる。負けてなるものか。声援に応えるためにも、恩返しできることは“勝つ”ことだけだ。愛馬１０頭のためにも負けてはならない。そして、自分自身のためにも、後悔を残したくない。やるだけ、せめてやるだけ、クラブのために、自分のために、そして、馬たちのためにやろうと思う。

東京近辺の方々、全国大会に応援に来てください。大勢来てください。現役も全員連れていきます。

副　　将	小役丸　千加子
主　　務	山　田　和　男
馬　　匹	福　島　光　絵
飼　　料	西　村　幸　祐
会　　計	小役丸　千加子
副　　務	中　村　康　利
薬　　品	佐　多　康　子
作　　業	久　光　経　司
馬具・備品	半　田　友　子・石　井　信　昭
記　　録	真　鍋　直　子
レシート・コンパ	河　野　淳　子
衛　　生	佐　藤　佳　子・高　橋　知　子

昭和59年1月～12月　決算報告

会計　小役丸千加子

〈収　　入〉

項目＼月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計
部　費	20,000	17,000	17,000	16,000	14,000	21,000	0	0	52,000	12,000	16,000	8,000	193,000
アルバイト	37,400	171,100	199,500	18,280	18,000	469,270	2,000	551,090	419,200	379,500	192,685	88,800	2,546,825
補　助	60,000	4,860	103,800	200,000	100,000	0	41,000	180,200	400,000	0	520,000	956,700	2,536,560
そ の 他	68,800	27,104	191,937	13,652	58,992	165,140	28,000	218,724	409,471	289,703	79,390	33,150	1,649,946
計	186,200	220,064	512,237	247,932	188,992	655,410	71,000	984,697	1,283,871	681,203	808,075	1,086,650	6,926,331

〈支　　出〉

項目＼月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計
飼　料	0	35,520	314,625	0	281,230	156,190	1,730	125,265	88,125	258,560	114,800	25,000	1,626,045
蹄　鉄	0	255,000	0	0	200,000	0	0	96,000	200,000	0	210,000	0	961,000
薬　品	0	0	22,380	0	0	0	4,458	124,455	10,500	0	0	0	161,793
輸　送	144,242	8,702	21,545	22,442	40,791	34,666	5,500	279,222	646,196	214,929	82,446	0	1,500,681
作　業	32,200	0	0	11,920	750	0	0	41,950	4,393	4,810	1,815	2,250	100,088
馬具・備品	0	3,320	6,888	21,300	12,100	600	2,730	15,000	1,140	2,518	500	1,634	67,730
文　化	30,758	77,950	89,658	0	37,729	12,175	4,720	42,577	38,198	15,520	59,103	27,575	435,963
そ の 他	31,400	36,900	25,254	149,969	179,124	316,691	146,738	387,435	507,724	26,261	201,360	52,643	2,008,718
計	223,221	384,937	441,239	223,931	751,534	532,102	229,384	1,052,678	1,496,276	522,590	670,024	334,102	6,862,018

昭和５９年度　行事報告

3月30日
対東北大学定期戦（於北大）
4月3日～4日
七大戦（於九州大）
5月6日
三大戦（於帯広畜産大）
5月13日
第12回半沢杯記念馬術大会（於北大）
5月28日
新歓コンパ
今年は死者が1人も出ませんでした。
6月21日
オーロラホマレ号離厩式
6月23日～24日
北海道自馬馬術大会（於岩見沢R・C）
7月28日～29日
北海道地区馬術大会（公認）（於碧雲クラブ）
連日のきついどかた作業、みんなおつかれさま。
8月5日～8日
北日本学生馬術大会（於北里大）
昼は蠅、夜は蚊の大群と戦う毎日。ホント、暑かったですねぇ。
8月10日～18日
日高合宿
競馬、落馬、8キロマラソン、疲れたぁ。
8月25日～26日
北海道馬術大会（兼国体予選）（於畜大）
9月9日
山下杯（於酪農学園大）
フロンティア牧場祭
一年目初めての試合
9月26日
オオカリヒメ号離厩式
9月28日～30日
東日本馬術大会（於馬事公苑）
10月10日
北大駅伝…女子チーム準優勝！
ゴージャスライフ号離厩式…いびつな顔でした。
10月2日～8日　1・3年目合宿
8日～14日　2・3年目合宿
10月14日
ＯＢ戦
しろ君はパンくい競争のあんパンを食べました。
10月21日
烈々風号離厩式
10月20日～29日
全日本学生馬術大会（於馬事公苑）
11月3日～5日
全日本馬術競技会（於馬事公苑）
11月4日
水産学部対抗戦（於東山乗馬クラブ）
上本兄、お世話になりました。
11月17日～18日
ＦＭＣ
11月18日
北将号離厩式
12月2日
学内卓球大会
12月8日
スカイナーホース号離厩式
12月17日
スターライト号離厩式
12月29日
忘年会
12月30日
もちつき

木くずの入ったおいしいおもちでした。

1月2日

初乗り

1月3日～8日

冬合宿

恐ろしくしばれたけど、ダイヤモンドダストは

きれいでした。雪中サッカーも皆燃えたね！

2月6日

雪祭り外乗

3月1日

追い出しコンパ

本当に御苦労様でした。これからもお世話にな

ります…。

太田装蹄所

☎782-6084

札幌市東区伏古10条1丁目15番15号

昭和５９年度　戦績報告

★ 東北戦（４月30日　於北大）

使用馬匹……ドンホッパー、北皇子、北雛、ノエル

北大選手……中村、高田、真鍋、福島

戦　　績……北大　-176.25　　東北大　-3　　負

★ 三大戦（５月６日　於帯畜大）

使用馬匹……柏星、柏蘭、飛勝

北大選手……佐多、西村、田中

戦　　績……１位　酪農大　　２位　帯畜大　　３位　北大

★ 第12回太奏杯・半沢杯・河田杯記念馬術大会（５月13日　於北大）

〈複　合〉

				馬場減	障碍減
１位	高橋	駿駿	酪農大		0
２位	谷山	北姫	北大 (3)		0
３位	町田	北皇子	北大 (3)		0
	丹野	北雛	北大 (4)		失　権
	国枝	ノエル	北大 (4)		失　権

〈中障碍〉

				減　点
１位	中井	駿閃光	酪農大	-4
２位	高橋	駿駿	酪農大	-8
	町田	北皇子	北大 (3)	失　権

〈小障碍〉

１位	山口	クロスサハラ	フロンティアRC	0
２位	工藤	クロスサハラ	フロンティアRC	0
３位	山田	アパッチエース	岩見沢RC	0
５位	平石	北冴	北大 (4)	0
	谷山	北姫	北大 (3)	0
	山田	オーロラホマレ	北大 (3)	-0.25
	陣川	オーロラホマレ	北大 (2)	-1
	小役丸	スターライト	北大 (3)	-3
	久光	ノエル	北大 (2)	-3.5
	丹野	北雛	北大 (4)	-4.75
	半田	北皇子	北大 (2)	-16
	平山	北紫雲	北大 (4)	-24
	田中	北将	北大 (2)	失権（タイムオーバー）
	森田	烈々風	北大 (4)	失権（タイムオーバー）

★　第19回北海道自馬馬術大会（6月23・24日　於岩見沢RC）

〈複　合〉

				馬場減	障碍減
1位	安藤	柏星	帯畜大	-122.4	-15
2位	土井	ザ・チャーリー	日高KF	-136.4	-10
3位	森田	ドンホッパー	北大(4)	-141.4	0
	平石	北冴	北大(4)	失権	
	町田	北皇子	北大(3)	失権	
	田中	北将	北大(2)	失権	
	谷山	北姫	北大(3)	失権	
	丹野	北雛	北大(4)	失権	
	山田	北耀	北大(3)	失権	
	平山	北紫雲	北大(4)	失権	

〈新人　新馬〉

3位	小役丸	スターライト	北大(3)	0
	真鍋	北皇子	北大(2)	0
	森田	烈々風	北大(4)	-8
	田中	北将	北大(2)	-8
	平山	北紫雲	北大(4)	失権

〈第4級馬場馬術〉

				得点
1位	庄内	サクラプリンス	札幌馬術研究会	618
2位	五十嵐	柏美	帯畜大	515
3位	中川	オオカリヒメ	北大(4)	505

〈第3級馬場馬術〉

				得点
1位	青木	サクラプリンス	酪農大	393
2位	米田	サベルニック	旭川RC	378
3位	田中	サンルイスシキー	函館競馬場	357
	中川	オオカリヒメ	北大(4)	330

〈第2級〉

1位	水上	キタノコンゴー	旭川RC	292
2位	三浦	緑優	酪農大	290
3位	中村	キタノコンゴー	石川RC	289
	中川	オオカリヒメ	北大(4)	281
	高田	ドンホッパー	北大(2)	222
	田中	北将	北大(2)	失権

〈M級C〉

平石	北冴	北大(4)	失権
山田	北耀	北大(3)	失権

〈ハンティングB〉

1位	土井	ザ・チャーリー	日高KF
2位	安藤	柏星	帯畜大
3位	吉田	旋風	岩見沢RC

〈L級〉

				障碍減	タイム
(婦人)1位	宇野	ヒダカレディ	浦河高校	0	35"89
2位	小役丸	スターライト	北大(3)	0	44"39
3位	瀬川	ヒダカレディ	浦河高校	0	47"41
(一般)	谷山	北姫	北大(3)	-3	1'07"25
	丹野	北雛	北大(4)	失権	
	平山	北紫雲	北大(4)	失権	

〈M級B〉

				障碍減	タイム
1位	土井	ザ・チャーリー	日高KF	0	1'16"34
2位	森田	ドンホッパー	北大(4)	-4	1'26"14
3位	山畠	騄龍	酪農大	-4	1'27"39

★第9回日本馬術連盟公認北海道地区馬術大会（7月28・29日　於碧雲クラブ）

〈第4級馬場馬術〉

				得点	タイム
1位	青木	サクラプリンス	酪農大	587	8'13"
2位	小野	キタノコンゴー	石狩RC	495	8'13"
3位	武笠	セニョールホース	碧雲クラブ	479	8'15"
	中川	オオカリヒメ	北大(4)	393	9'00"

〈第3級〉

1位	中村	キタノコンゴー	石狩RC	384	7'19"
2位	小野	キタノコンゴー	石狩RC	383	7'05"
3位	中村	ウィンドン	石狩RC	368	6'32"

〈第2級〉

1位	田伏	白峰	岩見沢RC	290	5'20"
2位	登内	キタノコンゴー	石狩RC	285	5'02"
3位	宮浦	レーシングマック	碧雲クラブ	261	5'10"
8位	陣川	ドンホッパー	北大(2)	247	5'46"
	佐多	オオカリヒメ	北大(2)	失権	8'46"

〈L級〉

				障碍減	タイム
1位	森	カイドウ	日高育成	0	1'05"74
2位	山田	旋風	岩見沢RC	0	1'08"55
3位	中島	柏蘭	帯畜大	0	1'10"74

平山	北紫雲	北大(4)	失権	

〈新人〉

				障碍減	タイム（ジャンプオフ）
1位	阪本	ヒダカレディ	浦河高校	0(0)	59"23 (36"22)
2位	モニックホーゲル	レオナード	日高KF	0(0)	1'02"58 (43"55)
3位	西口	コジロウ	柏友会	0(0)	1'07"93 (49"21)
	中村	北皇子	北大(2)	-4	1'01"80

〈新馬〉

1位	勝田	カールビンソン	日高KF	0(0)	1'00"33 (46"29)
2位	吉田	シャトラン	岩見沢RC	0(0)	1'11"90 (49"42)
3位	斉藤	J.J	石狩RC	0(0)	1'02"24 (43"08)
	平山	北紫雲	北大(4)	失権	
	森田	烈々風	北大(4)	失権	
	平石	北紫雲	北大(4)	失権	
	丹野	北雛	北大(4)	失権	

〈M級B〉

				障碍減	タイム
1位	安藤	柏星	帯畜大	-4	1'22"44
2位	吉田	白峰	岩見沢RC	-4	1'26"18
3位	安藤	セニョールホース	帯畜大	-4.25	1'28"49
	森田	ドンホッパー	北大(4)	失権	
	平石	北将	北大(4)	失権	
	町田	北皇子	北大(3)	失権	
	平石	北冴	北大(4)	失権	

〈複合〉

				馬場減	障碍減
1位	安藤	柏星	帯畜大	-124.5	0
2位	佐藤	カナディルホース	碧雲クラブ	-129.33	0
3位	森田	ドンホッパー	北大(4)	-132	-4
	山田	北耀	北大(3)	-144.67	-4
	町田	北皇子	北大(3)	-142.67	-7
	平石	北将	北大(4)	失権	
	丹野	北雛	北大(4)	失権	
	平石	北冴	北大(4)	失権	

〈セントジョージ賞典馬場馬術〉

				得点	タイム
1位	庄内	サクラプリンス	札幌馬術研究会	881	8'51"00
2位	中川	オオカリヒメ	北大(4)	585	6'24"11
3位	五十嵐	柏美	帯畜大	578	8'41"04

〈ハンティングB〉

				障碍減	タイム
1位	安藤	柏星	帯畜大	0	1'42"30
2位	渡辺	柏蘭	帯畜大	0	1'45"80
3位	町田	北皇子	北大(3)	0	2'02"00
	森田	ドンホッパー	北大(4)	失権	
	平石	北将	北大(4)	失権	

〈S級B〉

1位	安藤	柏星	帯畜大	0	1'08"09
2位	高橋	騄駿	酪農大	-1.25	1'16"30
3位	久保田	コジロウ	柏友会	-8	1'07"00
5位	森田	ドンホッパー	北大(4)	-29	1'51"00

★第20回北日本学生馬術大会（8月5～8日　於北里大）

〈学生賞典〉

				得点	タイム
1位	金沢	ゼット	酪農大	472	7'27"04
2位	青木	サクラプリンス	酪農大	444	8'34"85
3位	安藤	柏星	帯畜大	410	7'58"65
5位	中川	オオカリヒメ	北大(4)	388	8'02"07

〈二回走行〉

				一走目	二走目
1位	山畠	騄龍	酪農大	0	0
2位	中野	マコロード	東北大	-4	0
3位	永井	飛勝	帯畜大	-4	0
4位	町田	北皇子	北大(3)	-7	0
6位	森田	ドンホッパー	北大(4)	-8	0
	山田	北耀	北大(3)	失権	0
	平石	北将	北大(4)	失権	失権
	谷山	北姫	北大(3)	失権	失権

〈総合〉

				調教	耐久	余力
1位	森田	ドンホッパー	北大(4)	-145.7	0	0
2位	斉藤	アリゾナパイ	北里大	-141.3	0	-5
3位	吉田	騄鶯	酪農大	-155.5	0	-1.2
14位	町田	北皇子	北大(3)	-159.2	-60	-5
	山田	北耀	北大(3)	-166.3	-90	0
	谷山	北姫	北大(3)	-164.7	-142.4	-5
	平石	北将	北大(4)	-163.3	失権	
	丹野	北雛	北大(4)	-166.3	失権	
	平山	北紫雲	北大(4)	-171.8	失権	

〈中障B〉

小役丸	スターライト	北　大 (3)	失　権

★第31回北海道馬術大会（兼 国体予選）（8月25・26日 於帯畜大）

〈総　合〉

				調教	耐久	余力
1位	吉田	旋風	岩見沢RC	-133	0	-10
2位	佐藤	カナディアンホース	碧雲クラブ	-125.5	0	-20
3位	高橋	騄駿	酪農大	-140.8	0	-5
7位	森田	ドンホッパー	北大 (4)	-138.6	0	-15
9位	上本	ホープ	北大 (4)	-139.3	-30.4	-5
	谷山	北姫	北大 (3)	-167.3	-40.	失権
	山田	北耀	北大 (3)	-157.5	-179.6	失権
	平石	北将	北大 (4)	-160.5	失権	

〈成年馬場馬術〉

				得点	タイム
1位	瀬川	アブラル	札競	877	7'34"
2位	下屋敷	コウジョウ	日高育成	853	6'54"
3位	庄内	サクラプリンス	札幌馬術研究会	816	9'19"
6位	中川	オオカリヒメ	北大 (4)	466	9'37"

〈成年障碍〉

				減点	タイム
1位	土井	ザ・チャーリー	日高KF	0	93"06
2位	安藤	柏星	帯畜大	-4	101"70
3位	森田	ドンホッパー	北大 (4)	-8	106"90
	山田	北耀	北大 (3)	失権	
	谷山	北姫	北大 (3)	失権	

〈L　級〉 婦人

1位	五十嵐	柏栄	帯畜大	0	1'00"60
2位	浦野	聖麗	北星RC	0	1'07"70
3位	西口	コジロウ	相友会	0	1'12"40
	福島	北皇子	北大 (2)	-11	1'22"90

〈一　般〉

				減点	タイム
1位	下屋敷	ヒダカレディ	日高育成	0	55"21
2位	中島	柏蘭	帯畜大	0	1'00"43
3位	大西	トカチムサシ	柏友会	0	1'05"76
5位	久光	北皇子	北大 (2)	0	1'10"00
	陣川	北耀	北大 (2)	-3	1'16"96
	田中	北将	北大 (2)	-27	2'10"51
	平山	北紫雲	北大 (4)	失権	
	平石	北冴	北大 (4)	失権	

★ 北日本学生馬術選手権大会（5月20日　於帯畜大）

〈男　子〉

			馬場減	障碍減
1位	上　本	北　　大	-405	0
2位	高　橋	岩　手　大	-419	0
3位	高　橋	酪　農　大	-423	0

〈女　子〉

1位	土　屋	帯　畜　大	-421	-277
2位	戸　松	弘　前　大	-459	-295
3位	五十嵐	帯　畜　大	-469	-281

★ 第6回山下杯記念馬術大会（9月9日　於酪農大）

〈中　障〉

				減　点
1位	高　橋	騄　　駿	酪　農　大	0
2位	藤　木	騄　閃　光	酪　農　大	0
4位	小役丸	ドンホッパー	北　　大 (3)	0
6位	山　田	光　　耀	北　　大 (3)	-13

★ 第20回東日本馬術大会（9月28～30日　於馬事公苑）

〈婦　人〉

				減　点	タイム
1位	国　枝	ドンホッパー	北　　大 (4)	0	86"71
2位	林	タケデンパワー	明　　大	-19	96"18
3位	別　府	メジロカウンタック	山梨県馬連	-7	87"28

〈ハンティング〉

1位	川　俣	サイレント	ミカモRC	0	77"84
2位	栃　木	カルガリ	宇都宮農高	0	77"44
3位	千　脇	コンフュージョン	岩見沢RC	0	78"89
	町　田	北　皇　子	北　　大 (3)	0	97"11

〈選抜中障碍〉— ジャンプオフ

1位	植　田	アイスターキング	日　　大	0	36"64
2位	林	タケデンパワー	北総RC	0	36"85
3位	伊　藤	メジロサンゴ	日　　大	-4	41"68
	町　田	北　皇　子	北　　大 (3)	-3	85"99
	森　田	ドンホッパー	北　　大 (4)	-8.5	95"15

〈内国産馬障碍飛越競技〉— ジャンプオフ

1位	武　宮	ミス・ラミー	アバロン乗馬学校	0	38"83
2位	鶴　見	ツルノシャープ	大平山麓RC	0	42"17
3位	川　俣	サイレント	ミカモRC	0	43"57
	森　田	ドンホッパー	北　　大 (4)	-4.25	109"10

町田	北皇子	北大(3)	失権	

★ 第34回全日本学生障碍飛越　(10月20～29日　於馬事公苑)
第27回全日本学生3－Day Event

〈二回走行〉

				一走目	二走目	(ジャンプオフ)
1位	塚本	桜白	日大	-7	0	-4
2位	加藤	月笛	関学大	-7	0	-8
3位	安藤	柏星	帯畜大	-4	-4	
12位	森田	ドンホッパー	北大(4)	-11	-4	
	町田	北星子	北大(3)	失権		

〈総合〉

				調教	耐久	余力	総減点
1位	堀田	ビギンザビギン	専修大	-122	0	$-5\frac{1}{2}$	$-127\frac{30}{60}$
2位	塚本	桜白	日大	$-125\frac{1}{3}$	-2	$-1\frac{1}{4}$	$-128\frac{35}{60}$
3位	吉沢	ユウコク	専修大	-130	0	$-1\frac{3}{4}$	$-131\frac{45}{60}$
15位	森田	ドンホッパー	北大(4)	-159	-38	$-6\frac{3}{4}$	$-203\frac{45}{60}$

★ 第36回全日本馬術大会 (11月3～5日　於馬事公苑)

〈中障害ハンティング〉(スピード・アンド・ハンディネス)

				減点	タイム
29位	森田	ドンホッパー	北大(4)	-10.83	96"67(減点含)
	町田	北皇子	北大(3)	三反失権	

〈標準中障害〉

33位	森田	ドンホッパー	北大(4)	-12	72"84

〈中障害(選択)〉

	森田	ドンホッパー	北大(4)	三反失権

〈コンソレーション〉

11位	町田	北皇子	北大(3)	0, -8.5	37"34, 77"22

★ 第1回東山乗馬クラブ乗馬大会 (兼水産対抗戦) (11月4日　於東山乗馬クラブ)

〈L級〉学生対抗戦

				減点	タイム
1位	吉崎	函白	北水	0	1'23"0
2位	上本	サム	北水	0	1'31"4
3位	小役丸	サム	北大(3)	0	1'34"2
4位	中村	ハーケン	北大(2)	0	1'34"5
	久島	函白	北大(1)	失権	

最優秀選手　渡辺　　優秀選手　中村

全　日　学　観　戦　記

西　村　幸　祐

二回走行を見て

今年も、全日学へ行く機会を得た。数字を書くのは、抜きにして、（戦績報告にまかせて）感じた事だけ、端的に述べてみる。

今年の二回走行は、馬歴２年の私が見ても、去年よりはるかに見劣る内容であった。去年の宇野さんとか尾辻さんを見ていると、どう転んでも、満点以外はない様に見えたが、今年は、危なっかしくてしようがなかった。

ドンホッパーについては、１日目、私の目にも、飛ぶのがいやそうに見えた。そして、準備運動でもバーをぽろぽろと落していた。本番でもやはり、数多く落として、ＮＨＫの出場が夢と消えた。２走目は、逆に、飛ぼうという力強さが感じられた。そしてその通り、２走目は、少ない落下であった。

北皇子は、わからない。連続で止まってしまった。

信じるということは、大切な事であるが、それ故に、難しい事である。私たちが、二回走行で勝つためにはどうしたら良いか。あるいは総合馬術で。

いろいろあると思うけど、技術がない私たちに出来ることで、たぶん間違っていないと思うのは、信じる事と、同じ意味あいで、バカになる事だと思う。馬術部を、義務感でやっているうちは、つまり消極的なうちは、ちょっと及ばないと思う。敗ける事は、罪悪に近い事だと思う。障害を飛ばない馬は肉である。人が悪くても馬が悪くても、コンディションが悪くても、責任がどうであろうと、敗けは敗けである。馬は、代々うけ継ぎ、うけ継がれて行く事を念頭におきながら、先輩に甘えず、のちの後輩に任せず、自分が、馬を肉にするつもりで、やればできる。できないのはやらないから。

INAGEYA
有限会社 東京稲毛屋
代表取締役 広　山　二　郎
東京都渋谷区神宮前６－11－４
☎03－400－5929

ALL JAPAN 観戦記

中　村　康　利

1984年ALL-JAPANは、１１月、東京馬事公苑で行われた。先のロス・オリンピックで、陶器選手とザ・シントーが好成績をあげた直後の試合であり、僕の様な馬歴１年そこそこの者にとっても、大変興味深かった。

大障碍は、陶器選手が、ザ・シントー、ステップ・バイ・ステップ、ラムロッドの３頭を擁して出場１位から３位を独占してしまった。中野選手、戸村選手等、騎手の技術では陶器選手に勝る人はいたが敗退してしまったのは、馬のせいだけなのか。乗り方か。

ところで、北大は、町田兄と北皇子、森田兄とドン・ホッパーが出場した。

ドンは、ハンティング、中障碍でゴールし、国内産と選抜中障の権利を獲得した。しかし、ドンは、長びく東京遠征の為、かなり疲れていて、とても両方の出場は無理であった。森田兄は、選抜中障碍に出場したが、三反抗失権となってしまった。結果だけから判断すれば、出場しなかった方が、とも思ったが、後輩としては、出場してくれて良かったと思う。

北皇子は、試合前、全然落ち着かず、準備運動もままならない状態で、結果の失権は、予期できないものではなかった。障碍に対して、厭気をさして、あんな北皇子を見るのは初めてであった。コンソレーションも、ゴールはしたものの、内容は良くなかった。

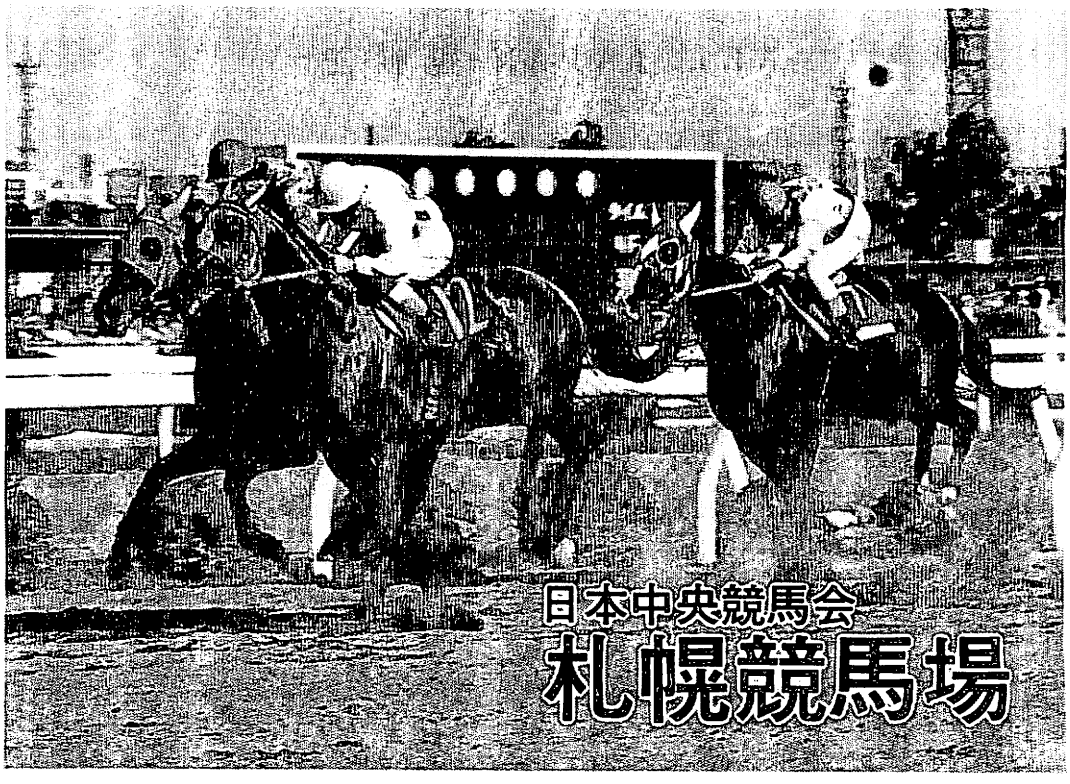
ALL・JAPANで見た限り、学生と一般上級者との技術差はかなりある。選抜中障碍位になると、学生が、連続して上位に食い込むのはかなり難しい。試合馴れ、度胸、カン、コースのとり方、随伴、誘導、踏み切らせ方、連続障碍飛越……否、勿論、乗り方の差異もあろうが、まず基本的な騎座の安定挙の感覚が違う。しかし、所詮俺達は学生馬術と変に割り切らず、少しでも彼等に追いつこうとせねば、勝利への道すら見えないと思う。

社会保険　国民健康保険
老人医療　生活保健　護法　指定医

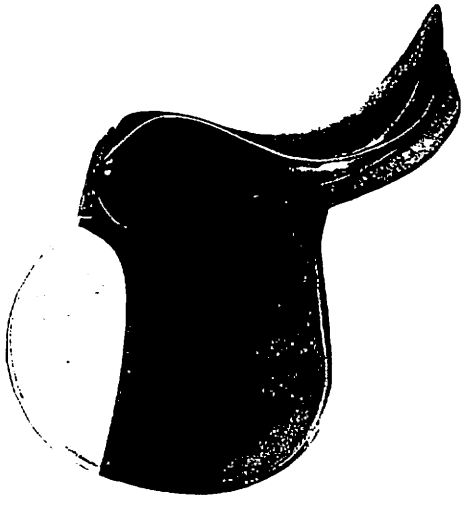
庄　内　歯　科

歯科医師　庄　内　貞　夫

札幌市白石区本通２丁目北81号番37号　☎861-2504



国産馬具の開発と輸入乗馬用品はオリエントに



◎鞍の修理うけ承ります。

ORIENT **オリエント商事**

本　　社　北海道歌志内市神威２６４
〒073-03　☎（012542）㈹2152
工　　場　〒073-03　☎（012542）㈹2014
東京営業所　東京都台東区浅草橋５－12－６
明治堂ビル〒111☎(03)㈹866-2131

★★皮革総合メーカー★★

習得しませんか
本格的乗馬技術

素晴しい馬達と共に…

北星乗馬クラブ

●銀鞍会 ●少年騎馬隊　会長 松岡靖雄

札幌市南区白川1814－3　TEL (011) 596－2407

大自然の価値ある休日

乗馬・テニス・ペンション

FRONTIER HOLIDAY RANCH

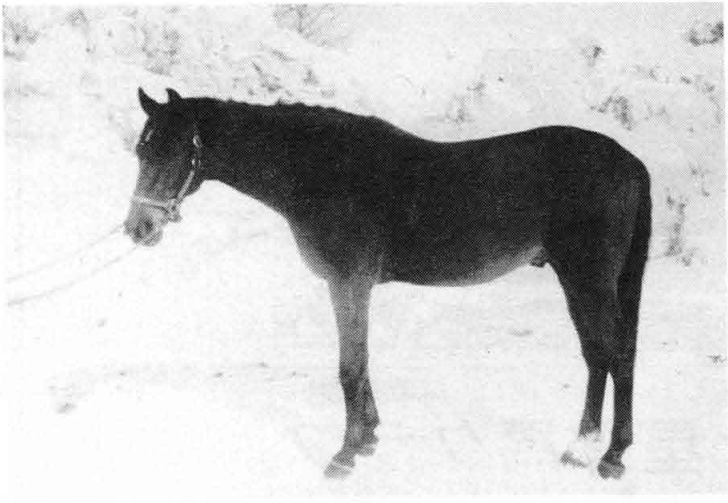
フロンティアホリデイランチ

〒061-33 北海道厚田村しっぷ165の3

TEL (0133)66－3858

調 教 報 告

ドン・ホッパー号



騙　中半血　黒鹿毛
昭和46年6月30日生
勇払郡早来町産
父　オーシャチ（サラ）
母　ハゴロモ（トロ）

ドンホッパー号調教報告

森　田　　敏

ドンに乗ってきた一年、多くの失敗をした。「どうして失敗したのか」今、自分でわかる範囲でこの問いに答えながら、練習及び試合をふり返ってみたい。

まず冬期の練習。調教審査の点を上げるため、伸縮、アピュイエ、常歩で大きく歩かせる練習を主な課題とした。今から考えると、これらの課題は伸縮を除いて僕には難しすぎたようだ。そしてもっと先にやらねばならないことがあったのだ。

それが結果として出てきたのが、碧雲クラブでの公認だった。多くの拒止をした。最後の選抜中障では、情けないことに騎手が恐怖心を抱いていた。拒止の原因は、今考えると、①飛越を促す脚の推進が馬に伝わっていない。②こぶしの動揺による邪魔、そして何よりも馬を信じることができなかったことが根本的な原因だったと思う。「馬を信じること」については最後に書くことにする。

北里での北日本。2回走行の1走目は水濠着水を含め3落。2走目で2落すると権利が危なかった。2走目。水濠のアプローチで思いきり推進して着水はなく、他に一落したものの権利をとれた。総合では、他馬のミスで運良く優勝することができた。本当にうれしかった。

帯広の道体。成年障害は、結果的には2落で3位だったが、内容は目もあてられなかった。準備運動で、段階を踏まずに大きな障害を飛ばせたため、止まられたのである。試合中、必死で脚を使った。ドンは「いったいどうしたんだ」と思っただろうが、全部飛んでくれた。道体は、推進すればドンは飛ん

でくれるということがわかった試合だった。

東日本では、西川さんの助言で、準備運動中、伸縮のこぶしと脚の関係がなんとなくわかり、それが試合にもつながり、一歩前へ進んだようだった。しかし、アプローチのスピードのなさ、誘導の悪さから拒止を招いていた。

北大に帰ってからは、伸縮の感じを確かめるとともに水濠の練習をした。小野さんの助言により、水濠にバーをかけたり、踏切りの1.5ｍ手前にバーを置いたりし、完飛できるようになった。

全日学では２回走行の１走目、やはり誘導ミスから最終障害をきられ、その他の障害もぎこちなかった。その日の夜、増田さんから〝準備運動で、①速歩飛越で良い状態になってから駈歩飛越をすること②踏切りが合わなくても叱らない。逆に飛んだことをほめてやって気分を乗せてやる〟という助言を頂き、２走目の準備運動でそれを実行した。するとドンはだんだん自分で踏切りを合わせてきた。そして駈歩でも人馬ともに何の躊躇もなく飛越できた。本馬場でも、竹柵オクサーでつまって一落した他はスムーズにコースを回ることができた。

全日本でも、予選はドンが踏切りを選ぶのを待つことで、つまりながらも飛越しゴールできた。しかし、最後の選手権では準備運動でドンが踏切りを見つけ、楽々と飛んでいく状態をつくれないまま本馬場に入り三反失権をしてしまった。準備運動の失敗と脚不足が原因だったと思う。馬の疲れもあったかもしれないが、僕の思い上がりだったと思う。僕のレベル、ドンの体力から考えて、選手権は棄権するべきだったと思う。

以上の経過から、僕なりにわかったことは、次のようなことである。

① 練習は最も必要なことから課題とするべき。僕の場合、障害へのアプローチであった。

② 障害はまず推進（しかも馬の邪魔をしないで）。すなわち、脚への従順性をふだんの練習で常に確認すると同時に、バランスをくずさずに脚を使えるよう訓練すること。

③ 障害前のアプローチで大切なことは、踏切りは馬が見つけ、人間は推進しつつ待つだけ。そしてまっすぐに向かうこと。（全くあたり前のことだが）

④ 馬の状態、人間のレベルを考えて、試合にエントリーすること。

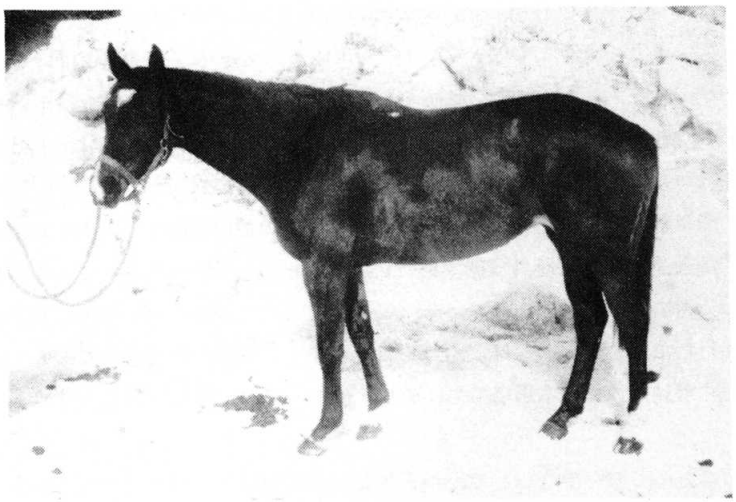
⑤ 試合は練習してきたことを試す場であり、試合ではじめて何かができるなどとは期待してはいけない。練習してきたことだけが頼りになる。逆に言えば、頼りになるような練習ができたかできないかそれが既に勝敗を決めているのだと思う。

本当にあたり前のことばかりだが、僕はこれらのことをできなかったから失敗したのだと思う。そして、〝馬を信じることができなかった〟のは、これらの前提条件を僕の方で無視していたからなのだ。人間がするべきことをしていないで、何が〝馬を信じられない〟だ。

後輩たちが、僕の失敗をくり返さないよう祈ります。この騎乗報告だけでは、僕の失敗が十分には理解できないかもしれませんが、その時は直接僕に聞きにきて下さい。

最後になりましたが、多くの失敗をしながらも、全日学、全日本に行けたのは、半沢先生、岡田監督、小野さん、瀬川さん、宮浦さん、西川さん、増田さん、高須さん、その他多くの諸先輩方、そして、同輩・後輩のみなさんの助言・励ましのおかげです。本当にありがとうございました。そして、老いた体で頑張ってくれたドンに対しては、感謝のことばが見つかりません。

北　姫　号



牝　サラ　鹿毛
昭和49年３月27日生
静内郡静内町産
父　アステック
母　ヤマニンザザ

北姫号調教報告

谷　山　豊三郎

ミヨ子はメール（今はこの世にいない）をいじめていた。実際、親身になってつき合うと可愛いのだが、サブチーフになったことがなかったため、意地悪い娘だというイメージが強かった。さらに、この馬にはほとんど乗ったことがなかった。このようなミヨ子に乗せてもらえることになり、不安でいっぱいだったが、チーフになる以上、その馬の命を預るのだから、精一杯尽くし、全日学に連れていけるようにがんばろうと思った。

〈ミヨ子の馬体〉ミヨ子に乗り始めた頃、彼女は背中をひどく痛がっていた。そのため正反動が全くできなかった。このことはかなりのマイナスであった。鞍を載せる前後や曳馬のときにマッサージをし、鞍の載せ方をいろいろ工夫し、さらに鞍を替えた。しばらくすると、だんだん痛がらなくなった。それでも正反動を多めにやったときなどは、必ず痛がっていた。さらに彼女は鞍傷になりやすいようであった。そこで上本兄がQにやっておられた方法を真似て装鞍していたら、乗れなくなる程度には、ひどくならなかったし、徐々に良くなっていった。そういうわけで彼女の背中からは常に気が抜けなかった。

ミヨ子の脚は丈夫だと言われている。しかし、年齢は12歳だったし、左前肢に骨瘤があったし、さらに彼女の脚は細い。したがって、あまり油断はできなかった。彼女はフレグモーネになりやすい。このフレグモーネで２回ほど人馬共に大いに苦しんだ。半沢杯の後と公認大会の直前である。彼女は治療した後、とても不機嫌である。呼んでも尻を向けたまま、こっちを向こうともしないこともあった。

馬事公苑の宮崎さんの話だと、ミヨ子は腰も痛いのではないか、とのことだった。

しかし、ミヨ子は12歳のオールド・ミスのくせに元気でスタミナはどの馬にも負けない。スティープルで気違いのように走りまくった後でさえ、しばらくすれば平気な顔をし、あくる日の余力には、全く

疲れを感じさせなかった。

〈ミヨ子の舌〉右側にベローンと伸ばし、ペロペロとひっきりなしに動かしている。銜を越えているときもあるし、越えていないときもある。フランス鼻革をぎりぎりまで締めたり、頭絡の長さをいろいろ変えたり、太い銜身の銜にしたりしたのだが、あまり効果はなかった。そんなとき、上本兄がわざわざ「ハックモア」と「ゴムの舌押え」を買ってきてくださった。「ゴムの舌押え」を初めて使ったとき、彼女がかなり動揺した。口をパクパクさせたり、ねじらせたりしていやがっていた。でも舌は出さなかった。出せなかったようだ。しかし、やがて慣れてきたら彼女は舌を出すようになった。それでもさすがにミヨ子だけあって、しばらく使うのをやめて、再び使うと、短い間だと舌が出せないのである。そのため、「ゴムの舌押え」は試合前だけに使うことにした。「ハックモア」は強力であった。わずかな操作で彼女は敏感に反応した。これは外で走るときに多く利用した。

ミヨ子の舌出しには、最初のころ少し気を使いすぎた。自分の技術の無さを棚に上げて、舌を出したときに手ではたいたりもした。そのため、このことで信頼関係がかなり崩れたように思う。このことに気をとられていては他のことが何もできなくなると思い、気にしないように心がけた。秋には、調子のいいときには（彼女の単なる気まぐれにすぎないかもしれない）、舌を出さないで運動することもできるようになった。

〈ミヨ子の性格〉ミヨ子は憶病である。何か変な物があると近づこうとしないし、ちょっとしたことで驚く。大型トラクターや大型の除雪機にはなかなか慣れなかった。牛の放牧地の近くを通そうとしても、通ろうとしなかったし、その場所に近づいていることに気がつくと、そっちに向かうのをいやがったりしていた。でも秋には子牛と鼻先をくっつけるまでにはなった。彼女は他の馬が驚いたら、われ先にといっしょになって驚いている。外乗のとき前方に馬を見つけると、急に歩く速度が増し、追いつこうとする。群集心理からかと思っていたら、それだけではないらしく、追いついたら、追い抜こうとする。

ミヨ子には、わがままなところがある。わがままは絶対に許してはいけないと思う。しかし、わがままか否かを見極めるのは難しい。

ミヨ子は神経質である。よそに行くと、あまり飼いを食わなくなる。ハッタン氏の講習会が札幌競馬場であったときは、ほとんど飼いを食わなかった。駆虫剤も嫌いらしく、臭いがする間はその飼桶では飼いを食わなかった。彼女は曳馬のとき、いくら草がいっぱいあっても、その場所にじっとしていることはなく、せかせかと動き回る。

ミヨ子は水たまりや壕が嫌いである。放棄手綱で歩かせているときや、曳馬のとき、ほっておけば、必ず水たまりを大きく避けて通る。そのため、外乗や曳馬のとき、できるだけ水たまりに入れ、小さい壕を飛ばし、従えば十分ほめて、えさを与えるようにした。すると、小さい壕だったら、前に立たせれば、ちゅうちょなく飛ぶようになった。

こういうミヨ子には馴致がかなり重要であるように思える。校内だけでなく、近くの公園などへ行って運動してみたりしたのだが、まだまだ不十分だったようである。もっと多くの時間を割いて行うべきだった。

〈調教〉クラブの方針が馬場馬術の基本運動を中心とした調教であり、ミヨ子はそういう類の調教はうけてなかったので、効果はあるのではないかと思い、その方針に従った。

ミヨ子はせかせかと走りがちなので、まず、ゆっくりと落ち着いた一定のペースで走ることを目標にした。さらに輪乗りで内方姿勢をとらせ、顎を折らせて譲らせることを目ざした。それらのことは練習のときはなんとかできるようになったが、試合ではほとんどできなかった。また、彼女は後肢の踏み込みが良くなかったため、斜横歩のような横運動も少しずつ無理をしない程度にやっていった。さらに停止のときは、必ず四肢をそろえるようにさせた。

ミヨ子は障碍を怖がっていた。それには、大まかに分けて、障碍に対する恐怖と障碍を飛ぶことによる苦痛の２つが関係していたように思う。小さなまたげるような障碍を曳いて、飛んではほめ、えさを与えるようなことをひんぱんにやっていれば、前出の恐怖は少しは小さくなっただろう。しかしこれはチーフの怠慢から秋になってやっとひんぱんにやるようになった。チーフが上達し、例えば、決して口を引っぱらずに一定の衝受けで、背中に尻をぶつけずに、バランスもくずさずに飛越できれば、後出の苦痛も柔げられたことだろう。しかしチーフはそれほどの技術をもっていなかった。秋にはいろいろやり方を変えていい方向に向かいつつあるのではないかと思っていたのであるが、時すでに遅し、であった。

〈試合〉５月中旬に半沢杯、６月下旬に道自馬、７月下旬に公認大会、８月上旬に北日学、８月下旬に道体、というのがこの一年のスケジュールであった。目標は当然北日学、そのため北日学の二回走行の１３０㎝に合わせるべく、半沢杯では１１０㎝、道自馬では１２０㎝、公認大会では１３０㎝を目ざした。しかし、実際にはそのようにはいかなかった。半沢杯の後、怪我で２週間くらいまともに運動できずに折り合いが悪くなり、チーフの舌出しへのこだわりから信頼関係が危うくなり、さらにチーフの時間配分の悪さから、曳馬にほとんど行ってやれなかったことが拍車を加えた。こんなふうであったため道自馬においては、Ｌ級ではゴールはきったものの、複合の障碍で失権してしまった（調教審査も悲惨だった）。公認大会は直前の怪我のため棄権したため、試合では、１２０㎝も飛ばないうちに、いきなり北日学の１３０㎝に臨むことになってしまった。このころは、興奮していても、飛べば良しとする、荒っぽい、せっぱ詰ったやり方であった。こんなやり方で良い結果が生まれるわけがない。総合では、スティープルで人馬転しながらもなんとかゴールをきり、余力でも帰ってきたものの、二回走行では、二走行目のほうが一走行目よりも飛越した数は増えたものの、二走行とも失権してしまった。道体では身分不相応にも成年障碍に出場し、馬をびびらせ、そのため、総合でも余力で失権してしまった。９月上旬の酪農戦では、障碍は低く、経路も簡単であったのだが、やはり興奮し、走ろうとするのを障碍間でおさえたのだが、おさえこみすぎになり、走行がスムーズでなかった。

〈ミヨ子のスティープル〉乾草バイトや作業のとき、腰が正常なときはできるだけ力を使うところを選んだ。ミヨ子に乗って、スティープルに出場するためである。彼女のスティープルについては良からぬ過去を二・三、耳にした。恐怖を感じると共に、それに耐えれるような体力をつけようと考えた。技術が未熟な分、体力でカバーするより他に道はないと思ったからである。

しかし、実際スティープルに出てみて……、北日学、すなわち北里大のときは、途中、立木に脳天をぶつけたり、人馬転はしたものの、距離が短かったのに救われた。それでも腕は棒になっていた。ところが、道体、すなわち帯大のスティープルは長かった。２０日程前に北里大で一度スティープルを走っているから、少しは慣れただろうと思っていたら、全く逆、速歩区間からミヨ子の目の色が違っていた。D区間のスタート後のスピードは北里大のときとは、比べものにならない程だった。途中、もっと速度を落とせと祈る（「願う」段階を越えて「祈っ」ていた）だけでなく、ひきょうにも、降りたいとさえ思った。ゴールをきったときも、ゴールをきったうれしさよりも、無事に終わって良かったという思いであった。

ところが、障碍を飛越する感じは、暴走はしているものの、馬場での飛越とは異なっていた。いい感じなのである。普段のミヨ子にはない、体全体を使った大きな飛越……、障碍間は地獄であったが、飛越中はまことに心地よかった。

結局、馬事公苑は夢で終わった。ミヨ子の大切な一年をミヨ子に無駄におくらせてしまったようだ。

「姫、ひめ」と可愛がってくださった監督さん、半沢杯前には、ほとんど毎日のように馬場に来てくださり、教えてくださった小野さん、「どーだー」と時々声をかけてくださり、するどい指摘をしてくださった斎藤勝雄さん、遠い函館からいろいろ心配してくださった上本兄、ＯＢ、先輩、後輩の皆さんどうもすみませんでした。

悲しそうな目をして障碍を飛んでいたメール

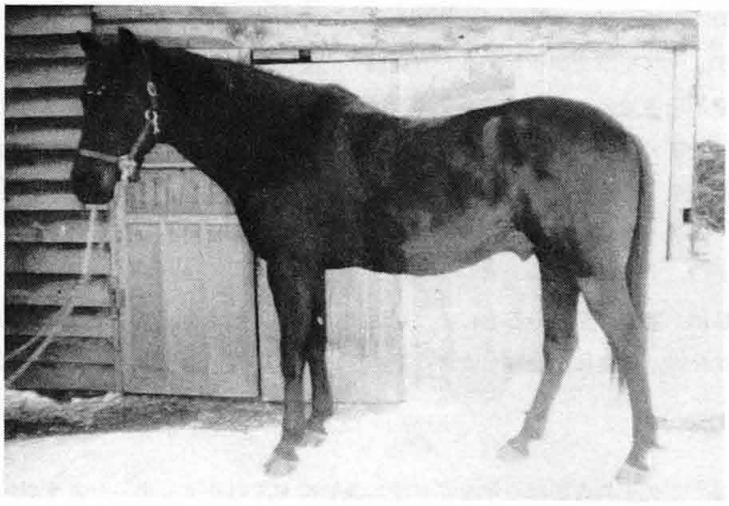
自分の運命を悟ったのか、馬運車にどうしても乗りたがらなかったパール

脚をひきずりながら、舌を少しかんで歯をくいしばって速歩をしていたＱ

馬術部の馬はしあわせなのかなー

クラブをはなれた今日このごろ、こんなことばかり考えています。

北　騅　号



騙　軽半血　黒鹿毛
昭和51年２月23日生
北大馬術部産
父　ドンホッパー
母　羊　蹄

北騅調教報告もどき

丹　野　宏　昭

第一章　試合までの冬期間

12月13日からチーフとしての騎乗となった。軽い扶助で従順に反応する。ならば、課題はまず騎手がうまくなることで、しかし、ただ人間の練習だけで長い期間をつぶすわけにはいかない。技術がなくてもできること、人との精神的な撃り、信頼関係を深めることを常に心掛けた。練習内容は、発進、停止移行、回転、伸縮等基本的なことと外乗などで、無理をせず、無難な所までで止めた。

年が明けてからは障碍も始めた。この頃から推進不足や馬を緊張させられないことにやっと気付き出した。しかしそのくせ、拍車や鞭をなるべく使うまい、と変にいこじになっていた。とにかく拍車をどんどん使ってでも一度緊張した状態を作るべきだったろう。速歩でうまく伸ばせず駈歩になってしまう。

外乗は快調で、雪深い所も、見知らぬ車庫の中へも平気で入って行き、吹雪の中でも落ち着いていた。ただ、除雪車は苦手で、一度むりに近づけて反抗されてからは、遠くを通り過ぎ、何回か回数を重ねて除々に近くを通るようにした。

３月に札幌競馬場で講習会に出た。教わった半減却があまりにもうまくいくので驚いた。これは収穫だった。でも、ゆっくり走らせろというのは、それまで感じていた緊張不足と相反するようで迷った。

４月の半ば頃、知らないうちに拍車が入っているように思えて拍車をはずしてみた。馬が渋々動いているように思えたから、代わりに、扶助に従う度にどんどん褒めてエサをやると、見違えるほど気分良さそうに活き活きと動いた。夕方の曳馬にも適用した。口笛で停止したらエサをやるだけでなく、舌鼓で歩いたら歩かせながら褒めてエサをやり、さらに舌鼓で歩度を伸ばしてエサをやる。後で考えると、これは頻繁にやるべきでない。人間よりエサに気を取られるし、エサをやらないと気嫌を悪くする。

初めての障碍を跳ぶのは恐かったが、彼は平然と跳んでしまった。土塁は止まり、避け、ＯＢの助け

でやっと乗った。翌日からはすなおに乗ったが、自力で乗せれなかったことに不安が残った。径路回りは一応難なくこなす。放棄手綱でも障碍を跳ぶ。しかし、どこか迫力が足りなく、馬が何の気なしに勝手に跳んでいるようだ。騎手が跳ばせているという感じがなかった。

5月に入ると、とにかく推進と緊張させることに重点を置き、また、人馬共に径路走行に馴れるため障碍4～5個くらいの小径路回りをよくやった。小さな障碍に慣れると大きな障碍をこわがるのではないか、と、少し大き目の障碍ばかり使っていたように思う。

第二章　試合期間

5月13日、半澤杯。騎手が緊張して固くならないためにも、練習中と同じく馬は跳ぶ、と信じて楽な気持で出場した。複合の障碍は2番障碍で失権。ズルズルと止まり、わけがわからなかった。ＯＢに推進不足を注意され、小障には、出しすぎると思うくらい推進し手綱を短くもって挑んだ。でも、あせりはせず、小障なら絶対大丈夫だと信じていた。結果、ゴールは切ったが一反抗。

それからの練習は、とにかく推進と馬を手の内に入れることを心掛けた。それさえできれば練習で十分通用すると思った。

6月23日、岩見沢にて道自馬大会。今度は大丈夫、と複合に出たが障碍で三反抗失権。それでも小障は絶対大丈夫、と小障に出たが三反抗失権。

さすがに焦ってきた。次の公認大会は小障だけにしようかと迷ったが、やはり北日学をあきらめる気にはなれず、複合に出ることにした。

7月28日、碧雲クラブには公認大会。複合予選で三反抗失権。小障も三反抗失権。

8月8日、北里大にて北日学の総合。総合一本にしぼったが、耐久の一番障碍で失権。その夜のレセプションは悪酔いした。翌日、余力も失権。内容は悲惨。

次の道体は小障にしか出ない。北日学からの帰りの馬運車の中では、ワラをつかむ思いで道体までの練習計画を考えていた。北大に着いて馬を降ろすと、首の肉が食いちぎられていた。道体は不参加。

第三章　反　　省

○　馬乗りは勤勉でなければならない。

○　自信をもつことは大切だと思う。でも、それは自分勝手な思い込みであってはならない。

○　恐れてはいけない。冷静に、積極的に働きかけて、できるまでやり通すべし。

○　客観的に見るためにも、他の人に見てもらい、助言を求めるべきだ。

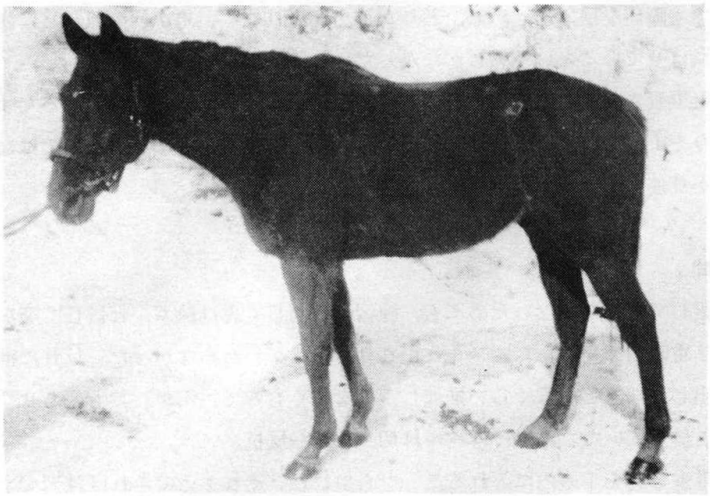
○　馬の気持を考える、ということを誤解してはいけない。身勝手な判断や神秘主義に陥ってはいけない。

最　後　に

暗い内容の調教報告もどきは書きたくなかった。自信を持って調教報告と呼べる充実したもの、ＯＢから、「生意気な奴だ。自慢話だらけじゃないか／」と批判されるくらい、成功ばかりを書き連ねたかった。

ガキ　すまない。

北　皇　子　号



騙　サラ　栗毛
昭和51年５月12日生
新冠郡新冠町産
父　アストラルグリーン
母　ハーバーガール

北皇子号調教報告

町　田　憲　司

去年の11月にギャランの調教を任されてから、ちょうど一年になります。去年の今頃というと、暗中模索の段階で、何をしたらよいのか、何をすべきなのかが全く分からず、試行錯誤するのみでした。いや、この時ばかりでなく、シーズンを通して錯誤ばかりを繰り返し、進歩が無く、不本意な試合ばかり残しておりました。ただし、この本意というのは、ただ１人で自惚れ、名馬という過去の栄光にすがる空想からくるものでしかありませんでした。しかし、この１年を振り返ってみると、なんとかこの甘えからの数々の失敗を克服し、ギャランに汚名をそそぐことは免れることができたように思えます。不安でどん底の境地にいた私に、最後まで期待を掛け、自信を与えてくれた部員みんな、ＯＢの方々に心より感謝いたします。

— 一歩後退、二歩前進 —　　レーニン

半沢杯で、なんと三反失権。だれもが信じられなかったことでしょう。私自身、ギャランに裏切られたという屈辱感に埋もれたい気持ちでいっぱいでした。しかし、実際はそうではなく、未熟な騎手は練習では決して無理をせず、挑戦せず、試合にはぶっつけ本番で臨んだのです。まさしく、騎手が馬を当惑させ、裏切ったといっても過言ではありません。水濠等の馴致不足。人間の技倆不足。馬への思いやり、馬術に関しての認識不足。すべて、思い上がりに過ぎなかったのです。奮起一番。ギャランを信じ一からやり直しでした。

７月の下旬に公認大会がありました。会場は碧雲乗馬クラブ、主管は北大ということで、馴致は十分にできました。しかし、試合の一週間前の経路回りで、高さ９０㎝の箱障碍に乗り上げてしまい、数回の反抗を呼び起こしてしまったり、北星乗馬クラブの野外コースの乾濠を十数回と拒否され、どうでも飛ばせることができないで終わるような練習をしていました。こんな状態でしたから、満点の試合をす

る自信などは全くありませんでした。最後の調整日である試合の３日前になりました。何かをつかんでやろう、自信となるような何かを。そんな思いで野外コースを走って伸縮をやっている時でした。ふっと馬が歩度を十分に落とし、脚による推進力が衒に出てくる手応えを感じたのです。脚と拳との連携、人馬一体とはこんな状態を言うのだろうか。そう心の中で呟いていた自分を思い出します。扶助の明確、脚の絶対的権威、そして人馬の信頼関係、これらの感覚を自分の身をもって体験できたのが、この時始めてでした。そして、自分の脚をもって馬を動かし、手の内に入れて障碍に向かうことの重大性を知らされました。それからというもの、障碍で反抗されるということは、考えられぬことでした。そう、騎手のケアレスミスがない限り。

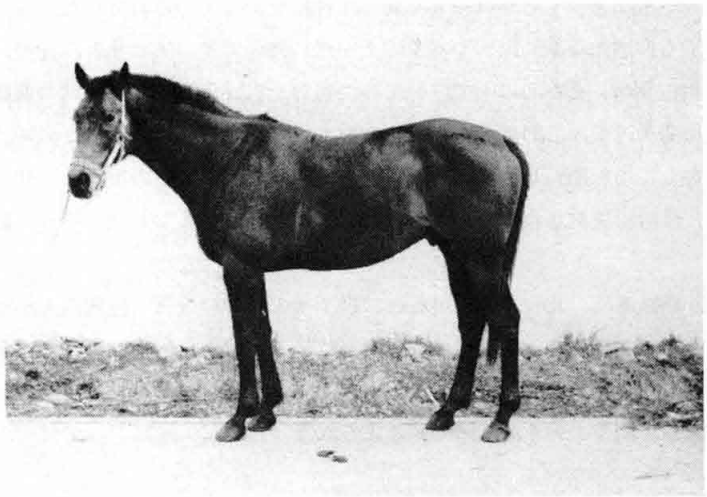
試合の結果は、誘導ミスで拒否、経路違反、北日では人馬転と、騎手そのものの改善、技術向上が求められる試合もありましたが、ハンティング３位、北日では二走で４位に入賞でき、何とか東日本と全日学の出場権利を得ることができました。確かに、自他共に満足できる試合ばかりではありませんでした。しかし、自信を持って試合に臨み、納得のいく試合ができるようになったのは、私にとって最大の収穫であったと思います。

その後の東京での試合で感じたことは、いかにして騎手が試合場で馬の能力を引き出し、練習の成果を出すかということです。ギャランの場合、特に濠や川の馴致を考えなくてはいけないのですが、それに加えて、馬の沈静を第一条件に踏まえた準備運動をし、馬が騎手の命令を待つ姿勢にするということが大事でしょう。あとは、練習で得たものすべてを出し切れば勝てないはずがありません。もちろん、試合を踏まえた練習をしたという前提の下で。練習では、例えば経路回りにおいては、決して結果が大切なのではなくて、その内容や準備運動の組み立て方が重要であり、失敗を恐れず、失敗こそ大事に心に留めながら誤行錯誤することが大事なのです。そうして、むしろ、こうした自信、勝てないはずがないと言い切れるだけの自信を持つことこそが大切なのかもしれません。

あと１年あります。いや、もう１年しかありません。私を、ギャランのチーフにしてくれたこと、そして、もう１年乗せていただけること、現役部員に感謝いたします。そして、ＯＢの方々にも。特に、名越さん。いつも遠くから私達を見守っていてくれました。今思えば、９０㎝の箱障碍も乾濠も、兄に乗っていただけば飛んだに違いありません。しかし、兄は決して乗ってやろうとは言われませんでした。やっとのことでこの障碍を飛び越え、心の障碍を乗り越えた時、私は最高の悦びと自信を得ることができました。すべて兄の御陰です。ありがとうございました。そして、ギャランよ。一年間御苦労さま。そして、ありがとう。おまえの能力のすべてを出し切ってやれなかったことを、許してくれ。今年こそ、おまえを日本一にしてやるよ。おまえには、それだけの能力と素質を携えているのだから。

― 最大の失敗は努力をやめることであり、失敗こそ宝である ―　北皇子

北　　耀　　号



騙　サラ　鹿毛
昭和46年３月17日生
浦河郡浦河町産
父　ヘンリーヒギンス
母　タマホマレ

北　耀　号　調　教　報　告

山　田　和　男

二年目の冬に野中兄より引き継ぎました。しかし冬合宿までは乗り代わりがあったし、右後肢球節が変形してしまったり馬体的にあまりいい状態でなく、速歩運動を練習に取り入れられるようになったのがようやく２月頃からでした。その時から現在までちようど一年間北耀号に騎乗させていただいたことになります。しかしながら先シーズンは、はっきり言って調教などと呼べることはやっていなかったと、今になって思います。私が北耀号に調教していたというより、一方的に馬から教えてもらってばっかりでした。試合などはその典型で、人は単に乗っかっているだけで馬がどんどん飛んでくれるといった感じです。そうこうしているうち馬がもっているペース、準備運動のもっていき方などがようやくわかって来るようになり、自分でも一試合度に上手くなってきたなという実感がつかめるようになってきました。ですから北耀号、並びに北耀号を調教してきてくださった諸先輩方には大変感謝しています。

馬から教えてもらってばかりだったというものの、先シーズンも自分なりには考え、練習内容その他いろいろと試行錯誤を繰り返したつもりです。ここ数年来の我部たっての願いである、全日学団体出場のメンバーの１人となるべく頑張ってきたにもかかわらず、北日本学生馬術大会において騎手の未熟さによりスティープルで落馬をしてしまい、総合の権利をとれませんでした。調教審査も真面目に取り組み、なんとか無難に終えれたし、余力は満点で帰ってきたのに、本当に馬に対して申し分けないことをしたと思います。また二走においては一走目、最終障碍で失権、二走目は満点といった具合で北耀号の力を出させてやれなかった自分が悔しくてなりませんでした。

結局その次の道体もどうも人が力んでしまい、悩む毎日が続いたのを覚えています。そのうち試合での失敗の原因を考えられるようになり、単に連続が苦手というだけでなく、障碍ひとつひとつに対するアプローチの問題だと認識しました。そこでそのような事を念頭において練習しようとしたのですが、

どうしてもうまくいかないのです。脚扶助に対してピョコピョコとはね上がるのみで前へ出ていかなかったのですが、これを決して許さず何しろ前へ前へ出すようにと心がけて乗るよう努めました。競技においても結局は脚扶助に対してどれだけ従順に前に出るかということが第一条件になるのではないでしょうか。先シーズンは自分なりに考えてやっていたものの、この第一条件が欠けていたことがわかりました。脚扶助により前へ出る。恥ずかしい話ですがもう一度ここからチェックしなおし乗っています。

以上のような事からやり直し、馬の反応は実際大きくかわってきました。脚扶助に対し以前より、はるかに敏感になり、動きがさらっとしたものになってきたような気がします。速歩運動においても脚扶助に対して反抗してピョコピョコと上にあがるようなことがなくなり、自分でも信じられない程の進歩です。実際今やっていることは歩度の増減が主です。雪が深くなる前に馬場ではかなりできるようになってきてましたので今は野外で歩度の増減をやっている最中です。

脚扶助に対して敏感になってくれば、その他の運動もやりやすく驚きながら毎日騎乗しております。キャバレッティーでも今一、前進気勢がなかったのですが、今では前進気勢を持ちながら通過するので、乗っていても気持ちよく、積極的に通過させるようにしています。キャバレッティーだけでなく、キャバレッティーバーも以前は詰まりながら通過するかバタつくかいずれかだったのですが、安定はしてないものの前進気勢を持って通過しはじめています。前進気勢が出てくると人の方にも余裕がでてくるようになり、障害で体をひねって右へよれたりするのも敏感に感じとれるようになりました。そこでキャバレッティーでもキャバレッティーバーでも真直ぐ向かって真中を通過し、真直ぐ抜けることをもよく心して騎乗しております。

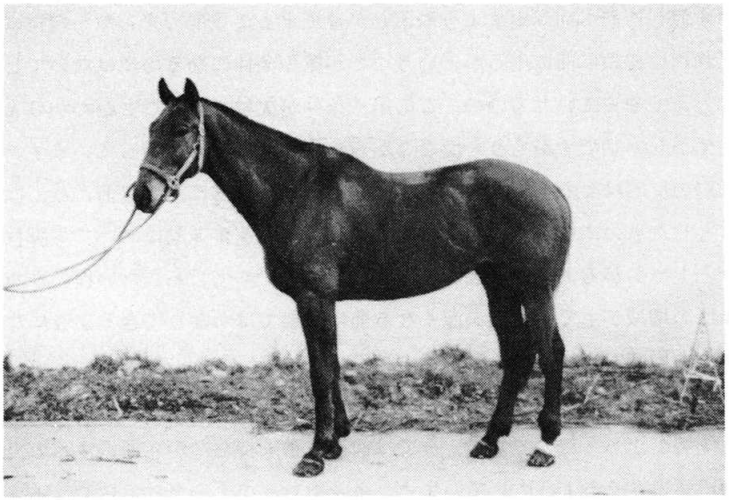
脚扶助に従順にさせるという意味で、野外でのいろいろな低障害を飛越させており、できるだけ落ちついて真中を通過するよう心がけて練習しています。スティープルの馴致もかねているのですが、今は騎手の練習だと思ってやっています。その他調教審査も春までに、地面が固く大きな運動ができなくなった時にやるつもりです。昨年どうにか無難にこなせたところを今度はもっと丁寧に乗りたいと考えています。

昨シーズンもそうだったのですが馬体の調子が気になって遠慮がちに乗ってしまう部分があるので、馬体を第一に考えながらも人馬のトレーニングを意欲的にやっていきたいと思います。北耀号とともに悔いのない様精一杯青春しようと意気込んでいます。

人生は楽しい。	～９月６日（木）当番日誌より

自由とは恐しい。	～11月18日（火）当番日誌より

北　紫　雲　号



騙　サラ　鹿毛
昭和53年４月27日生
静内郡静内産
父　ホープフリーオン
母　クイーンマリーナ

北紫雲号調教報告

平　山　復　志

昨シーズン井上兄と僕が調教してきた北紫雲号を、今シーズンも僕がひきつづき調教する事になりました。去年、後年の試合では、試合場に入るのをきらい、入っても扶助をまったく無視して興奮するという悪い状態になっていました。シーズン前、このように扶助を無視したりする状態に落ち入らせないために、馬なりの運動でなく、要求した運動を正確に行なわせるように輪乗中心に運動を組み立てました。伸縮、移行、前肢旋回など簡単な扶助に軽快にしたがわせる練習を繰り返したのですが、緊張状態を作れないままに、気分悪く終ってしまう日がしばしばありました。しかし、北大の馬場の障碍ではまず拒止するということを知らない馬で、少々緊張の高まりが足りない状態でも障碍をこなしてしまうので、知らず知らずのうちにこんなもので何とかなるのではないかと自分勝手に思い込んでいたようです。

シーズンに入って最初の試合、半沢杯では、準備運動で興奮してしまって勝手に走られ、まったく運動できないままに出場する事になりました。結果は２反、練習が何も試合に生かされていない事がショックでした。今思えばこの時すぐ先輩同輩のみんなに頼んで乗ってもらい、みんなの力を借りれば良かったと思います。岩見沢で行なわれた北海道自馬馬術大会もほとんど同じ状態でした。碧雲クラブで行なわれた北大主管の公認大会では、時前にほとんど同じ経路を回っていたにもかかわらず反抗を繰り返し、４番障碍までしか行けないという非惨な結果でした。しかし、この碧雲クラブでは宮浦さんや主将の平石におしえてもらい、実際に乗ってもらうことができ、いろいろな事がわかって良かったと思います。北里大学での北日学は、順備運動だけ見れば最高のできだったと自分では思っています。特に調教審査の前の感覚は口が柔らかくなり素直で、初めてマリが自分の方に目を向けてくれたようで非常にうれしく思いました。調教審査は初出場にしては良かったと思います。しかし障碍では、準備運動は良かったのにもかかわらず反抗をゆるしてしまいました。畜大で開催された北海道馬術大会は今シーズン

最後の試合でありぜひともゴールしたいと思い、ＯＢの井上兄にも騎乗していただきました。ここでも準備運動では反抗する所もなく前進気勢もあり、かなり良いのではと思ったのですが、結果は２番障碍で反抗、その後は障碍に近ずくのさえいやがるという状態でした。その後僕が乗って出場しても同じ事でした。結局、昨シーズンの悪癖を直せないままシーズンを終ってしまいました。

今一年を振り返ってみて反省すべきことはたくさんありますが、特に思う事は、もっと早くからいろいろな人にマリに乗ってもらうなどして調教のし方を教わるべきであったという事です。自分が馬に乗り始めて３年ぐらいしかたっていないのだから自分だけの力で調教しようなどという考えは絶対に良くないと思います。素直な気持ちになってマリを部の中の一頭の馬という目で見て良い方向に持って行く方法を考え、うまい人に乗ってもらってその動きを見、自分ができていない所を自分で知る努力をすべきでした。一人で乗っていても何かうまくいかないという事はわかっても、決してどこがどう悪いのかどうすれば直るのかはわからないのです。又、人の話を聞くだけではわからない事も、人に自分の馬に乗ってもらってその違いを見る事によってわかる事が多いと思います。そういう事に早く気付いて実行すべきでした。他にもさまざま反省すべき点はありますが、すべて心を広く持つ事ができなかったという事に起因しているような気がします。

マリは、今シーズンも調教が進まなかったという理由で、一旦は離厩ということに決まったのですがＯＢの野中兄がマリの素質を信じてくれて、来シーズンもう一年北大に留まることになりました。変な癖を付けてしまい心苦しいのですが、それは決してマリの本質から出るものではなく調教の誤まりから出ている事は明白です。何とかマリの素質が引き出される事を願ってやみません。よろしくお願いします。

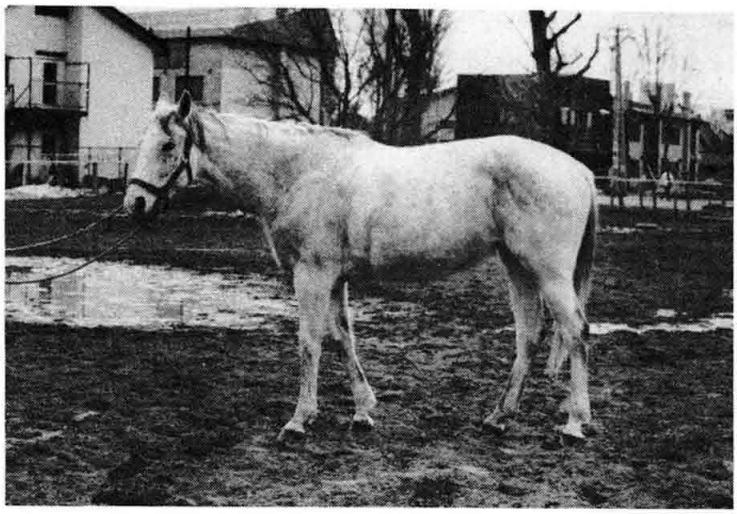
現役のみなさんも僕のような失敗を繰り返す事がないよう、心を広く持って調教にのぞんでもらいたいと思います。

平山兄が明日院試験なのに余裕の曳き馬をみせてくれた。実は夕当後のおみやげ目当てだったとか。
～９月２日（日）当番日誌より

夕日を見つめる北紫雲の目はきりりと美しくほれぼれしました♡　～５月26日（土）当番日誌より

マリーナの好みは小柄な女性。さと一妹の名言♡"マリーナは私が好きなのね……☆"
～２月24日（日）当番日誌より

ノ　エ　ル　号



牝　サラ　芦毛
昭和50年４月22日生
浦河郡浦河町産
父　フォルティノ
母　シンクイン

ノ　エ　ル　号　調　教　報　告

国　枝　由　紀

12月中旬よりチーフとして乗ることになった。

雪の季節は、馬場のコンディションが悪い為、できるだけ外へ出て、ポプラ並木や構内を走ったり、時には柵をとんだりして過ごした。外乗の良いところは、馬の歩幅を大きくしやすいこと、それに馬が注意深くなるので、馬場での時に較べてわずかな指示で敏感に反応したり、地面や障碍をよく見て通ったりすることだろうと思う。最終的にはそれらのことを馬場の中にも持ちこまなければならないが、その為の手段として外乗は大いに活用できると思う。

３月にはハッタン氏の講習会があり、それを機会に銜を幅の狭いものにかえ、ドイツ鼻革をつけた。鼻革は、しめた状態で角砂糖を１個食べられる程度が適当だということだった。初めは嫌がって頭を振ることがしばしばだったが慣れるにつれ、ゆるくても口を開けない様になった。

半沢杯について。失敗の原因は調整にある。障碍前に銜をはずしたら必ず止まるということは前からわかっていたことだったのに、それを１週間前にやってしまった。それがきっかになって人と馬のタイミングがずれ始め、日に日に溝が広がってしまった。２年の頃、帯広でノエルに何度もきられた後、久保田さんに言われた”もっと丁寧に乗れ”という言葉を今頃思い出している。目の前の試合に間に合わせなければ、とあせって根本的なところを忘れていた。

半沢杯の後、障碍に対するこだわりを作ってしまったので、これを除く為に、低い障碍を用意して、得意な速歩飛越をくり返し、馬に自信をつけさせる様な運動を心がけた。そうして10月程運動を続けた頃、右肩跛行を示すようになった。半月以上常歩外乗を続け、良くなった様だったし、６月23日の道自馬に調教審査だけでもと思い、調整期間は５日間しかなかったが、ともかく岩見沢へ連れて行った。

ところが、その道自馬の準備馬場で運動を始めたところ、初めは何ともなかったのだが途中で突然跛

行を始めてしまった。結局、試合は棄権して帰り、何故急に跛行したのか全くわからないまま、症状は前よりさらに悪くなっていた。その後２週間は20～45分程度の曳き運動を行ない、次の２週間は曳き馬15分＋常歩30～50分くらいを続けたが良くならず、ついに７月22日にレントゲンをとってもらったところ、右前球節骨膜炎であり、３ケ月の馬休を要するという診断だった。しかし27日に関節に打ってもらった薬が効いて、半月後８月14日から騎乗を開始することができた。かれこれ３ケ月近くも馬休に近い状態で過ごしてしまったので最初からやり直しのつもりで始め、手近な目標として２週間後の道体の３級をおいて、初めの５日は長期馬休明けなので無理をさせないで少しづつ運動量を増やしていくことに重点をおき、その後７日間で調整することにした。

初めの２日などはパニックでまず馬を落ち着かせることに専念しなければならなかった。慣れてからは輪乗り中心で回転を多く入れた運動を行ない、経路回りをして試合に臨んだ。準備馬場では結構いい感じだった様に思えたのだが待機馬場に移った途端、パニックをおこしてしまった。動きがせわしなくなってきょろきょろするし、こっちを向かなくなってしまった。この試合と準備運動のギャップは全くの予想外であり驚いているうちに試合が終わってしまった。もっときちんとした運動ができる馬なのにそれを形にすることができなかった。

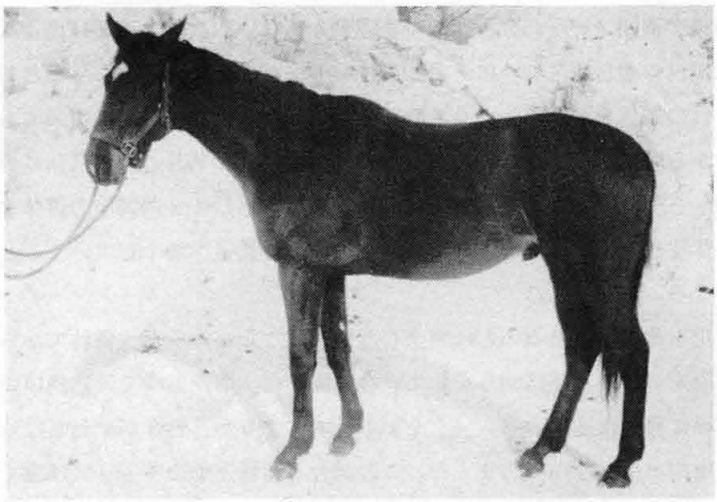
以上が私がチーフとして乗ってきた１年の流れだがこれを見てもわかる通り大事なシーズンのほとんどを馬休もしくはそれに近い状態で通ごしてしまっている。クラブの戦力となるべき１頭を使えなくしてしまった管理責任はやはりチーフであった私にあり、クラブに対して全く申し訳ないことをしたと思っている。

最後に道体以後に行なった運動、考えた事をまとめてこの報告を終わりにしたい。

まず運動の基本はやはり輪乗りだと思う。その時注意するべき事は、1.一定のペースを守ること、2.急がせずゆっくり歩かせること、3.図形を必ず守ること、4.これは講習会で聞いたことで拳について、外方一移行、前進気勢・平衡のコントロール、内方一方向性を与える、などである。何故輪乗りかと言えば馬体の柔軟性が作りやすいこと、輪乗りをもとにして広がりをつけた運動が組みたてやすいこと、それに内方姿勢を意識した輪乗りを続けるうちに無理なく馬にゆずらせることができるということだろう。このゆずった状態というのは大事で（特にノエルは馬体が伸びきって前のめりになりがちなので）こうなって初めて銜を通した人と馬のつながりができるのであり、細かい運動につなげることができたり、つめた状態で力をためたりできるのだと思う。正駈歩でも苦手だった左手前で反対駈歩ができたり10m巻きのりができたりしたのもこの為だし、実際やってみればつっぱった時との乗りやすさの違いは明らかである。移行も容易だし動きも飛らかになる。

飛越については、とにかく駈歩飛越が下手だということだろうか。速歩でならかなり大きなものまで上手にこなすのに駈歩になると踏みきる場所がめちゃくちゃになってしまう。これを解決する為に、間歩が合う様に作った連続障碍を使って踏みきりを覚えさせること、それに落ち着いた状態で駈歩をさせること。……障碍前でどんどん走らせれば、騎手は安心していられるが馬はあせってふみきりを見つけられなかったり、高さを誤ったりすると思う……初めはゆっくりした一定のペースで回らせるように気をつけてみたらどうかと思う。

北銀（しろがね）号



騙馬　サラ　鹿毛
昭和55年４月28日生
上川郡上川町産
父　ヤマブキオー
母　ソーゴータカラ

北　銀　号　調　教　報　告

半　澤　道　郎

無理にお願いして入厩させて貰った「オオカリヒメ」の離厩の話が具体的になって来た昨年の８月の初めの頃であったと思うが、平石主将から「北銀」に乗って見ませんかと誠に温かい誘いを受けた。平石君が「北冴」と二頭の新馬の責任者であったが、「北銀」は右前肢の骨瘤の故障で、未だ本格的の調教をしていないので、殆んど新馬扱いをされていたようであったが、それまで私は余り注意して彼の乗るのを見ていなかったので、私には全く新しい付合いであった。「オオカリヒメ」や「北将」に乗れなくなることでもあり、部員諸君の乗る時間を減らして相済まないとは思ったが、幾分かでも基礎的の調教のお手伝いでもできればとも考えて暫く乗せて貰うことにした。

「北銀」を見た第一印象は、馬格も馬品も良く、き甲は適当に高く長く、割に幅もあり、肩甲骨の傾斜も障害飛越に適している様に見えた。蹄角が少し大きい様で、蹄鉄工の太田さんの話では、鉄の前縁の磨耗が多いので段々に削蹄の時に修正して行けばもう少し小さくすることができるでしょうとのことであった。馬繋場に停止しているときは何時も後肢の蹄部を左右非常に近くして、一方を休ませていることが多く、前肢に多く体重をかけて居るようである。８月の頃は休んでいたこともあってか、筋肉のつき方が未だ貧弱で、何処か幼駒の感を残していた。曳馬でも肢さばきは余り上手でなく、特に後肢の球節を左右すれすれに運ぶ歩き方をする。これは生来の骨格からの癖とも考えられるが、調教で改善することができると思われる。

性質、性格は非常に素直でおとなしく、人なつこい馬で、多分可愛がられて育成されたものと思われる。少し桿威が足りない感じがするが、ゆっくり調教すればいい総合馬になる性質を持っていると感じた。可成りひどい齧癖がある他は苦になるような癖はなく、厩舎内外での取り扱いが楽な方だと思う。

さて、乗った感じは、最初は脚に敏感でなく、銜受けが悪く、口にあたると嫌がって頭を揚げ反抗し、口が敏感のように思われた。然し非常に素直で、余り興奮することがなく、少々荒い扶助を使っても常

に沈静を保ち、御し易い感じを受けた。新馬らしく、初めて見る物や変わった物には驚戒心が強く、フーフー言い乍ら近づくのを嫌がったが、繰り返すことで慣れ易く、若い時の「オオカリヒメ」のような頑固さはなかった。注意したことは、馬房の外からでも無口をかけさせる位に扱い易くすること、乗馬の際は絶体動かさないこと、乗ってから腹帯や鎧を直すときも動かさないで騎手の前進の扶助で動き出すこと、停止をさせた時は絶対動かさないこと、手入れの時は馬体の何処に触れても嫌がらない様にすることなどで、これらはある程度できるようになった。

運動では先づ第一に半停止（the half-halt)の扶助を覚えさせること、次に頭を下げ顎を伸ばすこと、できるだけ大きく歩かせること、後肢の踏み込みを良くすること、四肢を揃えて正しく停止すること、押し手綱に従うこと、内方脚に一層敏感に反応すること、蹄跡を離れて真直ぐに歩かせること、正確な図形上を歩かせること、歩度転換をスムーズに行うこと、口とのコンタクトを常に軟かく同じように保つこと、絶対に勝手なこと（騎手の意に反した）をさせないで騎手の命令に従うことなどであったが、何れもそう簡単ではない。頸礎が安定し、銜受けが良くなった位で、左側への運動は良くならないうちに冬に入って、下（地面）も悪く、私の体調のこともあって２ケ月間休止の状態で、本格的調教はこれからに期待される。然し、連続的速歩、駈歩等による肺、心筋の調教訓練及び障害飛越の調教は、専ら名越君の助力を仰いでいる。北銀が少しでも良くなったとすれば名越君の労力に負うところであり、一向に良くならないということであればその責は私にあると思います。

「北銀」について

名　越　正　泰

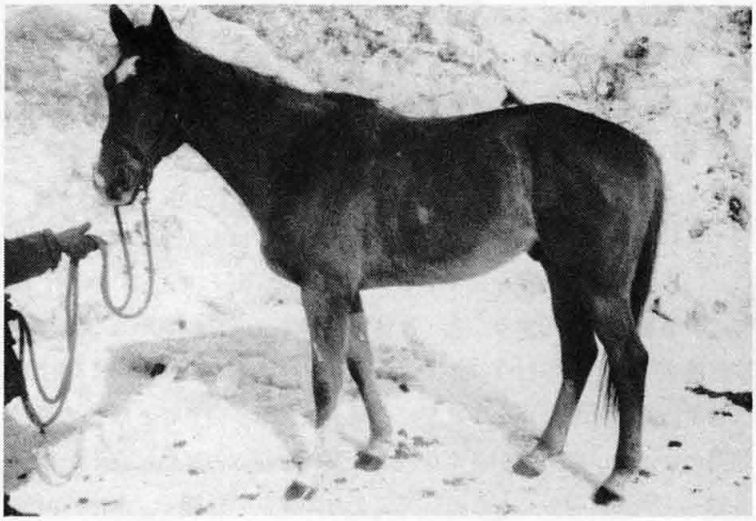
昨年の９月、半沢先生と二人で北銀に乗ることになった。馬歴４年程度の私が「新馬調教」とは生意気だとは思うが、北皇子での経験と自分の考えとを試し、調教方法を確立するためにも必要なことと思い、半沢先生の援助を受けて乗り始めた。今回の部報では半沢先生に馬体等詳しく書いていただいたので、私は、主に実際の運動に関して簡単につけ加えることにする。

北銀に乗った印象は、一見反応が鈍いようだが、実は、悍が強くしかも興奮せず落ちつきがあるというもので、障害馬にとって必要なことを備えているなと思った。そのことを上手に生かせるように、運動を組み立てることにした。まず体をほぐすためと、体力をつけるために、必ず30分以上の外乗、それからよく馬体を伸ばした速歩・駈歩を20分くらい、主に下級生にやってもらう。それから私が乗って、伸縮・回転・停止・発進を多く取り入れた、経路を想定した運動、障害も適時入れていく（20分～30分）その後、充分な整備運動を行う。以上が大まかな一日の運動である。

半年後の成果と問題点を上げると、馬体は、もう少し幅がほしいが、筋肉がつき逞しくなった。伸縮は、かなり自在性ができてきたが、もっと軽い扶助でできるようにする事（伸びた時の迫力はすばらしい！）。回転は、扶助に反抗してかかってくるところがあったが、しっかりつめて回転することで分かりつつある。障害は、やっと踏み切りを合わせることが分かってきた。時々障害につっこみぎみになるが、適度な前進気勢があり扱いやすい。全体的に見ると、まだまだ運動のスムーズさがたりない。

以上のように、まだまだ問題点が多いが、焦らず、少しづつ、確実にやっていくことで、44国体の代表馬にでもなれば、なんて思っている。

北　冴　号



騙　サラ　栗毛
昭和53年４月12日生
勇払郡鵡川町産
父　ホウシュウエイト
母　アモーレターフ

北冴号調教報告

平　石　哲　生

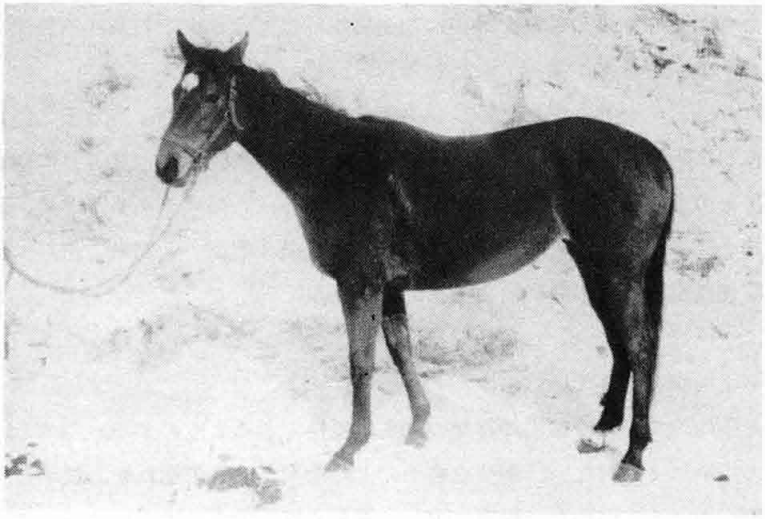
ほとんど無謀な計画のもとに、シーズン前の冬から新馬２馬に乗った。北冴と北銀である。北銀は本当に新馬という感じで、１からゆっくり調教するようにした。しかし北冴は、それまで道営競馬調教師久保さんが障碍も飛ばしていたということで、少し無理とは感じたが、シーズンで使えるよう調教を進めてみた。結局あせってしまった。幸い、まだそれほど試合に対して悪い印象を持ってないようなので、小障以下の試合に数多く出し、それと同時に調教を進めていけば、うまくいくのではないだろうか。

平石兄が２時間かけてパンク修理した自動車は１時間ともたなかったそーです。
～９月15日（土）当番日誌より

「ん～手入れの方法を忘れちゃいましたよ」by 森田兄　at 夕当
「もってけドロボー」by 平石兄　when　コンパ代しはらいの時
「どーせ私はドロボーですよ！　フン！」by　コンパ係　～３月21日（木）当番日誌より

新馬紹介

北　玲　号



牝　サラ　鹿毛
昭和56年４月８日生
幌泉郡えりも町産
父　ノーザンアンサー
母　クレメンタイン

北　玲　に　つ　い　て

長　屋　清　隆

部報というものは、体験的にみて、ＯＢその他とのコミュニケーションの場とも思えず、単なる慣習の継続に終わっているようだ。この原稿も、現役部員向けのつもりで書きます。北玲の初期調教に携わる者として、せめて後から乗る人へのメッセージ代わりにでもなればと思い、冗長になるでしょうが。（近年の部報の調教報告は簡潔に過ぎ、報告も何も、あれでは後に続く者が参考にしようがないではないか。もっともらしい事を書く必要はないけれど。頭の中にはあれだけしかなかったのかと思ってしまう。それとも、ＯＢだけでなく現役までもが、調教報告なんて読まないんだろうか。）

騎乗内容に入る前に、北玲が永く馬術部で活躍してくれるようになる事を願って、入厩前後の経緯を簡単に述べる。

僕自身、思いもよらない馬術部での新馬調教という事態なのだが、実は昨年９月の役員交代後、新役員の町田主将らから、突然その依頼を受けた。自らの現役時代に、ＯＢとの関係のあり方でさんざん悩んだわだかまりが未だに尾を曳いていて、随分迷ったものの、馬術部の現状に失望感が募る一方だったのと、現役とＯＢとの"いい関係"創りの端緒になればとの想いと、独り身の気軽さとから、結局申し出を引き受け、当時左厩していた３才の牡馬に騎乗することになった。

馬格はあるが３才なので、じっくり体力作りに専念する一年になりそうだと思っていた矢先、小野さ

んから、「御前が乗るならいい馬がいるがどうだ」というお話があった。現役と相談の上、岡田監督にも騎乗していただき、よかろうということで、小野さんの御好意に甘え、３才との交換で、４才の牝馬が昨年の10月10日に入厩した。
昭和56年４月８日生まれで、競走馬名クインクレメン
父方の祖父に有名なノーザンダンサーがおり、血統としては良いようだが、中央競馬では６着が最高だそうで、期待が持てなかったのかどうか、昨年夏の札幌を最後に競走馬生活にピリオドを打ち、石狩乗場クラブへ乗馬として入厩し、10月まで小野さんが乗っておられた。

北大入厩後の馬名募集の張紙には、部員によると思われる〝北失権〟などの文字が並び、自分達の将来を託す筈の新馬に対して、冗談にしてもそのような事のできる身の程知らずの馬鹿、無自覚ぶりに腹が立ち、幾つかの名前を提案した。そのうちの一つが「北玲」であるが、但し、この〝ホクレイ〟は、国体優勝の森本さん、大場さんを始め、多くの先輩と共にその名を残す栄光の「北嶺」と同音であり、推薦できない旨伝えたのだが、結局部員総合でこの名に決まった。

騎乗内容に入る。入厩後半年足らずの現在やっているのは、

○　三種の歩度への移行を、扶助の下にスムーズに確実に行ない、また維持できるようにする。
○　停止からの発進は、必ず騎手の指示により行ない、馬装点検中のようなバランスの崩れを、扶助と誤解する事のないようにする。静止も、イラつかない程度に少しでも長く維持できるようにする。これらは躾のようなものだと思っている。
○　肩を内へ、腰を内へ、前後肢施回などを行なって、馬体及び口向きの柔軟性の片寄りをなくす。将来の部員達はともかくとして、僕は北玲を馬場馬にするつもりはないし、また出来ないので、あくまでも総合の調教審査程度の運動に留める。
○　心肺及び筋肉の鍛練の目的で、主に北大構内で速歩・駈歩を行なう。但し競馬上がりの為、同一地点での運動は興奮を呼び起し易く、殊に襲歩に近い歩度は心肺機能強化に有効とは思うが、不可能で行なっていない。
○　低障害を一定のペースで通過できるようにし、踏切も安定させる。着地後の駈歩の手前は、回転する側に合わせる。

以上のような内容が主で、僕自身が高度な技術を持ち合わせない事もあり、基本的な事柄を確実にこなせるようにし、学生にとって乗り易く、癖のない馬になるのを目標にしている。

これまでに北玲に接して気付いた点を以下に羅列する。半年足らずではその性格の全てを掴める筈もなく、単なる思い過しの部分もあるだろうし、なにぶん新馬であるから、１ケ月も経たないうちに消えてしまう部分もあるかもしれない。

体高は１５６～１５７センチ、胸前から尻まで約１５５センチ。見た目は数字以上に小柄だが、入厩時には更に小さく見えた。当時、小野さんはあと一拳分は高くなるだろうと言われ、どうかなあと思ったが、やはり最近少し大きくなったようだ。

普段はボーッとしているが、のみ込みが早く、血の巡りもそう悪くない方だと思う。

例えば、同じ馬ならともかくも、人間がやる事をよく見ていて、真似てみたりする。入厩して1ケ月も経たない頃で素直なのを利用して、曳馬でM字乾濠の馴致をしていた折に、何回か僕の後について跳ばせた後で、僕が乾濠を跳ばずに跨いだところ、北玲も一緒になって同じ仕草で跨いでみせた事がある。ただ単に真似ただけなのか、わざわざ跳ばなくても済むものならそうしましょう。といったところなのかはわからない。

競馬上がりにしては気持ちの切り換えが早く、意外と冷静でもある。
外乗中に駈歩をさせていて物音に驚き、ひっかかってしまった場合でも、停止後暫く歩いているうちに何でもなかったように落着き、再びゆっくりした駈歩をさせることができる、といったケースがよくある。

潔癖なところがあり、運動中には小便は勿論、ボロも滅多にしない。第二農場の柵の中の子牛を、下馬して見せに近づけた時に、えらく興奮してボロをした事があるだけだ。通常1時間から1時間半の練習中は我慢し続けているのか、練習を終えて厩舎に戻ると必ずボロをする。時には練習前に馬房から出る間際に、うなってでもボロをする事がある。
潔癖性と相通ずるのか、というよりはもともと嫌いなのだろうけれども、水溜りなどには入りたがらない。行けといわれると致し方なく跳ぶ。野外の溝や濠に対しても同様で、こんな小さな溝、と思うようなものでも、跳ぶとなるとそれなりの覚悟が必要なようであるが、従順でさえあれば、馴致を重ねることにより解決できる類のものであろうし、注意力散慢で障害を尊重しない馬に比べれば、寧う利点といえるかもしれない。

馬だから当たり前ではあるが、声に対して敏感で、馬場であれ外乗中であれ、声を掛けると聞き逃すことはまずない。騎手だけでなく、まわりにもあれこれ気を使う練習中は、よほど神経をすり減らしているんだろう。

以前は如何にも初々しく、渾名のように"お嬢"さん（もうちょっと気の利いた愛称はないものか。「こらっお嬢」などと叱っても、愛称らしくもなく、どうもしっくりこない）ぽい所があったが、此頃の馬房の中での表情にはやや張りがない。環境に慣れたせいもあるだろうし、「ブリッ子をやめたんですよ」と言う者もいるが、それもあるかもしれない。

声と同様に音に対しても敏感なのは当然だが、目下の課題は、音というよりは馬にとっての騒音と、その音源となる物体が、それこそジンマシンが出る、といった形容が当てはまりそうなくらい嫌いなのを、どう克服するかという事。ブルドーザーや大型トラック、除雪車などが真暗ななか、轟音と共に、ヘッドライトや回転灯を点灯させて近づけば、ゾォーッとするのはわかるし、スターライトでも経験済みだから、出来るだけ避けるようにしているが、予知しえない状況に対しては手の施しようがない。すっかり明るくなったある朝のこと、両脇に雪が積まれた構内の歩道を外乗中、突如として曲がり角から除雪車がやってきた。引き返す暇もなく、声を掛け、なだめてやり過ごそうとしたが、興奮の極に達し、制止を振り切って、歩道脇の胸まである雪の中へあっという間に飛び込まれ、なす術がなかった。

一方、集団の発する喧噪に対しても非常に神経質で、ホッケーやスケートの練習場付近ではビクビクして落着かないし、スキーバスを待つ学生らの騒めきにも神経を苛立たせる。恐らく競走馬の頃は開催毎に寿命の縮む思いをしたんだろうが、困るのこはこれからで、試合では本馬場や準備馬場などの雰囲

気の中で、どんな反応を示すものか、デビュー後の数試合は、こちらも神経をすり減らすことになりそうだ。

新馬でもあり、騎乗期間も短いので、騎手に対する反抗といったような事は、今のところ無い（と思っている）が、苛立っている時に叱られたり扶助が理解できなかったりすると、たまに立ち上がる素振りをみせる事がある。前方への推進不足の時にみられ、完全に立ち上がるわけではなく、単に新馬の経験不足によるもので本格的な反抗ではないと思っているが、それでも将来の反抗手段となるか、完全に消滅するかはこちら次第なので、騎手の弱みに付け込むような悪癖とならぬよう、注意していきたい。

馬体の柔軟性や口向きの片寄りについては、右手前が不得手といえる。輪乗りで速歩を行なうと、左手前の場合は左後肢が右後肢と交差するのに比べ、右手前ではそれがなく、踏込みも悪い。口向きも右手前では硬く、ぎこちない。低い連続障害を通過させると、何れも左寄りを、こころもち左へ体を捻りながら跳ぶ。競馬の影響かもしれないが、極端な片寄りではないので、肩を内へや腰を内へ、或いは馬体を真直ぐにさせての直行進などを地道に繰り返しているうちに、ほどなく気にならなくなるものと思う。

雪で馬場の状態が悪い為に、今のところ障害はバーのみの低い垂直やオクサーに限られているが、突進することなく、踏切もほぼ安定し、着地後の駈歩の手前も概ねこちらの扶助を理解しているようで、なんとか順調にいっているのではないかと思う。

学生が管理する馬に有勝ちなのが、経験不足及び不注意による所が大きい怪我であるが、御多分に漏れず、北玲も既に何度か馬休する羽目になっている。何れもパドックや馬場に放牧中の負傷で、特に、後肢に集中しているが、１月には腹部に、長さ５センチ、幅２センチほどの裂傷を負い、治療を極度に拒絶することもあって、暫くてこずった。馬場に放牧していた。という事だけで、目撃者もいないまま、結局は原因を掴めずに終わった。非常に不満だったのは、怪我をさせた事よりも何よりも、原因を見つけとかなきゃ、という意識を部員の誰一人として持っていないように見受けられたこと。「すみません」と僕に謝ったところで、北玲は僕の馬ではないのだから。

部員１人１人が直接、馬たちの生活を支えているのと同時に、その生きざまをも支配しうる事を忘れてはいけない。つまらない怪我で馬休する羽目になれば、学生にとってそのブランクは大きいし、廃馬という取り返しのつかない事態になる要因だって、そこら中に転がっている。

北玲は今シーズン、新馬障害からＬ級（小障害）クラスを射程に置いて、試合経験を積むと共に、安定した経路走行の確立を目指すが、シーズン後にはチーフを現役にバトンタッチするつもりでおり、多少の好不調の波は覚悟の上で、なんとか順調に推移してくれる事を願っている。

岡田監督には、現役時代から常々貴重なアドバイスを頂き、何度も救われる思いをしてきましたが、北玲についても何かと御指導いただくつもりでおりますので、宜しくお願い致します。

離厩報告

オーロラホマレ号

山田和男

オーロラホマレ号が我部に来たのは4月の中ば頃、久光弟と私の2人で世話をすることになりました。日高の方ではずっと放牧されていたそうで、毛はごわごわで久光弟と必死でブラシをかけたのを覚えています。そんなある日のこと、2人は変な事に気付きました。装鞍前はきれいにブラシをかけたのに、乗り終わるとフケだらけになるのです。そして何度こすってもとれません。2人供、暇があったので、よし今日は、すっかりきれいにするぞ、という事でブラシをかけておりますと、久光弟の服の上に落ちたフケが動くではありませんか。2人はびっくりしてよく見てみると、あの白いフケは……実はシラミだったのです。2人の動揺は並大抵のものではありませんでした。何しろシラミを見たのは初めてですし、馬をみてみると、そりゃ毛穴にびっしりくっついてるのですから。立髪と尾をプラスチックブラシでかきまくったのですが、とれず。よし毛を刈ろうということになり、あのみにくい姿にしてしまったのです。2人はしらみをやっつけれたと大喜び、手入道具も毛布もすべて消毒しすっかりいい気分でした。しかし、それをみた野中獣医は大激怒。夏になれば虫追いができなくなるし、尾は馬の命だぞと言われやっと自分達の失敗に気付きました。でももう後の祭りです。彼はカメのような尾を寒々しくペタペタと動かしていました。それをみて2人は本当に悪いことをしたと痛感致しました。無知とは言え罪なことをしてしまい申し分けなく思います。彼は我部の練習では少しきつすぎるとの事で函館の方へ初心者を乗せる為にもらわれていきましたが、そちらの方にも大変迷惑をかけてしまい、ここにお詫び致します。また、日高よりお話をもってきてくださった春田兄にも御詫び申しあげます。

ゴージャスライフ号

陣　川　雅　樹

7月26日。公認大会の忙しい最中、競馬場よりヒョッコリやってきたのでした。早く走らないとかで欠陥はなく、まだ3才のヤンチャ坊主。ただ、鼻梁から額にかけて大きな陥没があって……牧柵に激突したのだ、とか、金属バットで殴られたんちゃうか、とか、きっとこいつの脳ミソこの部だけ少ないからアホやで、とかいろいろなウワサは立ちました。確かに、蹄洗のとき足は上げないし、エサをねだって噛みつくし、曳馬のとき1年生の顔を蹴ってオイワさんにするし、パカパカはねるし……ウーン？やっぱりアホやったんかなあ？　でも、1カ月もたたないうちに足も上げるようになったし、人を乗せて走るし、障害も飛んだし、ただ♪若さゆえ～♬走り方はフラフラ、曳馬でもピョコピョコはねまわり曳馬する者（つまり私ですが…）を困らせました。名前も募集したのですが、ヒョウキンさがたたってかまともなのが1つもなく、結局キタゴージャスライフと一部で呼ばれていただけでした。

騎乗は山田兄が始め、調教は長屋さんがやっておられました。僕たちも何度か乗せてもらいましたが、とにかくまだ脚がさっぱりわかっていないことと、走り方が不安定という印象が強かったように思われます。玉抜き（去勢）の手術の予定も春まで延期され、春まではいるのかなと思いきや、それがどういうわけか石狩ＲＣにいたクイーンクレメンと交換されることになり、10月10日、駅伝大会の朝、あわただしく石狩ＲＣへと連れて行かれました。

今頃、彼は石狩ＲＣで元気にヤンチャをやっているのかなあ、それとも……。

スカイナーホース号

陣川雅樹

心臓が悪いと言われ、その検査のため北大獣医に連れられて来ました。旭川乗馬クラブの斉藤さんから、検査の結果が良ければ北大馬術部に、悪ければ自分がひきとるという話をもって来られ、結果は、心臓には異状ナシということだったので、うちがもらうことになりました。

足さばきが不器用で、走り方はほとんどセリカ。長い間休んでいたため、コズミもひどく、またクラブの人間の数から乗る人も決まらず、どうしても出さなくてはならなくなって、斉藤さんに引き取ってもらいました。

斉藤さんがかわいがっていた馬なので、今頃きっといい余生を送っていることでしょう。

59年10月9日入厩　12月8日離厩

オ　オ　カ　リ　ヒ　メ　号

中　川　千夏子

一年間の細かい調教の流れを書く、というより、調教し試合に出てみて、特に印象に残ったこと、四年間の馬術部活動で感じたことを書いてみたいと思う。

最初オオカリに乗った時、恥ずかしながらまともに動かすことすらできなかった。人間の下手さ、特に拳の荒さ、脚力の不足で、発進の鈍さ、回転のかたさ（左右の不均等）は酷いものだった。オオカリを入厩した目的は、馬場馬術の基本的な扶助を学ぶためだったが、私の調教のまずさもあって、下級生の練習には難しい馬だったと思う。

乗っていくにつれて、一旦やる気になったら、がらっと変わり動かしやすくなるのがわかった。ある程度までの調教が進んだ馬なので、そういう状態になると得るものが多かった。まず、やる気を出させ運動を進めることが毎日の練習の第一の課題だった。しかし、形ばかり求めていたため、強引に譲らせたり、無意味（悪影響を及ぼす）な鞭や拍車で馬を惑わすことが多かった。

シーズンに入り試合が重なるにつれて感じたことは、まず、準備運動の重要さである。初めての試合では時間をとりすぎ、途中で休んだり、またやり直したり等、無駄なところがあった。しかし、この試合でオオカリが試合場に入ると緊張してき、人間に注意を向け動かしやすくなるのがわかった。試合になると日頃の練習と違うふうになる馬は多いが、その馬の性格をよく気をつけ準備運動をいかに生かせ

るかが問題だ。普段の練習でも試合を想定して準備運動のもっていき方を考えるようにした。

また、試合の直前になって普段の練習以上の要求をしてはいけない。特に最後試合では無理な要求をしたため、普段やれる運動さえやれなくなってしまった。納得いく準備運動ができた試合はうまくいったようだ。

それから、馬体管理について。オオカリは冬の間は元気で、足も丈夫だったが、春先になって急にこずみだした。普通の馬と同じ程度の運動をしてきたのだが、もっと歳のことや、肩や腰が弱っていたことを考えるべきだった。

道自馬が終って鼻血を出し、公認の前に馬運車の中で暴れ怪我をし、北日の直前でひどい跛行をし、北日終って、又鼻血と跛行とぶりかえす、ということがあった。そのため、せっかく試合で得たものを次に生かせることができなかった。特に、シーズンに入ると、人間の方に焦りが生じつい無理をさせたりしがちになるが、チーフとして馬の馬体管理がうまくいかなかったのは最低だったと思う。一番ばからしいのは、人間の注意で防げる怪我である。

四年間を通し、いろいろな所へ馬を乗りに行ったり、多くの人に教わったりした。そして、基本を正確に実行することがいかに重要で難しいことかを痛感した。例えば姿勢。拳は絶対下において動かさない。薬指で銜を感じる。正しい姿勢は一番適した扶助を生むと思う。また、普段の練習での輪乗一つとるにしても、正確な直径20mの輪乗を描くことができるだろうか、等。オオカリの調教を通して、そういうことは頭にはあったが、人間の辛抱のなさ、はっきりした方向のなさで、調教上一番大切な積み重ねというものがなかったようだ。また、調教が進むにつれて、自分の世界に隠りがちになった。オオカリのクラブにおける意義を考え、どんどん上級生に乗ってもらって、吸収できるものを吸収すべきだったと思う。

オオカリに騎乗したこの一年は馬術部生活で最も有意義なものだった。常に離厩を意識してしまい焦りが共なったが、自馬大での必死な気持ちや、北日での緊張感は今でも心に残っている。このような思いをさせてくれたオオカリに感謝している。しかし、やはり心にひっかかることは、クラブの流れの一員として自分が上級生から習ったことを生かしたかった。せめて、最後に障碍の試合に出て、馬を調教したことで障碍の試合でどういう結果が出るかしりたかった。だがクラブにはそういう余裕がなかった。

私の四年間いたクラブには決まった方針がなく、常にそれに振回された部分が多かった。一貫した方針のない、上下の繋がりのないクラブはクラブとは言えないし、強いクラブにはなれないだろう。また、強いクラブでなければ方針もぐらつくものである。自分達も方針を一つにしようとはしたが、勝てなかった。勝てなきゃ無に等しいのだ。（個々の繋がりはあると思うが。）

それから、クラブの馬は全て部員の馬であることを忘れないで欲しい。曳馬にいかない馬がいるのに自分の馬の草刈に出かけたり、投草を自分の馬ばかりやるというようなバカなまねはやめて欲しい。馬一頭生かすも殺すも部員次第なのだから、日頃の馬の手入れから調教においても、その責任を感じるべきだと思う。二度とパールのような馬を出さないためにも。

最後になりましたが、半沢先生をはじめ、オオカリヒメをかわいがって下さった馬術関係の方々、試合の折などに、貴重な助言を数々いただきまして、どうもありがとうございました。彼女は昨年の９月に札幌を離れ、今は帯広市営八千代農場にて自然にかこまれながらのんびり余生を過しています。

烈　々　風　号

森　田　　敏

昭和56年７月に入厩して以来、多くの人たちがこの馬に乗ってきましたが、調教はなかなか進まず、新馬を入れて調教したいとの要望から、昨年10月離厩しました。離厩先は、水産学部馬術部の上本兄の紹介で東山乗場クラブになりました。ここに最後の調教責任者として騎乗報告を書くことにします。

早春、世良兄の調教に続き、はみと脚への従順性、馬体の柔軟性を目的として、輪乗りで内方姿勢をとらせる練習をした。常歩、速歩、駈歩と運動を進めていったが、速歩が難しかった。重かった。駈歩は馬も楽に歩度を伸ばし、脚とはみの関連がでてきた。又、そういうときは駈歩から速歩に落とすことで、速歩も前進気勢がでた。時には速歩でもかなり強いはみ受けになり、歩様も大きくなった。

障害に関しては、単一やバーだけのオクサーでもルーキーはかなり見て飛んだ。まして箱障害等は、露骨に恐怖心をみせた。そこで、とにかく低いものから、飛んでは餌をやりメチャクチャほめた。以前より少しでも高いもの、異質のものを飛ぶときは、真中を変えずまわりだけを変えて飛ばしたり、輪乗り中に低障害を入れて障害を変えていったりした。そうすることによって、抵抗なく飛べることがわかった。そうして何とか馬場に置いてある全ての障害は飛べるようになった。しかし、はみを持ったままで障害を飛ぼうとすると歩度が落ちて難しかった。

こういう状態で、半沢杯を迎えた。第２級馬場の準備運動では、驚くほど前に出て、はみも今までにないほど強くかんできた。しかし本馬場では重くなってしまった。小障害は予想に反して前に出たが、竹柵のササに驚きここで２反抗。後ろに下がり出したので、もうだめかと思ったが、“怖くないよ、ほらいけ／”（というような意味の言葉）を言いながら脚を使い続けたら、突然障害に飛び込んでいった。その勢いでゴールまで行くことができた。

半沢杯の後、馬が急に変わった。前に出るのである。岩見沢自馬大でも前に出ることに変わりなく、新人新馬を無反抗でゴールした。

しかし、碧雲クラブでの公認の前の練習では、馬の調子を無視してかなり無理をさせてしまった。むやみにレベルを上げて止まられもした。公認では、反抗はなかったものの、おどおどしながら飛ぶという状態だった。

公認のあと反省して、もう一度はじめからやり直すつもりで基本運動の確認を行なった。納得して障害を飛ぶことを頭に浮かべながら。しかしこのころ、馬が疲れていたのか、嫌気がさしていたのか、前進気勢がなく、はみに出る感じが全くなかった。もちろん障害に向けても自分から向かっていくことはなかった。それで毎日とにかく口に不快を与えないようにし、しかも拍車で刺激を与えないように脚を必死に使うことを繰り返した。そのようなことを２週間位続けた後、とても良い状態になった。はみに乗ってきたという状態だ。決して力強くはなかったが、柔らかい口と、脚への従順が感じられた。雲に乗っているような感じだった。障害（40～50㎝）を飛ぶときも、落ちついて跨いでいった。

北日本になった。連れていこうかと迷ったが、無理は禁物と思い札幌に残した。札幌では体力強化、馬体の柔軟の意味で不整地等をやってもらおうと思ったのだが、遠征に来て２日目位に怪我をしてしま

った。練習中、馬場でつまずき、右前球節を追突して、結構深く傷つけてしまったのだ。

この傷が治って運動を再開したのは、約1カ月後だった。驚く程馬体が硬くなり、脚への従順、口向きは新馬並みになっていた。しかし元に戻す自信はあった。前と同じ道を進めば良いと思った。

しかし回復作業は遅々として進まなかった。焦ってきて、良い状態になっていないのに障害を飛ばせたりした。そんな自分の態度に気づき（西川兄から指摘された）もう一度良い状態になるまで待とうと思い、ひたすら馬の気持ちを考えて乗った。そうして何とか北日本の前の感じが戻ってきた。東日本の間は平石兄に乗ってもらい、帰ってくると、脚への反応がさらに良くなっていた。

その頃から新役員の間でルーキーを出したいという話が出てきた。来年も調教を続けて試合に出たりすることのできない自分が、意見を押し通すことはできないと思い、判断は新メンバーに任せた。

その結果、「ルーキーは入厩して既に3年半を過ぎるのに試合で勝てる馬としては育っておらず、練習馬にも適さない。現在の馬の数を考えると出さなくてはならない。難しい馬であるルーキーを調教していくよりも新馬を育てた方が良い。」という理由で離厩が決まった。

ルーキーを調教をして気付いたことは、障害を作る、あるいは変える下級生が大変重要であることだった。そのタイミングが良いと、馬がどんどん良くなっていけると思う。ルーキーのサブチーフとなった下級生、その他の1・2年生の協力がなかったら、絶対に試合にゴールできなかったと思う。一生懸命、障害を作ってくれて本当にありがとう。練習が終わり、ルーキーを上げるとき、僕が、「今日は絶好調！」とか「だめだ難しい」とか言うと下級生がいっしょになって大喜びしたり、落胆したことがどんなにうれしく、そして励まされたことか。

また、小野さん、宮浦さん、斉藤さん、山本さん、西川さん他、多くの先輩諸兄に、多くの貴重な助言を頂いたことに、深く感謝致します。

ルーキーはもう馬場にはいませんが、ルーキーから教えてもらったことを、この騎乗報告から下級生が少しでも感じとってくれることを願って筆を置かせて頂きます。

北　　将　　号

田　中　保　之

我々は、また、ともに勝利をめざし、苦労を分かちあってきた友人を失なわなければならない。彼はこの北大のなかでも、その独特な性質と異様な雰囲気で、多くの人達に愛されてきた。

昨年の冬の彼は、とても騎乗して運動のできる状態ではなかった。背中に苦痛をきたしていたわけである。というわけで、私がすることは背中の筋肉をつけることであった。筋肉は、ただずっと休ませておけばつくというものでないらしく、運動させる必要があった。それで、丸馬場で、馬を、走らせた。

春になってシーズンに入ると、馬体もよくなり、平石兄が試合で奮闘することになった。

私は、この友人とわかれることになるが、彼とすごした青春の日々は、涙なくしては語れない。彼は私の心の中に永久に残るであろう。

最後に北将号を見守ってくださった先輩の方々、特に半沢先生には、感謝のしようがありません、ありがとうございました。

平　石　哲　生

『馬』『馬術』に対する自分の考え方が甘かった。細かい事を目指そうとしても、そのことばかり頭の中にちらつく。自分はこの馬に乗って失敗したが、原因は全て自分自身の気持ち、考え方が的をはずれていた為である。公認大会で全て失権した。それから前のチーフ世良兄の試合のビデオを見た。愕然とした。やるべき事、その答えは、1年前すでに出されていたではないか。あまりにも自分のやり方に固執していた。

北　将　号　の　戦　績

S 53. 8.19～20	道　体	小　障		矢田　明			
S 54. 6.12	道自馬	新　馬	失　権	，	婦　人	失　権	吉田　円
		パルクール	失　権		西川理一		
8. 2～ 8	北日学	総　合	棄　権		吉田　円		
S 55. 6. 7～ 8	道自馬	複　合			高橋　均		
		新馬障	4位		高橋　均		
8. 5～11	北日学	総　合	11位		高橋　均		
8.16～17	道　体	成年総合			高橋　均		
S 56. 5.23～24	道自馬	総　合			石井洋行		
		小　障			石井洋行		
5.31	酪農戦	中　障	失　権		石井洋行		
7.31～8.4	北日学	総　合	失　権		石井洋行		
8.22～23	道　体	成年総合	失　権		石井洋行		
10. 3～ 4	公　認	小　障	失　権		石井洋行		
S 57. 5. 3	半沢杯	複　合			石井洋行		
		馬場二課目			石井洋行		
5.16	酪農戦	複　合	失　権	，	小　障	失　権	石井洋行
6. 5～ 6	道自馬	複　合	失　権		石井洋行		
		中　障			石井洋行		
7.29～8.4	北日学	二回走行	失　権		石井洋行		
		総　合			石井洋行		
		新人新馬	失　権		高須哲男		
8. 7～ 8	道　体	総　合			石井洋行		
		一般少年障	失　権		高須哲男		
10.30～11.8	全日学	総　合			石井洋行		
S 58. 5. 5	半沢杯	中　障	失　権		世良健司		
6.25～26	道自馬	馬場二課目			世良健司		
		中　障			世良健司		
7.23～24	公　認	中　障	4位		世良健司		
8. 5～ 8	北日学	二回走行			世良健司		
		総　合			世良健司		
8.13～14	道　体	総　合	失　権		世良健司		
		成年障			世良健司		
S 59. 5.13	半沢杯	小　障	失　権		田中保之		
6.23～24	道自馬	新人新馬			田中保之		
7.28～29	公　認	M級B	失　権	，	複　合	失　権	平石哲生
		ハンティングB	失　権	，	二回走行	失　権	平石哲生
		総　合	失　権		平石哲生		
8.25～26	道　体	総　合	失　権		平石哲生		
		一　般			田中保之		

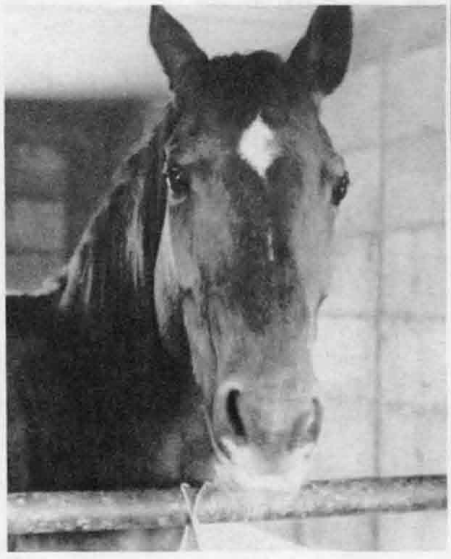
ス　タ　ー　ラ　イ　ト　号

小役丸　千加子

スターライトは、今年の４月４日で満２０歳になります。昭和47年度秋入厩以来、12年間、数々の競技会に出場し、好成績を収め、"北大にスターライトあり"とその名を全国に響き渡らせました。栄華を極めた時代のライトのことは、ビデオ・８ミリでしか見たことのない我々現役よりも、当時現役であられたＯＢの方々の方が、より鮮明により印象深く心に残っておられることと思います。また、ライトに対する思いも、今も昔も変わりないことだと思います。昨年の秋よりＯＢ会の所有馬となったライトに騎乗し、試合に出させてもらった私が、この一年の騎乗報告を兼ね離厩報告を書かせてもらいます。

まず最初に、ＯＢ会の馬であり、多額の援助金を頂いていながら、遠方の試合場まで連れて行ったこと深くお詫び申し上げます。と同時に、一年間ライトと共に一喜一憂できたこと感謝致しております。一年間を振り返ってみて、果たして調教という名の元に騎乗できていたのか、という疑問を抱かずにはいれません。今考えてみて、その時その時は一生懸命何かをわかろうと思考錯誤してやっていたつもりなのですが、どれだけ自分が一貫した乗り方、考え方を持っていたか、自信を持って語れるものがあまりにも少なすぎる気がします。以下、一年間ライトに騎乗してみて、またライトから離れてみて、感じたことを綴っていきたいと思います。

ライトに関しては、今さらハミ受けが云々などという調教は必要ないと思いました。ただ、どれだけ



◀北大第一農場厩舎にて

沈静した状態で、柔和なコンタクトで、手の内に入れて運動ができるか、というのが私なりの調教の目的でありました。そこから頼り頼られるという信頼関係が生まれ、人馬一体に至るのだと思います。それを試すのが、試合です。人間は、失敗しないと、本当に求めているものが何かに気付かないものです。馬術に於いても誰もが経験するはずです。勝ち負けも大切だけれども、試合の真の意味は、反省し、向上していくものだと思います。私の場合も、例外ではありません。ライトでは4回試合に出ました。失権で始まり、失権で終ったという全く情けない結果を残してしまいました。ライトをわかろうとしていたつもりが、実はライトに頼り過ぎていたのでした。数々の失敗を通して、初めて先輩の話がわかり、かつての騎乗者の書いた調教報告が読めたという具合いです。もっと早くに気付いていれば、もっと早くに矯正していれば、といったことが、たった一回の一分間足らずの走行で、どっと頭の中を渦巻いていくものです。そこで後悔してもあとの祭りだということは誰もが知っている筈です。私自身に関して言えば、努力が足りなかった気がします。頭の中ではわかっていても、やらなきゃいけないとわかっていても、途中で妥協してしまう。妥協していないと片意地を張っていても、やはりどこかに甘えが見える。そんな一年間だった気がします。ライトを任されて自信を持って乗れるようになったのは、試合シーズンも終った9月頃からだった気がします。

老齢と、膝、球節の骨瘤、肺が悪いなどが原因で、断片的な騎乗しかできなかったけれども、本当に多くのことをライトに教えてもらいました。また、ライトを通して、いろいろな人と話す機会も与えられました。ライトのことをいつも考えて下さり、良きアドバイスを下さった監督さん、長屋さんを初め斉藤さん、山本さん、その他のＯＢの方々有難うございました。ライトに乗って掴んだものを基に、これから一年、更に向上していこうと思ってます。

一年間の試合成績を記しておきます。

11月	山下杯（酪農大）	小　障	失権
5月	半沢杯（北　大）	小　障	－4
6月	道自馬（岩見沢）	新人新馬	満点（3位）
		婦　人	満点（2位）
8月	北日学（北里大）	中障Ｂ	失権

春先、ライトに種付けの話が持ち上がったのですが、それに値する発情が来ないまま秋になり、お流れになってしまったことを付記しておきます。

12月16日、それぞれの人々の青春の一ページに、さまざまな思い出の姿で綴られたライトは、多数の人の愛の中で離厩式を送ることができました。現在、北海道大学所有の馬として、ポプラ並木の横の、第一農場の厩舎で、余生を過ごしております。札幌にお立ち寄りになられた折には、どうぞライトにも会っていって下さい。変わらぬ澄んだ瞳で、甘えてくるに違いありません。

最後に、一年間ではありましたが、ライトを通しての援助、どうも有難うございました。

私にとって、ライトが、馬術部生活の始まりであり、日常生活の糧でありました。ライトを抜きに、今の私は語れません。

ライトとの巡り合わせに感謝しつつ……

スターライト号の戦績

S 48. 5. 5	半沢杯	小障	4位	松井 亮（同好会）
8. 3～7	北日学	中障B（新人・新馬）	2位	則近 彰
9. 1～2	道体	複合	4位	松井 亮（同好会）
S 49. 5. 3	半沢杯	小障	2位	添田昌一
		中障	失権	松井 亮（同好会）
6. 2	酪農戦	複合	3位	添田昌一
6.22～23	道自馬	複合	9位	添田昌一
8. 1～5	北日学	中障	2位	添田昌一
8.24～25	道体	選抜中障	1位	添田昌一
S 50. 5. 4	半沢杯	小障	4位	半沢道郎（同好会）
		中障	4位	添田昌一
5.25	酪農戦	複合	2位	添田昌一
		中障	1位	添田昌一
6.21～22	道自馬	複合		添田昌一
		中障	6位	添田昌一
7.31～8.5	北日学	中障	1位	添田昌一
8.16～18	道体	小障	2位	森 厳
		中障	4位	添田昌一
		中障B	3位	長屋清隆
11.14～21	全日本障碍総合馬大会	中障	8位	添田昌一
S 51. 5. 3	半沢杯	小障	2位	長屋清隆
7.28～8.1	北日学	中障	2位	長屋清隆
		中障B	2位	笠間淳子
8. 7～9	道体	中障	1位	長屋清隆
		婦人障	1位	木村憲子
		大障B	3位	長屋清隆
10. 2～3	公認	小障	3位	飯島 茂
		中障	3位	長屋清隆
		大障B	1位	長屋清隆
10.25～28	国体	成年障	10位	長屋清隆
11. 6～7	全日本	パルクールB	13位	長屋清隆
		中障	1位	長屋清隆
11.13～21	全日学	中障	10位	長屋清隆
S 52. 5. 3	半沢杯	中障	2位	長屋清隆
		小障	1位	中島孝幸
6.18～19	道自馬	複合	15位	長屋清隆
		中障A	5位	長屋清隆
		選抜障	2位	長屋清隆
		初心者障	3位	国枝保幸
8. 3～8	北日学	中障	1位	長屋清隆

		総　合	16位	長屋清隆
		中障B	1位	成田慎二
8.20～21	道　体	中　障	2位	長屋清隆
		婦人障	2位	浪内陽子
9. 3～ 4	公　認	中　障	4位	長屋清隆
		小　障	2位	吉田　円
		大障B	6位	長屋清隆
10. 5	国　体	成年障	22位	長屋清隆
11.15～21	全日学	二　走	1位	長屋清隆
S 53. 5. 3	半沢杯	小　障	9位	成田慎二
6.10～11	道自馬	中障A	2位	成田慎二
8. 3～ 9	北日学	中　障	2位	成田慎二
		中障B	失権	松岡　功
8.19～20	道　体	小　障	2位	水野哲夫
		成年障	4位	成田慎二
9.30～10.1	公　認	標準中障	失権	成田慎二
11.11～20	全日学	二　走	失権	成田慎二
S 54. 6.12	道自馬	初心者障	2位	松岡　功
9.15～16	公　認	小　障		松岡　功
S 55. 5. 4	半沢杯	小　障	4位	松岡　功
S 56. 5.23～24	道自馬	小　障	4位	井上　京
5.31	酪農戦	小　障	1位	井上　京
10. 3～ 4	公　認	小　障	失権	斉藤牧人
		小　障	失権	佐藤仁美
S 57. 5. 3	半沢杯	小　障		世良健司
5.16	酪農戦	小　障	失権	世良健司
7.29～8.4	北日学	新人新馬障		世良健司
8. 7～ 8	道　体	中障B	失権	世良健司
S 58. 5. 5	半沢杯	小　障		国枝由紀
6.25～26	道自馬	婦人障		国枝由紀
		小　障		国枝由紀
7.23～24	公　認	小　障	失権	国枝由紀
		婦人壮年	1位	国枝由紀
		中障B	失権	国枝由紀
8.13～14	道　体	小障（婦・壮）	2位	国枝由紀
		中障B	失権	国枝由紀
		小障（一般少年）	失権	下村仁司
11.13	酪農戦	小　障	失権	小役丸千加子
S 59. 5.13	半沢杯	小　障		小役丸千加子
6.23～24	道自馬	新人新馬	3位	小役丸千加子
		L級婦人	2位	小役丸千加子
8. 5～ 8	北日学	中障B	失権	小役丸千加子

北大水産学部活動報告

上　本　浩　之

S58，11月より再出発した我部も1年が過ぎました。時間経過を追って活動を書いていきます。

S58，10月　札幌より私（＝上本）が函館に移行。

11月　北水体育会より休部状態から復活して北水馬術部としてスタートする。

当時の活動状況は昨年の部報にも書いた通り、馬なく馬場なく人もいない……とてもクラブとは言えない状態の頼みの綱は東山乗馬クラブであり、そこの菊池・岸本両氏でありました。土日曜は作業をする代りに無料で乗せてもらえる事にしてもらい活動したのです。

S59，1月　移行した当時は札幌での活動の勢いも余っていたのですがあまりの環境の変化に私自身が失速してしまいました。仲間を求めて勧誘しても誰も入らない、それまで自馬をもっていたという贅沢な環境に慣れてしまって毎日決まった馬に乗れない焦りもあった。何より函館から来年度試合出場する事が不可能に近いと感じて目標を見失ってしまったわけです。Qが離廐したのもその頃でした。弱い自分が全面に現われると事態は悪い方へ進むばかりで情けない事に一時的に馬から離れてしまったのです。離れて多くの事に気付いたものでした。こんな身勝手な私を見守ってくれていた菊池氏には頭が上がりません。

3月　冬も終り春に向い出した頃"秋星"という4才牡馬を与えられ夏の試合でデビューするつもりで乗り出しました。その矢先、春の乗船実習の二日前、私の不注意から私と秋星は他馬に両脚蹴りを食らい私は気絶、秋星は下顎骨折、幸い彼の強い生命力で2ケ月後には騎乗再開しました。この時点で夏には間に合わないと考え下船した4月からホープとコンビを組んだのでした。"ホープ"15才騙馬、試合経験なし。性格は人には温厚、馬には狂暴。

5月　北日学選手権

本学の好意により出場させてもらった。会場の畜大。一回戦部班はドベ2で通過。これで何とか面目を果たしたと一安心。準決勝は幸運にも北大の北雛に騎乗。昨年平石が変身させた馬だ。ガキにまかせたらドベで決勝進出させてくれた。ガキが私に東京行きのキップをプレゼントしてくれたのだった。さてここまで綱渡りで決勝戦となった。障碍は柏星で全員満点。順位は調教審査で決った。何と私が優勝してしまった……1万円の罰金と引き換えに…？　　このタイトルはまぐれとは言え後の私の馬術活動の大きなささえと自信となってくれたのでした。

6月　全日学選手権

学内で援団の壮行会に送られ、クラスメートに連絡船で見送られて東京へ向いました。東京では療養中の嶋田、忙しい中飯野兄、世良兄が駈けつけて下さいました。にもかかわらず結果は一回戦敗退となってしまいました。しかしこの試合で得たものは大きかった。同ブロックの日大・専修の選手もさる事乍ら乗った馬が素晴しかった。準備運動に入ってまず馬の軽さに驚ろいた。羽根がはえていた様だった。

リズムが良い。そして何より馬が人の扶助を待っている。試合は負けたがこの経験は東京まで来た価値があった。降りで聞けばこの馬は日大の練習馬との事、然らば試合馬はどうなんだと思い決勝を見てみるとなるほどとうならされた。人の要求に馬が全力で応える迫真の演技だった。この選手権を通じて何か馬場馬術の入口を垣間見た気がしました。

☆渡部入部。　この頃北大の丹野主務のおかげで道体に出れる事になりました。乗馬クラブには障碍が少ないので私と渡部、菊池氏と吉崎君（函館中部高馬術同好会）で障碍作り。

7月　菊池氏が6月中旬からクラブの会員をホープからシャットアウトして私一人に乗せて下さった。このあたりでホープが変身し出す。と言うより折り合いがつきだしたのでしょう。彼は今までありとあらゆる人を乗せまくって来たベテランで自分なりの防御手段を身につけている。反面今まで飛んで来た障碍が全く無理のない高さばかりだったので障碍に対するこだわりがないので乗り易い馬でした。そして7/11～8/11まで私と渡部はホープを菊池氏にお願いし一ケ月航海で北洋へ行ったのでした。

8月　北海道馬術大会・総合出場

札幌の連中に北星で北日学を終えた帰りに函館によってホープを私より先に北大につれていってもらった。私と渡部は1ケ月ぶりに陸に上り私はすぐ札幌へ渡部は函館へ居残り。さてこれから帯広出発までの10日間、いかに効率良く物件馴致を仕上げれるかがカギだった。はじめは他馬につかせたりして障碍馴致していた。一日数個ずつ新しい障碍を一発でクリアして行くホープはたのもしかった。北大はキャンパスが広いので練習を終えると熱い日中は避けて午前、午後と馴致も兼ねて曳馬で歩きまわった。

道体は総合に出場、無茶は百も承知。しかし水産学部という特殊な環境では年一回自馬戦に出るのが精一杯なのでホープには申し分けないけど無理を聞いてもらいました。調教審査10位、耐久1反、余力1落でなんと9位。出来すぎだった。出場出来ただけでも満足だったのにゴールを切れた上、順位までつくなんて……感激だった。

10月　水産学部で移行生勧誘。ビラをまき、ポスターをはりまくり、試乗会の為に馬を乗馬クラブから構内につれて来る、講習会を開く。渡部と2人やるだけやったが新入部員は入らなかったのです。

この月は移動と同時に来月予定している初の北大との対抗戦の準備も行なっていました。この準備とは作業と渡部のデビューの為の特訓だった。10月は猛烈な忙しさで過ぎて行った。

11月　第1回北大・北水対抗戦

北大より小役丸副将を筆頭に選手団6名、4年目使役隊平山隊長を中心に4名来函。当日は野球部や級友にも手伝ってもらい試合を進行していく。（乗馬クラブの親善試合の最終競技として対抗戦を組んであった）渡部にとってはデビュー戦、それも50鞍程度で出場。結果は小役丸妹、中村弟、上本、吉崎君（前出）が満点で渡部と久島の勝負となった。久島が失権、渡部が一反一落でゴールを切った。これ又感激の一瞬だった。何とかしようと思う渡部の心が馬に伝わったものだった。これにより北水馬術部が優勝、最優秀選手は渡部に、優秀選手は中村弟に輝いた。こうやって多くの協力を得て自主開催の試合は何とか成功で幕を閉じたのでした。

12月　☆安藤入部

シーズンも終りかけた頃もう1人の部員が突然やって来た。只今修行中、毎朝乗りに来て土日曜の作業も苦もなくこなす頑張り屋です。

現在部員３名でやっています。ゼロから出発してまがりなりにも自馬戦、自主開催の試合をこなせたのは東山乗馬クラブの全面的な協力があったからこそです。又北大馬術部には負担のかけっぱなしです。特に同期の平石の代には世話になりっぱなしで申し分けないと思ってます。そして漁業学科の仲間には色々と協力してもらっています。ＯＢの小泉先輩の応援にも感謝しています。本当に有難うございます。

60年度の我部の展望を考えると３人のレベルが異なる為目標こそ違いますが同じ馬乗り仲間として各人頑張って行きたいと思ってます。悩みの種は部員数です。３人共４年生となる為活動に制限を受けるのは必至で、どうしても後続の欲しいところです。今年の勧誘からみても函館では仲々入部しそうにありません。是非本学で水産新入生を勧誘、入部して下さる様お願い致します。

北大・北水対抗戦

ＯＢ対抗戦

昨年の10月14日、ＯＢ対抗戦が２年ぶりに開催されました。前回は日時の都合がつかずに結局見送りとなってしまい、大変申し訳なく思っています。楽しみにされているＯＢも多いらしく、今後はこうした交流の機会を極力生かせるように心掛けたいと思います。

さて、今回も例年と同じく、部班、小障碍飛越競技、曳き馬競争、箱番競争、馬取り競争、馬上パン食い競争、流鏑馬（らしきもの）等々、バラエティに豊んだ競技種目が次々とこなされ、午後には恒例ソフトボール大会が行われました。

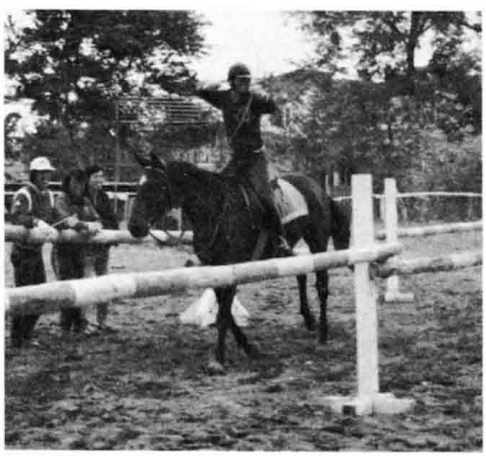
メインの小障碍飛越競技はＯＢ、現役Ａ、現役Ｂの３チームで競われました。ＯＢ総減点－130、現役Ａ－144、現役Ｂ－90と現役Ｂチーム（陣川、高田、久光、福島）が優勝し、鼻高々でありましたが、現役選手にとっては試合後のＯＢ諸兄からのアドバイスが何よりも大きな収穫となったようです。

馬取り競争（馬上イス取りゲームといったもの）では野中兄がＯＢの意地を見せ優勝しました。左右からの自由自在な飛び乗りに、１年目の女子は賛嘆の声をあげていました。ねェ野中さん！　流鏑馬では、なんとあの１年目の服部兄が優勝し、運だけは強いことを見せつけていました。

競技後の昼食会では、女子部員特製の芋御飯と豚汁を味わいながら、午前に撮った小障碍のビデオを見ました。お互いにあれこれと批評し合っているうちに、楽しい一時が過ぎてゆきました。また、柴沼兄から各競技の優秀選手に賞品が授与され、顔がほころぶこともしばしばでした。

忙しいところを１日中御苦労様でした、というわけで午後からはあのソフトボール大会です。結果は現役チームの圧勝。某ＯＢ曰く、「現役は馬にもよう乗らんと、何やっとんのじゃ」

今回のＯＢ対抗戦はＯＢの参加が少なく、やや寂しいものとなってしまいました。ＯＢ諸兄の感想にも、「ＯＢが少なくて残念でした」「ＯＢの層が薄い」といったものが見られ、ちょっと残念に思います。こちらからの連絡不行き届きということもあったのですが、来年はさらに多くのＯＢの参加を望みます。特に札幌在住のＯＢ諸兄は気軽に部室に遊びに来て下さるようお願いします。



東　京　Ｏ　Ｂ　会　便　り

馬術部創部以来、既に60年近くが過ぎ、東京のＯＢ会も正式に発足してから四半紀がたちました。その以前にもＯＢの親睦等はあったようですが、昭和34年の東京での国体を前に東園会長のもと、初代幹事の樋口兄等により、東京ＯＢ会として活動が始まりました。そこで今回は、その発足当初の様子をお忙しいなか、樋口兄にお願いして執筆していただきました。

なお、現在では東京ＯＢ会とは、馬術部後援会の内部組織であり、関東１都６県の在住ＯＢを対象にＯＢの親睦及び現役部員との交流（上京時）を図っているものです。後援会員の約４割が関東に在住し、そのうち80名弱の方が東京ＯＢ会員になっています。

今年の新年会には、ＯＢどうしの誘いあいにより22名の方が集い、楽しい一時を過ごしました。その時の写真を掲載します。不鮮明でわかりづらいと思いますが、久しぶりの方も何人か御出席していただけました。

樋　口　正　明（昭34年卒）

東京ＯＢ会が結成されてから、既に２５年が経過している。その間、ＯＢ会の性格なども変化してきているが、四分の一世紀という区切りめであるので、発足時の関係者の１人として、結成当時のことを振りかえってみることとしたい。

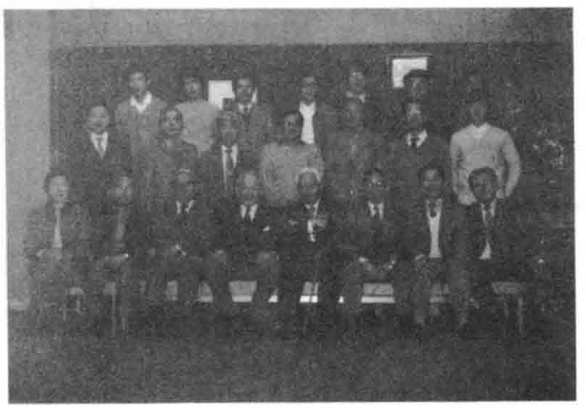
私は現役時代から、北大馬術部のＯＢ会組織化について、その必要性を強く感じていた。しかし、自分がＯＢの一員になっても、すぐには具体的行動にはつながらないでいた。このような時 ― 私の卒業した昭和34年秋 ― 有志の間で東京ＯＢ会結成の機運がおこり、10月に戦前の卒業生である大先輩を中心に、在京ＯＢ有志10名が集り、準備会をもつにいたった。有志協議の結果、関東一円に在住するＯＢに呼びかけ、東京ＯＢ会を結成することとなった。ＯＢ会の活動方針としては、①馬術部の現役を援助すること。②ＯＢ相互の親睦を図ること、などのことがまとめられた。そして、具体的目標としては、近く東京で開催される国民体育大会及び全日本馬術大会に、北海道から遠征してくる選手を迎えるときを機会として、東京ＯＢ会の組織化を進めることが決められたわけである。

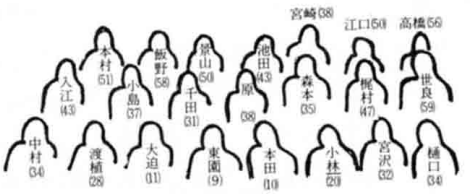
昭和34年11月、遠征選手の歓迎会を兼ねて、東京ＯＢ会の創立総合がついに実現することとなった。各世代にわたるＯＢ18名の参加があり、会長に東園先輩を選出し、私が幹事として今後の連絡に当たることなどが決められた。また、選手の歓迎会を兼ねて行われたので、ＯＢと現役との交流の場としても盛りあがりが見られ、成果があったと思っている。このことは、その後も、各種競技会に現役諸君が参加する際の歓迎会、激励会、祝勝会などが行われて、馬術部とＯＢとの一体化の一助になったといえるだろう。私としても、この第一回の総会のときのことは、その後の王座決定戦優勝の祝勝会とともに、いまなお印象強いこととして思い出されてくる。

東京ＯＢ会の結成準備は、名簿づくりから始まったわけであるが、年誌・部報・同窓会等の各種名簿との照合、各方面への問合せなど多くの方々にご面倒をおかけしたものである。お陰様で発足当時、会員数は30名をこえる規模となることができた。ＯＢ会の運営は、年会費千円分は原則として馬術部への

援助に当てることとし、ＯＢ会としての費用は、各種会合の際のプラスαの会費によるものとした。次に発足当時のＯＢ会の行事を紹介してみることにしよう。第一回の乗馬会は、今ではまったく考えられないことだが、馬事公苑から砧の緑地までの街乗を行っている。その後も毎年家族も参加するかたちで催され、桜の季節では終了後のジンギスカンの魅力も加わって好評であり、プラスαの会費も集めることができて、乗馬会はＯＢ会の運営のためにも必要な行事として定着していった。また、池内先輩にお願いして、中山競馬場での競馬を観る会、松平先輩にお願いして、サッポロビールを味わう会等々ＯＢ家族を含めての相互親睦を図る面についても力を入れたものである。

昭和37年発行の馬術部30年誌に、私が東京ＯＢ会について紹介した記事があるが、それは次のような文章で結ばれている。「……馬という共通のものを通じて、北大生活に思い出を持っている者の集りとして、相互の親睦を図りつつ、馬術部現役に対して物心両面についての後援をなし得るようなＯＢ会として今後も進みたいと思っている。」しかし、馬術部・ＯＢ会をめぐる状況は、その後いろいろと変化してきている。各種競技会の水準、内容及び規模の変化。後援会組織の発足。ＯＢ数の増加と考え方の多様化等々のことから、組織の見直しの必要がでてきている。東京ＯＢ会でも、あり方について種々の検討がなされている状況にある。最後に現役及び若いＯＢの皆さんに要望しておくが、卒業したあと少なくともある年数は、馬術部の活動、ＯＢ会組織のことなどを引継ぎ考えてほしいものである。





（ ）内は卒部年度

****
卒部にあたって
****

上　本　浩　之

札幌の同輩達の最もつらかったであろう４年目の苦しみを共にしなかった私がここに書くのは気がひけますが部員の好意に甘えさせてもらう事にします。

やはりＱの事を書いてしまいます。３年目、しかも留年中という特権階級で持たせてもらった事もあり、その１年間はいつも彼の事で頭が一杯でした。どうすれば彼にとって幸せなのかが思考の基準でした。降りて付き合う時、何を求めているのか人間のレベルで思いつく事を色々やってみました。〝曳馬が一番だ〟とＱは言ってた様に私には聞えました。今それを感じている後輩が少ない気がして残念です。乗って付き合う時、試合に勝つ事が彼の幸せにつながると信じてやっていました。それは試行錯誤の連続でした。ゴールが切れる様にしたい。その為には明日はこうしたいと考える。実行するには技術が未熟であり又その方針は間違っているかもしれない。チーフになりたての頃の毎日の悩みでした。しかしその都度答えはＱがちゃんと出してくれていました。馬歴13年のＱと３年足らずの私では当然の事です。その応えが聞える様になったのは３年目の秋の谷山弟に引きつぎだした頃でした。今想えばあんなに下手くそな騎手の要求を、それも人から馬への一方進行の型にはめられた強行な要求に良く応えてくれていたと思います。なのに私はＱに何も返してやれなかった。それどころか復活する気ざしが見え出した頃、それまでの私の無茶な運動がたたって彼を走れなくさせてしまった。そんな無力な私に愛想をつかしてＱは自分で幸せに向って行きました。現在乙部さんの牧場に居ます。彼が元気なのが何よりうれしいです。何と、近々カムバックしそうな気配です。強力なライバル出現に期待しています。

今私は函館で乗っています。持てる時間と労力の全てを尽して馬と付き合える学生馬術の強みは使えない環境にあります。名人と言われる人は馬にまたがった瞬間に馬の心を開いてしまうからそんな事は必要ないのでしようが私はそうもいきません。わずかに開いてくれた心の扉に出来る限りの誠意を示して開けてくれるのを持つしかない。そんな状態でも乗り続けるのは馬の魅力をＱから知らされてしまったからだろうと思うのです。

私は実質的に卒部するわけにはいかない、とは言え札幌の現役と同じ様に活動出来るわけでもないのであつかましくて現役などとは言えないがもう１年函館で乗れる限り乗って行くつもりです。ホープと共に。馬術部卒延をくらい留年してしまった北水馬術部５年目４年の上本です。人に迷惑をかけるのが得意の男ですが、これからもよろしくお願いします。

国　枝　由　紀

１年目の頃は、先はずっとずっと長いものの様な気がしていた。

2年目は夢中の内に過ぎ、3年目のスターライトとの1年は鮮烈で、試合が1つ終わるごとに本当に多くの事を考えさせられた。

4年目、シーズン3ケ月を馬休で過ごした。一番大事だった試合はあっけなくどこかへ行ってしまった。悔やしかった。そのことを不運だと嘆くより、自分の管理のどこかにあった失敗について反省するべきであることは理性では納得しているつもりだ。けれど感情的にはそんなわけにはいかない。何か割り切れない思いが残っているのは事実であってどうしようもない。

そして今、4年目が終わろうとしているこの時に思うことは何だろう。

何もないという感じだろうか。今はやたらに空虚であって目標がない。自分は弱い人間だとつくづく思い知らされている。思うに、人間には夢だとか生きがいだとかそういった類のものがやはり必要なのではないか。何かに向かって一生懸命になっている状態、これが大切なのだと思う。そういう時には、それが辛いことでも、また遅々として進まなくても、がんばっているということに充実感があるし、何をなすべきかという方向が見えているから安心できてしまう。逆に何もないと不安定で、自分の居場所を見つけられない。

自分は一体何をしたいのだろう……。

それが何であるにしろ、いつか、開き直りでなく肯定できる様な生き方がしたい。

自分のことばかりで、卒部にあたっての趣旨からはずれている様ですが、お許しください。

嶋　田　明　美

私の馬術部生活は、実質2年半で終ってしまった。馬が持てない焦燥に終始した1年がようやく終りかけたあの日。ルーキーに乗れることがようやく決まってから、幾日もたっていなかった。馬装点検をしながら、今日はこんなふうに乗ってみよう、あんなこともやってみよう、と考えていたその時、突然体が宙に浮いていた。やけに長い滞空時間の中で、そんなばかな、という思いが何度もうかんだ。後悔といえば、これほど後悔の残る終り方もあるまい。

けれどこればかりは、自分以外の誰のせいでもない。もちろんルーキーを責めるなんてできるはずがない。今だから言えるが、あの日の彼は実際いつもと違っていた。無理もない。ほとんどの馬が遠征で、馬場には誰もいなかった。いつもと違うまわりの雰囲気を気にし、びくついていた彼。それをほとんど気にもとめず、すぐに乗ってしまった私に下された、あれは当然の罰だった。彼の不安がおさまるまで、十分に曳き馬でもしてやっていれば、あんなことにはならなかったと思う。

2年半も毎日馬とつきあっていて、いったい私は、本当に馬の気持ちというものを考えていたのだろうか。馬というものがどんなに繊細で敏感な動物か、実は全く理解していなかったのだ。騎乗に関しても同じだ。全てが終った時になって、自分がどれほど何もわかっていなかったかに気づく。せめて2年半なら2年半分、胸を張って、これをつかんだと言えるものがほしかった。たとえ自己満足でも。

こんな悔しい思いは２度としたくない。そして後輩のみんなにも決してしてほしくない。いつ、どんなふうに終っても、自分はこれだけはやったんだと言えるような毎日を送って下さい。そしてできれば４年間、やり通して下さい。つらいことも多いけど、楽しいこともそれを埋めて余りあるだけ、きっとあるはずだから。何より馬達が、そこには居るのだから。

最後になりましたが、岡田監督をはじめＯＢの方々、現役のみんな、本当にご心配をおかけしました。札幌でのお見舞はもちろん、東京でも、札幌からの手紙が何よりも心の支えでした。ありがとうございます。そして４年目のみんな、特に国枝姉と中川姉に、改めて言わせて下さい。ごくろうさま、そして、ありがとう。

丹　野　宏　昭

序．　悟　り

俺は馬乗りには向いていない。
俺は主務には向いていない。
俺は学生には向いていない。
俺は人間には……？

Ⅰ　回　想

中学の頃は、学校を出たら働きたかった。でも、時流に流されて高校に入った。また流されて浪人してまで北大に来た。大学には何かがあるだろうと期待したが、退屈なまま一月が過ぎ、暇つぶしに馬術部に入った。馬術に興味があったのではなく、馬が好きなわけでもなく、何かを求めていたはずだが、その何かを探す努力もせず、作業や当番でエネルギーを発散することくらいにしか喜びを見い出せずに、自分勝手に過ごしていた。

入部当時よく、どの馬が好きかと訊かれたので見渡すと、真っ黒い馬がカッコ良かった。ガキである。ドンも黒かったがガキの方が黒かったし、ドンはいい馬だときいて好きになれなかった。そしてガキのサブチーフになり、その仕草が好きになった。どう見てもボケッとしているガキを、なぜか先輩たちは恐れるので、不思議な魅力を感じた。ガキの馬房に入ってその訳がわかり、さらに好きになった。そして彼の生い立ちを知って共感を覚え、どうにかしてやりたいと思った。夕方、彼が三角地に取り残され、一人で曳馬に行けない自分が悔しかった。２回サブが替わり、一年目一人で曳馬に行けるようになった時、僕はライトのサブで、夕方、三角地からじっとこちらを見ているガキが悲しかった。

この頃から、ガキになら心底熱中できるのではないか、俺と組んだら良い成績を勝ち取れるのではないか、などと何となく思っていた。そこで一念発起して、一年後にガキをもらおうと練習に励めば良かったのだろうが、怠慢人間の浅墓さか、とりあえずその間だけ充実できる目先の土方作業の方を楽しん

で、地道な練習の方へは意欲が湧かなかった。

2年目の秋からは平石がガキをもらい、端で見ていてうれしかった。毎日曳馬に連れて行ってもらえるし、ガキの評価も上がった。僕はというと、サブについた輝魂龍の世話に満足していた。輝魂龍といえば、初めはむしろ嫌いだったのだが、付いているうちに好きになってしまった。ある日のことである。昼当に早く来て、飼桶を取りに輝魂龍のパドックに入ると、彼はいきなり前から跳びついて、あっという間もなく僕のアノラックの背中の所をくわえてしまった。そしてじっとしているのである。ふと見上げると、彼の満足そうに細めた眼が潤んでいた。昼当が始まるまで首を抱いていた……。
後にも先にもこの一度きりなので、ただの気まぐれだったのかもしれないが、えらく感激したのである。

そうこうしているうちに、北大馬術部が好きになってしまった。部のために雑用を片付けるのが楽しくて、バイトなどは進んでやったりもした。こんなんだから、僕が4年間下級生でいたなら大層重宝したことだろう。ところが、3年になっても4年になってもこの調子だから仕末が悪い。主務の大役を担ったら大きく変わるだろうと思ったがたいして変わらず、相変わらず目先の単純作業はやるが、長期的な事や広い目で見る事ができず、そのしわ寄せが主将に回ってしまった。

馬に関しても同様で、憧れのガキをもらい、今度こそ俺は変わるぞ、と思ったのだが、確かに曳馬には行くし、手入れもキチンとやったが、大きな目標や長期の計画が、雲の上にある如くぼんやりして、見えない。ついついその日一日の練習を無難にこなすことに尽きてしまう。

結局、この3年半は一体何だったのだろうか。代が変わる毎に、全日学団体出場など部の目標があり、その時は、これこそ俺の目標だ、などと意気が上がったはずなのだが、そのうちにぼやけてしまうのか、見えなくなってしまう。この3年半で、俺自身が成長したとも思えない。部のためにもなっていない。別に馬は好きではないが、その中で特別な存在として妙に共感を覚えたガキでさえ、彼のためになることは何もしてやれなかった。できる・できないは別として、一体何を求めていたのだろうか。

でも、馬術部生活でいろいろな人に会えたのは大きな収穫でした。残り少ないあと1年2か月の学生生活で何かをつかみたい。

Ⅱ　三年半で変った事

動くのが億劫になった。金を使うようになった。人見知りが少し治った。乾草バイトが好きになった。授業をさぼるようになった。草刈が怠慢になった。体に傷跡が残った。心の傷も増えた。歳を取った。

Ⅲ　さらに数か月経って変わった事

一週間に3回も風呂に入るようになった。体力が衰えた。授業に出るようになった。バイトをしたら、お金は自分のものになる。清潔になった。歯をみがくようになった。食物のうまさがわからなくなってきた。本を読むようになった。ガキの名を呼んでも振り向いてくれなくなった。

中　川　千夏子

どうせ自分はこんなもの、と開き直る前にもう一歩のふんばりがなかなかできない。でも、開き直ったり、諦めたりしても、"こんなもの"でいたくないから、背伸びばかりしてしまう。その背伸びも、何かつかめる程伸びればいいけど、中途で疲れて休んでしまう。肩ひじはらず、マイペースでゆきたいとは思うけど、気持ちと行動がちぐはぐで、スローペースで、その割には確固とした何かを手にしていない。やっぱりふんばりが足りないんだよね。

馬術部入って、四年間続けて、結局留年してしまった。留年して、すごい犠牲をはらったわけで、それに答えうる答え、簡単に言っちゃえば、馬術部やってよかったことは、そりゃあいろいろあるんだ。だけど、その犠牲に答えうる納得できる答はまだわからない。これからの自分が何ができるか、何をやるか、これからの自分をどうゆう風にしてゆくか、それが答になるんじゃないかな。今の自分は、北大に入り、四年間馬術部にいた、他でもないそういう奴で、それが1年たりとも欠けてはいけない自分なんだから。ちょっとよくわかんない文章だけど、今考えていることってこういうことかな。

9月にクラブから全く引退して、ポカッと自分の空間があいて、さーやるぞ!!って、いろいろやりたいことがあったけど、気ばかり焦って何もできない状態だった。そうなっちゃつたのも、馬術部やってた時での、着々としたものがなかったせいかもしれないなぁ。

ふんばりどころってあると思う。絶対、譲っちやいけないふんばりどころ。調教のふんばりどころ。試合のふんばりどころ。ここって時に、自分がどれだけふんばれるか、これだね!

四年間、馬術部で知り合ってつきあってくれたみんな、どうもありがとう。これからも、いろいろなことでお互い吸収しあっていきたいな。

平　石　哲　生

4年間を振り返って、まず最初の1年半、ただ馬が可愛かった。サブチーフになる毎、その馬が好きになり、曳馬をし、手入れをし、それが1日の総てだった。それから北雛号のチーフにつく。これまた嬉しかった。朝、北雛に乗り、それから競走場へ行って乗せてもらい、帰ってきて遅い昼飯を食べ、3時頃から曳馬し、手入れし、夕飯を食べ9時頃には寝た。そして2年目の冬を越し、その頃から石狩乗馬クラブに行き、毎日2～3頭乗せてもらう。思い返してみれば、本当に勉強しなかった。

それから1年間、主将として頑張った。頑張ったつもりだった。しかし結局、自分勝手なことばかりしていた。後悔してるなどと言うのが申し訳ないぐらい、自分勝手な事をしてきた。本当にはずかしい。にもかかわらず、ＯＢの方々、それに現役、皆、クラブの為、頑張ってくれた。協力してくれた。内心では僕のやる事にあきれていただろう。本当に感謝の気持で一杯です。クラブの皆だけでなく、小野さん、布浦さん、斉藤さんを始めとする石狩乗馬クラブの人達、百瀬さん、武笠さん、宮浦さん、佐藤さんを始めとする碧雲の人達、札競の井上課長、瀬川さん、久保さん、藤沼さん、西沢さん、馬2頭いた

だいた調教師の久保さん、蹄鉄打ちの太田さん、各乗場クラブの方、他大学馬術部の者、皆に世話になりました。

自分は北大馬術部が好きです。今後、この4年間でクラブから与えてもらったものを大切にし、またできる限り、この馬術部に協力していきたいと思っております。

平　山　復　志

4年間いろいろな事があり、さまざまな失敗や無責任を犯してしまいました。馬では失敗し、役職も一人前にやってこれたとはとても言えません。あの頃の自分の心の中に巣食っていた物を今考え直してみると、あれもしなければ、これもしなければ、あれもしないとみんなの目が、これもしないとまずいな、あれもこれも、という考えでしなければいけない事がつぎつぎと追いかけてきていました。部で行なわなければいけない必然的な物とか、回りからの要望とかに自分の行動が縛られているような、そんな錯覚に落ち入っていたようです。そのようになると何事もやる事がめんどくさく思え、やっても人並みの所かそれ以下で終ってしまい、その一歩先までは決してできないものです。そうではなくて、自分から働きかけるつもりですべて進めるべきです。部の活動はもちろん統率がとれているべきですが、一人一人が主体的でないといけません。

今になってみると、馬術部の活動を通して体験したすべての事が、馬術部に対しては申し訳ない事も多かったけれども、自分にとっては大きなメリットであったと思えます。自分というものが少しは見えてきたような気がします。馬術部という存在そのものに本当にお世話になりました。部に入って得たさまざまな事を持ちつづけてこれからもがんばっていこうと思います。

森　田　　敏

1年のときは、俺はうまいんだとうぬぼれていた。

2年のときは、腰痛の俺に何ができるんだと、いじけていた。

3年のときは、ノエルに乗って、平手打ちされた。

4年のときは、ドンとルーキーに乗って、苦しかった。

いやー悲惨だな。

でも、馬術部に入って300枚以上にもなる写真をめくってみると、僕はとても楽しそうで、満足そうな顔をしている。

「俺はマゾか」そういうところもあるかもしれない。

一生懸命だった。だから一瞬一瞬が光っていた。これは言えそうだ。では何がいけなかったのか。

答えはきっと、「俺は馬鹿だった」ということだろう。馬鹿にもいろいろなタイプがあると思うが、僕のは、「今、していることが、将来どうなるか予想できない馬鹿」だろう。すなわち、「想像力のない馬鹿」である。「車の運転していて、ここでアクセルを踏み続けたら事故になることがわからない馬鹿」、「核戦争が起きたらどうなるかわからない馬鹿」と同じである。それでは、残る現役が、どうしたらこのような馬鹿にならないですむか。

1つには、僕を含めた先輩たちがしてきた失敗を、よく見ること。直に聞くのも良いだろう。そして、あたかもその失敗を自分がしたようなイメージトレーニングをすること。すなわち、想像体験(?)をすること。もちろん、先輩たちがしてきた成功も、体験してほしい。たいていの失敗、成功は先輩たちがしてきているはずだ。

また、自分がなぜ失敗したか、どうすればうまくいくかを、わかっている先輩は、同じ誤ちをしようとしている後輩を、"彼らの頭とこぶしと脚を持ったつもりになって"導いてやってほしい。それが、教えるということなのではないでしょうか。

現役のみなさん、今ならまだ間に合う／

頭を柔らかくして、そう、体も柔らかくして……

あなたは今、畜大の準備馬場にいる。2回走行がはじまろうとしている。……

実は、僕も今、想像体験をしている。

アフリカで、農業をしている。ことばが通じない。こんな乾燥地での農業、どうしたら良いかわからない。金もない。……

頑張るぞ／

中古車と整備

民間車検工場

株式会社 北大モータース

札幌市北区北18条西5丁目☎726-1526

4年め（上段左より）国枝，中川，平山，平石
（下段左より）森田，嶋田，丹野

3年め（左より）町田と北皇子，山田と北耀，小役丸とノエル

2年目（上段左より）久光，西村，福島，佐多，半田
（下段左より）陣川，真鍋，中村，高田

1年目（上段左より）高橋，河野，佐藤，石井
（下段）服部

自己紹介・他己紹介

国　枝　由　紀（4年目）

一年一年、年を追うごとに、また何かを選択……学部や講座の移行にしろ、ほんの些細な考え方や進み方にしろ……そういった選択をするたびに、可能性がどんどん少なくなってきている様な気がする。たとえば、幼い頃には自分の前には数え切れない程の多くの道が開けていて、そのどれをも選ぶことができたのに、分岐点を経るたびに、だんだん前に見える道の数は減っていて、少しづつ何かが違ってきてしまっている様に思う。けれど、時間の流れる方向はいつも一定だから、あの時のあの場所まで戻ってやり直してみたら……なんてことはできっこない。

結局、人間は最終的にはひとりであって、道が暗かろうが細かろうがひとりで進むしかないのです。

☆　☆　☆

名古屋、ブリッコ、「ウルサイ／」、競馬大好き、酒乱、赤いカマキリ、ケーキ、ライト、根性、「バカ／」、コワイ、クラリーノ長靴、よく食う、馬匹、ノエル、農化、東日本婦人障碍優勝、涙、白衣、夢、強さ、弱さ、頑張れ／

四年間つらいつらい馬術部でよくがんばりましたね。おじさんは由紀ちゃんの成長ぶりを喜んでいます。馬から落ちて腰をかち割っても、半ひねり首着地をしても泣きませんでした。でも、スターライトで優勝したときには強い子由紀ちゃんもさすがに泣いてしまいました。顔をくちゃくちゃにして、梅ぼしのようでした。あー青春ここにあり。あれ、青春はこれからでしたっけ？

嶋　田　明　美（4年目）

母と呼ばれて4年、こんなに自炊をしないのははじめてだ。それというのもこの冬の寒さがいけない！だいだいU兄は函館に行くとき、排水管が凍ってつまるなんて全然教えてくれなかったじゃないか／

というわけで今日も私はほか弁に走るのでした。もう母とは呼ばないでください。ああ情けない。

☆　☆　☆

丸い大きな瞳、こんもりした鼻、ふっくらふかふかの唇 ＋ あこがれの胸 × 伝説のテクノカット ＝ 母

引退してもやっぱり部員の母であってほしい。

長い間の入院生活ごくろうさまでした。

嶋田姉は去年1年辛い年を過ごしました。……落馬、入院、3度病院を移り、2度も手術を……

よく耐えたものだと思う。手術直後のあの話すことも食べることもできなかった何日間かの姉の顔が今でも頭に焼きついている。

そして９月、１年間の療養の後、姉は札幌に帰ってきました。もちろんいつものあの母の笑顔をもって。普通の生活にも慣れて、今ではビシバシ学校に通って酒を飲んでいる。

馬術部の最後の１年がすっぽり抜け落ちてしまっているのは残念だったが、今こうして一緒に卒部できることがとてもうれしい。本当に元気になって良かった。

これからもあの"母"の笑顔で後輩達を支えていってくれるでしょう。

丹　野　宏　昭（4年目）

昭和３６年７月１５日生まれ、丑年。蟹座。血液型Ｂ型。身長１５５㎝前後。体重５５㎏重前後。容姿端麗、頭脳明晰、スポーツ万能、などと言われたことはない。学歴：室蘭大和小学校→網走西小学校→網走第一中学校→岩見沢光陵中学校→岩見沢東高等学校→札幌予備学院→北海道大学。現在の所属：北海道大学文学部行動科学科基礎行動学専攻課程認知情報学講座、４年生、今井四郎教授担当。パターン認知について研究中。ＷＡＩＳ知能検査でＩＱ１２６（実習で、測定者＝友人は親切であった）。同じく実習のロールシャッハ性格診断テストの結果：？。趣味：いろいろ（例１：ガラクタ集め、たとえばインスタントコーヒーの空瓶１０数種類。などなど）。特意料理：カレーライス、チャーハン、冷やっこ、サバ罐。人格：思いつきでテキトーな事をしゃべるが、実行に移すことは稀である。性格：のんき。好きな諺：『風が吹けば桶が転がる』。Qu'est-ce que je fais la ？：Ego cogito, nunc.

☆　　☆　　☆

『私は下戸です』

のおなじみの看板を首から下げコンパに登場し、やはり春夏秋冬一年中あのコートと手ぬぐいを身にまとい、ある日突然鞍置場の前で木彫りをはじめ、人並みを大きくはずれた奇抜な発想で主務をこなしたあの後ろ姿には、だれもがあっとおどろかされてばかりです。

部室でウィスキーを飲んでる兄を見かけたら要注意です。まず泊りの人は安眠はあきらめましょう。ちょっとの用事で部室に入る、という人だってすばやく身をこなさないと、かみつかれて、逃げようとするとますますこじれて困ったことになります。そんな兄は実は翌日、「あれっ？本当ぉ？」と首をかしげて、あとでおわびにみかんを１箱買ってくるような繊細さ(?)を持っているのです。ともかく、そう、ともかく憎めない、愛すべき兄です。

中　川　千加子（4年目）

どんなにがんばったってどうしようもないことってあるんだなぁ……ってことがわかった。でも、そんなのってやだな。きっと、どこかがんばりが足りなかったんだ。

この間、馬術部の仲間三人で飲んでて気にいった言葉、"やればいいっしょ。やれば！"
何事も前向きに生きたいね！

☆　☆　☆

練習中の姉は実に厳しい方です。しかし、一度馬から降りれば、気さくでやさしいお姉さん。姉には白い馬が良く似会います。いつも頼れる人。4年間どうもご苦労さまでした。

オオカリヒメに乗った僕は、姉をいじめて、そして甘えようと思ったのかどうか知らないけど、前に出せなかった。出さなかった。2人の間にケンアクな雰囲気が流れたが、次の瞬間、50万ボルトのカミナリが僕の脳天につきささったのだ。ばかやろぉと思って、恥かしい、本当に恥ずかしい事だけど、ホホをつたわる液体のしょっぱさを感じながら馬場を走った。

普段、気のやさしい人ばかりの4年目の女子部員面々ではありますが、馬が入りこむと、表情さえも変ってしまう程なので、内気な僕は、馬が、姉のそばに寄ってこないことのみを祈っておりました。

4年間御苦労様でした。

平　石　哲　生（4年目）

かたつむり、あんたの歩みは、のろすぎた。
最近あこがれる俳優、中村雅俊、松田優作。
好きな言葉、当たって砕けろ。

☆　☆　☆

主将としての1年間、苦労を決して部員に悟らせずに、激務をこなしたすごい人。細身の体に筋金が通る硬派人間。しかし、ディスコに行くと、その筋金がクネクネと器用に踊り出す。

最近、パーマをかけてシティボーイになろうとしたらしいが、あれはどう見てもヤクザだ。それでも家庭教師をやってかなり信頼されているらしいのです。やはりヤクザでも、誠実な人は認められるのでしょう。（実は、その家庭のお父さん、ヤクザだったりして）

車も買ったし、あとは助手席に座る女性だけか。残る二年間の学生生活、数年前の某ＯＢのように、部屋で昼間から酒を飲んだりせずに、頑張って下さい。

あれは去年の7月、地学Ⅱの試験が1講目にあるというその日、まじめに練習にでた私はハミを洗いながら余裕顔の兄と試験のヤマを話し合った。（私はかなりあせっていたが。）夕当で兄を見つけ、

「平石さん、試験どうでしたか？」とたずねたところ

「わし、受けんかったんや。明日や思うてたわ。言うてくれたらええのに。」という言葉が帰ってきた。スワッ／兄も北日に出ずに放校か？と一同盛りあがったが何とか追試を受け長い教養生活にピリオドを打つことができたようです。

愛車の雪かきに余念のない兄、そろそろ助手席に乗せる彼女を見つけたらどうですか？　さあ、また「いいんやて。」なんて言ってないで、ネッ／　平石さん。

平　山　復　志（4年目）

4年間も朝5時に起きてきたのだからこれからも……とか考えていたのだが、最近は9時に学校に着くと「今日は早起きした。」と思ってしまう。自分自身を律する事は難かしいものである。馬術部の前を通り、みんなの働く姿を見て、「よーし、俺もやるぞ。」とふるいたつ自分でした。

☆　　☆　　☆

部内に、ほのぼのした空気をふりまいていた名物、平山兄も現役を退かれた今、「まるで」フツーの大学生のような生活を楽しんでおられるようです。しかし、何くわぬ顔で、ＩＶＹ風のファッションに身を包み、学校へ行けば白衣姿で試験管などふりまわしてるのかもしれませんが、実は、数々の、「笑える」エピソードが、兄の過去に「鈴なり」になっていることを、私たちは「しっかり」と知っているのです／ふっふっふっ……

四年間馬術部にいたのに、汚なく利己主義的な典型的馬術部員になりきらなかった珍らしい人物です。それだけに人当りも馬当りも良く、それゆえにヤクザ馬マリーナの信望を得ていたのでしょう。しかし兄もまた、馬術部員特有の"変わり者"たる要素をしっかり兼ね備えていることは言うまでもありません。兄は良く"ボケてる"と言われます。まるで兄の為に創られた形容詞のように。でも、仕方ないのです。気がつかないのです。自分のピントがはずれていることに。周りの雰囲気についていけてないことに。また、兄ほどジャンケンの弱い人を見たことがありません。これからも見ることはないでしょう。コーヒーじゃんけんをしても、ケーキじゃんけんをしても、何時、何処でしても、いくら負けるのは兄だと予言されても、やっぱり負けるのは、"ひらやまあに"この人です。兄さえいれば、たとえ火の中水の中、ジャンケンの一つや二つ恐くなんかありません。コンタクトが痛いのか、目にゴミでも入ったのか、ねむそーな目をして言います。"あ・の・な・ー・"

暖たかな南のそよ風を感じさせるやさしい兄、北大にいる間は、遊びに来て下さいませ。

森　田　　敏（4年目）

クラブが終わったら、自分の背中に新しい羽が生えてきたような感じがします。前、生えていたのがボロボロになって抜け落ちたのでしょう。ハハ、ほとんど自己陶酔の世界だな。

でも、クラブにいたとき、自分は背中の羽を精一杯には拡げていなかったと思うのです。拡げたら、余計疲れるとでも思っていたのでしょう。

現役の皆さん、思いきって自分の羽を全て拡げて下さい。きっと、もっと楽に、そして気持ち良く飛べるようになると思います。町田主将を先頭に、大空を思い存分飛びまわって下さい。頑張れ。

☆　　☆　　☆

人とは、一線を画する理論を述べるが、その割には実行力の伴わなかった兄も、最上級生となった去年、大いに頑張ってくれました。あの女っぽい腰つき、切れ長の目。しかし名馬ドン・ホッパーにまたがった兄は、目も引き締まり威厳さえ感じられた。今年、卒部する中で唯一卒業、就職する兄。しかしあせってはいけませんよ。兄には、しっかり者のお嫁さんがいいでしょう。結婚などいつでもできる／

皮ジャンにジーパン姿の兄は、必ず一日一回は部屋に寄られます。

「おう、何やってんだよ」と、情緒豊かな笑顔で下級生に声を掛け、常に好奇心を携える兄。

「たばこある？１本頂戴。いいよな」と、断られる事を知らない、いつも幸せそうな兄。

「ダメだよ。落ち込んでちゃ。何とかなるもんだよ」と、経験者は語るといった様相で相手を励まし、愉快にさせ、自分ではいつも悩んでもいるようであり、全く悩むことを知らないような人でもある兄。

卒論や就職試験、そして試合のプレッシャーを何とか乗り越えてこられた兄。

就職、おめでとうございます。札幌に腰を落着けるそうで。第二の長屋さんと言われぬよう、３０才までには何とか、グァムばって下さい。

小役丸　千加子（3年目）

"Trust Your Star"　— 汝の星をめざせ — 私の好きな言葉。

この広い世の中、人間は無数にいるけれども、その人その人の上に輝いている星があり、その星に導かれ未来へと進んでいくものだと思う。その星を目指すことにより、夢が生まれ、夢を追い求め、生きがいを見つけていくであろう。私の場合その夢は、ある時はＳＰＹであり、またastronautであり、pilotでもあった。何億光年もの彼方で瞬く私の星は、多くの夢を抱かせることによって希望を与えてくれ、また苦難や絶望をももたらす。もちろん中には、ひとひらの雪の如く淡くはかないものもあろう。でも、夢があるからこそ今を生きていられるのではないだろうか。そんな気がする。真に生きている人は、自分自身を大切にするからこそそれ以上に、他人も馬も別け隔てなく愛せて、内から光り輝いているように見える。そんな人に私はなりたい。それには、自分に与えられた使命というものも充分

感じていなければならない。最上級生として、副将として、女子部員として。大学生活燃え尽きて、そして何かを残せたら、と願っている。

今は、自分を真直に見つめ、周りを見渡し乍ら、神様が与えて下さった私の小道を一歩一歩歩んでいくほかない。春一番が吹く頃、私から萌え出した若芽は天からの息吹を感じて生長し出すであろう。
自分の可能性を試す時がくるまで、それを信じつつ。

"何にも咲かない冬の日は、下へ下へと根を下ろせ" ― 私の好きな言葉。

☆　☆　☆

1分間私に時間を下さい。事件や年代別の必修行動を勝手に決めて、世間をまどわせた某国営放送の某鈴木アナとは、まっっっったく関係ありませんが、「気くばり」ということばは、まるこ先輩のためにある様なもんです。

どうか幸せなwedding を、のえるの全日学優勝で、ぱんぱんして下さい。

燃える血潮の予科練の　7つボタンは桜にいかり
今日も飛ぶ飛ぶ　かすみケ浦にや
でぇっかい希望の雲が沸く

いやいやいや　　ＦＩＮ

クラブの過半数が女子という中で、副将として見事にその役割を果たしております。まさに、女子部員の鏡といえましょう。そして、彼女の人徳、優しさ、女性としての魅力が、下級生に頼られ尊敬を受ける所以でありましょう。

最近、その優しさが一般と増したように思われます。薬指にはめられた指輪と関係があるのでしょうか。何れにせよ。彼女は今年は燃え尽きたるまで燃え、クラブにノエルに、そして……に花を咲かせてくれることでしょう。期待しております。

町　田　憲　司（3年目）

― 青年よ！　大志を抱け ―

あと一年。短かく、二度と帰らぬ、あと一年。
後悔、先に立たず

☆　☆　☆

今年も去年に引き続きギャランと共に、全国大会を目指す兄です。
浅科村青年団長時代に培われたリーダーシップで、クラブを統一し、今年こそ団体出場を成就させましょう。ね！　マッチ!!

「やる気がないだけだぁ！」兄は怠慢な部員に対して、このひと言をあびせる。そのとうり、兄は何事に対しても一生懸命である。主将として馬術部を背負うにふさわしい人。スポーツ万能少年。あのぱっちりした目とその上にのっかっている眉毛がチャームポイントの素敵な兄である。

山　田　和　男（3年目）

ピーターと伴に背中を痛め、ついに人馬一体の域に達しました。しかし私はこの一体感を楽しみながら早く抜け出たいとも思ってます。人馬一体だけはこのままにして今シーズン青春するぞー。

☆　☆　☆

みなさんこんにちは。"舌先三寸"のヤマダです。僕はこの器用な舌先を武器に日夜馬術部のために戦っています。ある時は体育会へどなりこみ、またある時は学生部にすわりこみ…。また人は、僕を、"着こみのヤマダ"とも呼びます。ヒマラヤ遠征にも行けるというふくふくのダウンで陽光うららかな市街を歩くのが得手です。しかし、僕を語るには何と言っても、あの、"冬合宿恐怖のトイレぎっくり腰リタイヤ事件"が不可欠といえましょう。そうそう、話は変わるけど、今年はついに学部移行だってしたんだぜ／でも教養部大好きだから、たまにドイツ話やりに行くかもしれません。何だって、長ーく愛するのが俺のモットーなのさ！……

赤いロボコンがメインストリートを歩いていたら、それは兄です。顔もまったく見えなくなるあの必殺ダルマスーツは誰もが最長距離をとってすれ違います。そんな彼は実はクラブの対外交渉の大黒柱でして、学生部との交渉だって大好き(?)なのです。除雪車の件では大活躍してくれました。

冬合宿では腰を痛め、うめき声をあげながら破行していた兄ですが、馬体だけじゃなくて、人体管理もあせらず、しっかり治して欲しいものです。P助の馬体管理に関しては、第一人者の兄です。P助と共に勝ちまくるっきゃありませんよね！

佐　多　康　子（2年目）

上級生に従順であることだけが、下級生の甲斐性じゃない。
頑固で融通が効かない。強情なのは、薩摩女気質さ／　フン／

☆　☆　☆

チビの馬房の前で、チビとたわむれている姉の姿を見るたびに深い因縁を感じるんですね。あの1人と1頭のまるで童話のような光景には、ほのぼのとした日本昔話のような雰囲気がただよっているんですよね。

姉は何事に関しても、自分の意見というものを持っています。信念に従って妥協を許しません。何か迷っていたり、悩んでいたら姉に聞いてみましょう。そんなことでどーして悩むの？をばかりにびしっと答を出してくれます。姉は細かな心配りと思いやりのあるやさしい女の子です。正義に味方し悪を憎むあまりにとび出す啖呵には心を打たれます。近ごろは熱心にガキの教育に努め、ゲップバンドの穴をひとつ、またひとつと増やしています。

陣　川　雅　樹（2年目）

人の一生には焔の時と灰の時がある。

— ○○○○・○○○ —

…はて、ほのおの時とは？……

☆　　☆　　☆

ある冬の朝、見知らぬ人が入部した。全く奇妙な人だ。でも、こちらが後ずさりしてしまう程の気合が入っていた。そういえば、秋に１人やめた友がいた。全く奇妙な人だった。何故か、彼を思い出してしまった。でも、この新入部員は、前の奴とは、全然違うすばらしい人だ。前の人は悲惨な人だった。「何でわしが、○×せなあかんねん。」と口ぐせの様につぶやいていた。でも、この新入部員は違う。自ら、１カ月間、朝、昼、夕方の当番をするという。前の奴は悲惨だった。バイクで転倒して、手首を痛めて、飛び乗りも満足にできなかった。でも、この新入部員は違う。クレインで調馬索をしている時、馬に暴走され、指を骨折したにもかかわらず、ギブスを捨てて、やって来た。期待しよう、この人に。

おっとりしているようですばやくて、柔らかそうだけど実は堅そうな、全く正体のわからない兄である。でも、あのからだの中には何か燃えるものを持っているのは確かです。充電しておいた力を、さあ、今こそ発揮してください！

高　田　敏　江（2年目）

最近、自分の騎乗日誌を見るにつけ、何か足りない！ん〜〜。そうだ、『絵』がない／『絵』のない騎乗日誌なんてもう古い。と悟った自分は、突然、絵の勉強にはげみ出した。しかし、『シャケの子供？』『ムーミン？』『たつのおとし子？』などなど、さんざん言われたが、それでも新しいものを目指し、講義中も、いや実験中までも練習をかさねて

となりました。やはり……やめた!!

☆　　☆　　☆

どんなに苦しくても弱音は吐かない。つらくても平気な顔して笑っている。そんなひとだと思う。

学部移行してからはパーマをかけ、スカートをはき、変身をはかっている。しかし見かけるのは生協食堂のみ。口いっぱいほうばって幸せそうな頭をしている。変身くずれの典型的馬術部タイプである。やっぱり彼女にはキュロットが一番。マリに乗って天まで上がれ!!

中　村　康　利（2年目）

無知である。それ由、知識欲は有るが、無知である。歯止めは無い。故に情緒は甚しく不安定である。クラブに求めるものは多大となってしまうが、現状は貧困である。これも時代か、所栓、時は変えられぬものか。横索とは耐え難いものと痛む胃をどうすることもできない今日此の頃である。

☆　　☆　　☆

兄には中年のオバサンの雰囲気があります。世間話を生き甲斐とし、自分で言った冗談に自分ひとりでウケています。近頃はミヨコとのオバサンコンビでますますパワーが増してきたようですね。副務の仕事も大変でしようが、是非とも頑張って下さい。

不可解なようでよくわかる。複雑なようで単純な、寝起きの悪い、ガッツの男。物事に賭ける情熱は人一倍激しく、怒りにまかせてぶち進む。その勢いで一気に全日へつっ走れ／ゴールは目の前だ／

西　村　幸　祐（2年目）

天井を見つめていた。机下のデジタル時計は、何も言わず規則的に光ったり消えたりしている。薄暗

い部屋の中で「ひとり」っていう事と、「海」っていう事をその薄暗さと重ね合わせてみる。自分は本当に幸せ者だと感じて、天井を見つめる。

ラジオのスイッチに手をのばす。Yesとでるか Noとでるか。おしつけのメロディーが片偶に無理矢理おしのけたダストを地下鉄の風で舞い上げる。ぶぁっかやろぉー。

彼女に会うため、ツイードのジャケットとローファーの靴で気取って出かけたのに、彼女は「おなか空いたから帰るわっ」って。そんな気持ちで呼び出しのベルに現実の光の中に戻される。

「ああ、明日は行くから。」

僕は、ポケットに手をつっ込んで、今下りてきた階段を１つおきで飛んで上っていった。でもスイートピーは、今年も咲かなかった。待ったプリテンダーの悩みは、本の上に置いたレモンの様にぱちんとはじけた。

迷走神経を刺激した夢は、そのマヒ状態に耐え得るだけのバカにはなれたろうか？

ノブにのばした手を止めて、僕は、親指で人指し指の爪をはじいた。そして、そっと目を閉じて、また天井を見上げた。

☆　　☆　　☆

兄といえば切っても切れないのが胃カイヨウ。一見田舎の素朴な青年風のその容貌とはうらはらに、繊細な神経の持ち主なんですね。病床でも飼料の本を読んでた、責任感にあふれた姿に私は思わず感動してしまったのでした。めざせ農化！日本の農業は君を待っている！

でも思うに、最近老けたんじゃありません？悩みすぎるとまた再発しますよー。ちなみに胃カイヨウにはジャガイモのしぼり汁が効くそうです。（はっきり言って、まずいけど。）おためしあれ。

はっきり言って、彼はつかみどころがない。浪慢チストのようであって、かなりの現実主義者でもある。理路整然な論述を説くかと思えば、精神分裂症のような支離滅裂なことを論弁して、周囲の人間の思考回路をパニック状態にさせる。ウツ気分に腕を組み、視線を下に落とし、考え深げに重そうに足を引きずっていたかと思えば、突如としてソウ気分に変わり、人真似をしてはケタケタと腹をかかえて笑い転げまわる。結局のところ、"何やかんや言うたって、それでいいんやて。"で、事を済ます。わけがわからないが、一緒にいると飽きることがない。そんな特異な兄。

昨年は、胃をおかしくし、入院を繰り返し、皆に心配を掛けさせた。が、それ以上に、クラブのこと馬のこと、役職のこと考えてくれた。公認大会の一番忙しい時、病院を抜け出して手伝ってくれたのには泣けた。感謝。

今や、男子部員は貴重な存在。無理をせず、考え過ぎずに、持ち前の明るさでもって、これからのクラブを支えていってほしい。頼りにしてるよ。

半　田　友　子（2年目）

そりゃ人に迷惑かけるのはよくないよ。でも正直でいることだって必要だよ。

周りの人には迷惑のかけっぱなし。皆の寛容さと自分の小ささを感じてしまう。だけど落ち込んでなんかいないよ。前進あるのみ。

何にだって好調・不調ってあるんだよね。特意のあせりぐせを克服すべく、マイペースでがんばろうっと!!

☆　　☆　　☆

（半田姉＋長屋兄）÷2＝NORMAL

ふと見ると、姉はサイクリング車でメインストリートを走っていました。又ふと見ると、エメラルドグリーンのフード付ジャケットに身を包み馬場へと走ってました。　又、ふと見ると、長靴をはいて、クラ館へと走っていました。姉はいつも何かを追い求めて前へと走り続けています。その真剣なまなざしに、私はただひたすらに感動するのです。

久　光　経　司（2年目）

ビゼンニシキは密かに夢を紡いでいた。来るダービーで仇敵が滅びの道に踏みこむだろうと直感していた。皇帝と称してレース前から確勝を叫んでいる陣営の過信が罪を呼び、報いをうけることを信じていた。予言とは神の意志の仲介であるのに、連中は神に命じているのだ。それに比べて自分にかけられている期待の質と量はどうだ。彼に惨敗の予兆さえ指摘する賢しらども。彼は怒りを抱いていた。もしルドルフが不在なら、自滅するなら、同じ手合いが彼に光背を負わせることも知っていた。彼は宿命を信じなかった。宿命は火花の散る鍛練の打ち毀すべき呪いの壁であると信じていた。砂を噛む練磨が明日の光となって降りる、そこに神の祝福があるはずだ。でなければ生命あるものは何を信じて生きるのだ。そう呟いて彼は勝利のトレーニングに赴いた。

レースは、彼の思い描く通りに進行した。ルドルフは内埒沿いに閉じ込められ、駆け引きの渦巻く競走にひきこまれて喘いでいた。ビゼンは絶好位をキープしつつ、ルドルフが力を費消していく様を眺めていた。そして三角過ぎ、彼はルドルフを見捨てた。彼は滾れる余力に体を弾ませて上昇し、四角を掠め坂を望んだ。彼は神の祝福と勝利を感じ全身を震わせた。4ハロン棒が見えた途端、心臓に烈しい圧力を受け、肺がわなないた。後続が怒濤のごとく彼も抜き去っていく。その端に、天罰を解き放ったルドルフのしなやかな体。彼の巻く旋風が音をたてて立ち昇り、その中心にビゼンは溺れていった。「悪い夢だ。許されない夢だ。」彼は霞む目で前方を凝視した。ゴール前のルドルフの姿が眩しいばかりの光彩に包まれて、陣営の哄笑がビゼンの耳を聾するばかりだった。才能という力が神をも悪魔をも引き連れて栄光の中に溶けこもうとしている。その光が彼には世界の中にポッカリとあいた穴のようにみえ

た。か・み・さ・ま・という悲鳴が自分の紡いできた夢を食べていくのを怨みながら彼は沈んでいった。

☆　　☆　　☆

馬場の隅で、汚ない格好をし無精髭をのばした、１０歳位は年上の労働者風のおじさんが、つるはしを振り上げて黙々と氷の様に固まった雪を割っている姿を見かけたら、一言声をかけてあげて下さい。「おーい、久光／」と。すると彼は、つるはしを握る手をちょっとだけ休めて振り向いて、顔面いっぱいにあの憎めない笑みを浮かべて返事をしてくれます。恵まれない子供たちに手を差しのべるだけの余裕のあるあなた、ねぇ、彼にも何かあげてください。

なんじゃ、あいつは／礼儀正しいのか、ただヘラヘラか。辛抱強いのか単なる鈍感か、兎に角、一筋縄ではいかない奴だ。かわいがっていいのか、相手にしない方がいいのか迷ってしまう。入部当時、役立たずの代名詞だった彼も、最近、マラソンではクラブ内のトップクラスという。今年は、名馬ドン・ホッパーに乗るらしい。彼の明日に期待しよう。

福　島　光　絵（2年目）

「重い量・軽い質」と言われています。最近、腕の筋肉に自信がついてきました。走るのは遅いですけどあきらめは早いのです。

☆　　☆　　☆

１８条通りを西へ、さらさらのlong hairをなびかせ、ウォークマンを聞きながら少し太めのシックな後ろ姿。"みつえ"と大声で声をかけると、しばらくして、コワイサングラスのあねごがふりむいた。

時々人を小バカにした様な目で見下します。やはり偉いんでしょうね、何んと言っても獣医学部ですから、甘えたなのかと思って接するときつい事を言って制御をきかせ乍ら笑っている。体に似合わずデリケートで一般人が取るに足らない事でも傷ついてしまう。傷つけた原因が私である事は分かっても何で傷ついたのか分からない事があるのでこっちが困ってしまう事さえある。部報名物他己招介のワンパターンとして最後にちょっともち上げときますと……　馬の立場に立ってやれる部員の様です。彼女についてもらった馬は幸運でしょう。大切にしてもらえるはずです。行動力を見せびらかす様な人ではないので、やる気も過少評価しがちですが、もう少し馬術に貪欲になって欲しい気がします。

直　鍋　直　子（2年目）

夏、講義が終わってメインストリートを歩いていると、よくきたない格好をした人間が馬をつれているのに出くわす。

「楽しそうだなあ。」「しかしボロい服だなあ。」

などと他人事のようにぶつぶつ言ったあと、そういう人間と馬たちと、自分が無関係ではない事に、しみじみと感動する私である。

☆　☆　☆

姉はほんとーに明るい人です。姉が暗く落ちこんでいるのを見たことがないほどです。だからといってアホでもありません。馬や、馬術のことを実に真剣に考えているのです。姉は馬術部の「母」としてみんなに安らぎを与える存在になってくれることでしょう。

小さな体の奥に秘められたファイト、そしてクラブに対する情熱。まなべは実にエライ娘です。それは実に彼女の服装にはっきりと現われていて、入部当時は（とても愛媛から来たとは思えない）イマいファッションであたりに後光をふりまいていたのが、最近ではすっかり馬術部ナイズされて、まぁるくなったほっぺとともに、彼女の変化を語っています。うん、いいことだよ。これからもその根性と可愛さをなくさずにいておくれ。

石　井　信　昭（1年目）

僕のことを痴呆だと思っている方も少なくないでしょうが、この頃自分でもそう思えてきました。

一部には〝ボケ〟が進行しているといううわさもありますが……。

しかし、bright石井は決して世間の中傷に負けはしません。そうよ、青春よ！くじけちゃだめ！

☆　☆　☆

貴重な一年目男子の１人、今年は2人しか男子が入部しなかったのと、彼の頼まれるといやと言えない性格から、かなりかわいがられて疲れている事が多かったようである。最初の甘いマスクときれいな洋服はどこへやら、完全に馬術部にマッチしてしまった。なんとなく点火の遅いライターのようである彼だが、その奥底に秘めた炎を２年後３年後にきっと爆発させてくるでしょう。Fight！

彼の顔は能の面である。しばしば笑うが、歯は噛んだままである。後は変化は無い。ひたすら我を守る男である。強い精神構造の持主である。そんな弟が、馬を必要とした。頼もしくもあり羨しい。

河　野　淳　子（1年目）

受験前に見た北海道が舞台の映画で、ナレーターが言ってたんですね。春が来て（春の美しい風景）夏が来て（明るい風景）秋が来て（絵になる風景）そして冬が来てあっという間に春が来て。そうなんです、なぜか冬の部分がなかったんですよね。私はだまされた。

☆　☆　☆

昭和４１年４月１日生まれの彼女の人生は、その誕生が示す如く冗談に満ちておりました。

３才の頃既に外国暮らしを経験した彼女は、小学校一年生の時には４か国対抗親善麻雀大会の実況中継を一人で演じるほどの語学の天才でした。さらに、６年生の時は池坊流生け花免許皆伝の腕前をもち、中学２年の時は珠算で全国制覇を成し遂げ、高校に入ると放送部で美声を振るい、赤点教科数最高記録を達成し、デパートで迷い子になって小学生の妹に助けられ、驚愕した両親がお好み焼を食いあさるという何ら関連性の見い出せない事件を引き起こしたりしました。

そんな彼女も北大馬術部に入ってからは、匿名希望のヤクザ馬北紫雲に血の洗礼を受け、除雪の際に雪山の中から発見されるという平凡な学生生活を送っているそうです。

※　なお、この物語はハクションであり、登場人物はすべて風邪をひいています。

彼女は１年目の中で１番最初に入部してきました。ほっぺをまっかにして、どこの出身だったかちょっと覚えてないけど、"うちは……です"という話し方がとても印象的……。とびのりでは苦労していた様だけど、もうできる様になったのかな……？……どんな大変なことでもやる気さえあれば、きっといつか乗り越えられる時がきます。そう信じて４年間がんばってください。そして色んなことにトライしてみてください。

高　橋　知　子（1年目）

何かしたい、何かしたいと思って来たけれど、結局一番何がやりたいのだろう？

☆　☆　☆

雨にも負けず、風にも負けず、雪にも負けず、よく家で寝てくれましたネ。新人生にどう説教するかおじさんは今から楽しみにしています。でもスポーツウーマントモ子ちゃんは足も長く運動神経もすぐれているので乗ればうまくなりますよ、あと気力の一字のみ。がんばれ、がんばれ、トモさん／がんばれ、がんばれトモさん／いただきます。なんのこっちゃ？

順応する、ということは恐しいことで、普通の女の子が、いつのまにかボロ布をまとい授業へ出てグーグー寝てしまう。彼女が、嶋田のあのまっ赤なトレーナー、将介に破かれて穴のあいたトレーナーを

着、ジャージはいて、"へへっ、こんなかっこで授業に出ちゃいましたよ。もう、おわりですね。"と、ヘラヘラしているのを見、私は、はっきり言って、たまげた。

佐　藤　佳　子（1年目）

なんで上手にならないのだろう。落ち込むときりがない。どんどん落ち込んで授業の単位まで落としてしまった。困ったなぁと言いつつ顔だけは独立して笑ってしまう。根性なしの怠慢な自分をどうすることもできない。ほんとにもー！バカ！

☆　　☆　　☆

頑張り屋の様であり、怠慢な様でもあり、きちんとしている様で、いいかげんな様でもある。小さい体ながら練習に作業にと頑張り、自宅から３０分マラソンして練習に出てくる根性には頭が下がります。日頃は、一人でぶつぶつ何かつぶやきながら愛を込めて馬の手入れをする名サブチーフ、また、コンパになれば馬の名前を叫びながら先輩にからむ勇敢少女。きっとこれからも陰から馬術部を支えていってくれるでしょう。

はじめは、昨年卒部された佐藤姉といろいろ比較されつらいだろうなあと思っていたのだが、しばらくたって、自分の読みが浅かったことに気付いた。昨年Ｓ姉が苦労して築きあげた数々の記録（罰朝など）をいとも簡単に打ち破ってしまった。これは彼女がまじめで責任感が人一倍強いからなのか？　はたまたただ単にガンコで要領が悪いだけなのか？　授業中もほとんど机かあるいは真っ白なノートと90分間、目をつぶってにらめっこをしている。私には昨年のＴ姉やＨ姉の姿が、思わずオーバーラップされてならないのだが……。

でも、動物に対する愛情は誰にも負けない彼女だから、馬術にクラブに燃えて、毎日の練習や手入れにあのコロコロッとした笑顔をふりまいてくれることでしょう。

……？　いやいやほんまのはなし、なあ／さとう。

服　部　雅　史（1年目）

天才はいつの時代も不幸であった。

全くもって不憫である。

☆　　☆　　☆

「何なんだ?!こいつは。」これが彼の第一印象だった。その内「すぐやめるに違いない。」という確信にかわった。ところがどうだろう。今では北日の副幹事長を務めるに致っている。

今日も元気に、斜下方から、くるっと見上げ、「何でですか？」「そうですか？」を連発している。スタジャンを持っている彼は、もうはんてんは着てこない。

奴の顔を描こうとすると、奇面組の零くんになってしまう。奴と話をすると、思わずひけめを感じてしまう。なんとなれば、奴は月に十万も仕送りして貰っているからだ。いわゆる㊙だ。しかし、奴はどうも洗練されていない。口をキリリと一文字に結んでＶサインまたは、指相模。それが奴の得意のポーズだ。というより、これ以外のパターンは思いつかないらしい。されども、北日本副幹事長になったことで、ツーパターンの㊙零くんの名を全国に広めてくれることだろう。

水　　産　　学　　部

上　本　浩　之（4年目）

事が好転し出すと、さらに多くの事を望んでしまう悪い癖がある。
そして、いつも自分で身動きをとれなくしてしまう。
解ってはいるのだが……治りそうもない。

☆　　☆　　☆

昭和３７年２月３０日の明け方に生まれるという、信じ難い離れ技をやってのけた彼の人生は、その誕生が示す如く波乱に満ちておりました。

３才の頃から水泳を始め、５才で既に犬かきをマスターした彼は、ある日川に捨てられたマネキン人形を人間だと思い込んで助けに行き、逆に自分が溺れかかって新聞に載るという　　劇を演じました。そして、小学校に上がってからは自転車に熱中して、５年生の時に本州縦断の偉業を成し遂げ、中学に入ると極秘の内にオートバイを駆ってトラックと衝突し、自身はかすり傷程度で済んだものの、相手のトラックはエンジンが潰れて荷台の豚１０頭が逃げ出すという大惨事を招き、高校の時は無免許の酒乱運転で近所の交番に自動車を突っ込み、浪人時代は、模擬試験の際中にショートホープの火で答案用紙を燃やしてしまうという悲惨さでした。

そんな彼も大学に受かり、馬術部に入ってからは模範生として過ごし、今では、函館の山奥で子泣き爺や砂かけ婆、ぬらりひょんなどと共に毎夜宴会を楽しんでおるそうです。

でも、スポーツ刈りにサングラスをかけた顔の頬の縫い傷と左手の短い小指は一体何なのでしょうか。

※　注 ― この話に万が一事実が混じっていても、当方は一切責任をもちません。

豪快なオッサンが、オホーツク海へ行ってしまって、一年余が過ぎた。札幌で数々の伝説を作ろうとした兄は、函館で、水産学部馬術部の再建という、またまたデッカイ事をした。去年の道体で１０位に

いきなり入る偉業も遂げた。北大水産学部馬術部は、兄を含めて三名。その苦労は、計り知れない。兄の強大なオンリー・パワーが無い常人には不可能である。拓く男である。

渡　部　　勲

上本主将が馬を語るときの表情は素晴らしい。その輝きにつられて、安易に入部してしまって以来、「しまった！」と思ったことしばし、わけのわからないままその２ケ月後の本学との対抗戦で目指して練習の辛さに泣けてきたこと数回、罰直・罰当数多く、まるで不良馬術部員。そんな中でも続けてこれたのは、主将の強引な（失礼！）叱咤激励のおかげです。乗馬クラブの先生方のおかげでもあるのは言うまでもありません。そして、小さな内輪の試合とはいえ１０月の対抗戦の小障害でゴールを切れたことには一大感激しました。このころになってようやく"馬に乗ること"の初歩がわかってきたような気がします。地道な努力の大切さを教えてくれる馬術部です。４年になってもがんばっていきたいと思います。

☆　　☆　　☆

第１印象：無口で、頭のきれる秀才タイプ。

第２印象：意外にも話し出すととまらない…？？？……

第３印象：シリアスな顔の裏側には、実は、５万円のカローラを、るんるんとばす明るい一面が…。
　　しかし、まだまだ未知な渡部さんです。

渡部さんはとっても忙しい人で、なかなか会えないのが残念です。今日も東山で雪に埋もれて待ってます。渡部さんやーい!!

彼が「ところでさ～」と言い出したら見構えて下さい。この次には難解な単語が連発してきます。ひと度火がつくと止まらない様で実は冷静に自分の立場を考えて行動しているのでペースを乱す事はない。事務的能力は抜群でビラやポスターでも何でもござれでこなしてしまいます。北大戦の最優秀選手!!

安　藤　ひとみ

馬術部にはいってもうすぐ２ケ月になります。３年間、函館で馬に乗れるなんて全然知らず、ほんとに偶然、友達から北水産に馬術部があると聞いた次の日にはTelしていたという、自分でもわけのわからない入部なのです。どんな活動をしているのか、馬ってどんなものなのか、これからどうやっていくのかも考えず飛び込んでしまいました。今、３年、４月からは４年めです。どうしようか悩む時間さえ惜しかった、というのが本音。

でも、早朝、馬に乗りながら、むこうの山からのぼってくる朝日をおがんで、"今日も一日がんばろー！"と思う時、やっぱり入ってよかったと思います。まわりの人にもとても感謝しています。

今一番ほしいものは、時間と仲間 — かな。

札幌のみなさん、いつかお会いできる日を楽しみにしています。

年は２２才ですが、気持ちは１年生です。よろしく！

☆　　☆　　☆

函館は"たっちゃん寿し"の看板娘、安藤姉が店に出る毎週水曜の晩はいつも満員御礼だとか？　これが姉のもう一つの顔なのだ。いや、そのすばらしい笑顔は商売用のそれではなく、何でも笑ってごまかしてしまうという特技に転化するのである。乗馬クラブで誰かがチョンボして、暗〜い雰囲気が醸し出されたとき、「……うっ、気まずい……」、ここで姉の登場、皆その笑顔にごまかされてしまうのだ。

姉が提唱した"乗馬クラブを明るくしよう運動"第一弾は日曜日の昼食の食当を決めたことだった。おかげで、昼食を取らないという習慣のある東山乗馬クラブで、タイミングをはずすとつい昼めしを食いそびれてしまうという憂き目に逢うことから解放された。

何事もいいかげんには済ませたくないという気性とは裏腹に(?)非常に素直な性格の姉は、号令も素直に実行する。馬上体操のとき「足首を持ち上げろ」と言われて鞍上で正座(?)をした。「そのまま腰を前に出せ」、「はいっ」、次の瞬間姉の姿は馬上になく、おりからの深雪の中へダイビングしていた。それでも笑顔や絶やさない姉は、北水馬術部の華である。

入部当時あまりに普通の大学生だったので絶対続かんと信じて疑わなかったのですが人は印象で判断してはいけない様でした。ぎこちなかった厩舎作業も板に付いてきたし、水くみもポリタンクを両手で運べる腕力もついた。馬から落ちても落ちてもめげずに顔中雪まみれにして乗っている。実は根性姉ちゃんだったのです。困った事は全て笑ってごまかす我部期待の新人です。

半浦兄は馬にやってくれとみかんを持ってこられた。が、食べたのはピーター、ノエル、ドンのみ。これは部員がたべるしかないね。　〜12月30日（日）当番日誌より

土間に水をこぼしたらみるみるうちに凍っていった。ぬれた軍手で馬せん棒つかんだらくっついちゃった。やっぱり北国の冬はかわらない。　〜12月19日（水）当番日誌より

What comes next?

強まる金利選好の意識。進む金融技術のイノベーション。シンクロナイズされる世界の金融。次は何が起こるのだろうか。調査・情報能力と商品企画力は80年代の金融機関にとって欠かすことのできない武器となる。投資家のニーズはどこにあるのか。フィナンシャル・マーケットはいかにあるべきか。野村は拓く。金融新時代を。野村は目指す。理想の金融機関を。

野村證券

野村證券株式会社　東京都中央区日本橋1-9-1　郵便番号103　電話03-211-811(大代)

害虫・ネズミのいない住みよい生活と
木造家屋を食いあらすおそろしいシロアリ・
ナミダタケを防ぎ安心した生活を!!

北海道知事登録　第２号
日本しろあり対策協会所属
日本Ｐ・Ｃ・Ｏ協会所属

株式会社　アイピー

札幌市中央区南17条西16丁目
☎561-9350

◎害虫・害菌の予防と駆除のデパート

医薬品卸・IBM特約店

ITO
ホシ伊藤株式会社
代表 011-561-6111

本店　札幌市南８条西14丁目1397番地
支店　帯広・釧路・北見・函館・旭川・空知
室蘭・苫小牧・岩見沢・小樽・千歳

土木・建築・設計施行
造園・塗装・設計施行

道協建設株式会社

代表取締役 美馬 久之

札幌市中央区北１６条西１６丁目
札幌競馬場中央通用門前

電話 716-6455
726-6756・6752

飼い桶・水のみ桶・荒物一式

柳　橋　商　店

札幌競馬場内
☎（店）011-747-7706
（自宅）011-644-3021

日本中央競馬会外部団体

競馬飼糧株式会社札幌支店

札幌市西区手稲前田一条十一丁目
☎682-0311

国内産牧草及燕麦販売・輸入牧草類及
輸入燕麦販売外競走馬に関する飼料全般

学生さんには
ネタもシャリもジャンボ
とにかくジャンボ
ネダンは同じ

舌鼓 鮨の正本

コンパは40名様までOK
11：30～1：00

北16西4北向
☎746-4231

自由人舎時館

北16西4
TEL 726-0158

JAMBO TIME

PM5：00～7：00迄です
◎日曜・祭日除く毎日
ジャンボタイムをご利用下さい。

ジャンボカレー 390円
Set 590円
（サラダ、ドリンク付）
カツジャンボ 640円
Set 770円
（サラダ、ドリンク付）

みよしの
このボリューム
この安さ

北大生なら
一度は
ジャンボメニューを
食べるべし

お食事処
けんちゃん
北区北18西3 ☎726-0346

ラーメン専門

味自慢

秀風

札幌市北区北20条西5丁目
☎726-6664

手造りのパン
洋菓子
有限会社
ジュウジ屋
札幌市北区北17条西4丁目
電話746-5332

ご予算は…？内容は…？
おまかせ下さい!!

味とまごころでご奉仕
仕出し料理
中一
札幌市北区北18条西4丁目(18条ハイツ地下)
事務所／北区北18条西5丁目
☎716-6751

作りたてのお弁当
吉
ほっかほっか
大吉亭
オープンキッチン
札幌市北区北20条西5丁目

学生の皆さん、販売、修理を割引
致して居りますからどうぞ。
高橋時計店
札幌市北区北十八条西四丁目南向
北十八条地下鉄駅前
TEL 七四七－七八四六

電動工具・アルミサッシ・流し台
暮しの日用品・家庭金物・大工道具
建築金物・燃料・暖房器具・合カギ

田宮金物店

札幌市北区北二十一条西四丁目
電話（七四六）四一八七番
三四四九番

ラーメンなら

北龍

北18条西6丁目
☎747-1376

食料品・雑貨

山本商店

札幌市北区北十九条西七丁目
TEL七四六―六二八五

〈広告主へ感謝のことば〉

このたび、昭和59年度北大馬術部部報発行に際し絶大なる御援助をいただきました諸社・諸店に対し、厚く御礼申し上げるとともに諸社・諸店の御繁栄を祈り、ここに深く感謝致します。

（北大馬術部）

編　集　後　記

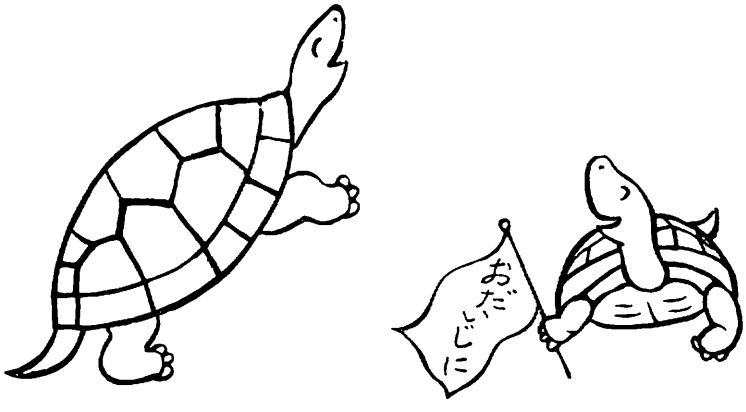
部報委員になったとき、大変な仕事だとは聞いていたけれども、まあ何とかなるだろ、ぐらいに思っていた。仕事を始める段になって、新めて昨年の部報を見直してみると、これは大変なコトだと薄々感じ始めた。先輩諸氏に原稿を依頼したが一向に集まらない。仕事といえば原稿の取り立てだけである。結局自分は何もしなくてよいのだから、何ということはない、実は楽な仕事であった。ところが原稿が全部集まってから泡をふいた。―― やはり現実は厳しいのだ。

さて、今年も例年通り無事部報を発行することができたわけだが、一体、この部報というのは何なのか。対外的な発表の場としているにしては、内輪にしか通用しない部分が多くて内容が洗練されていないし、単なる部内の記録にしては大袈裟だし、ＯＢとの交流誌とも言い難い。結局、伝統に流され、義理と惰性で発行している様にさえ思われる。

こういう思いから、まず起爆剤のつもりで横書きにして今までの形式を変えてみた。これには賛否両論あると思う。ところが、力が及ばず結局あとは殆ど今までと同じになってしまった。一時はガリ版刷りの案まで出た今年の部報だが、こうやって活字になってみると何がどうあれ実に頼もしいものである。

ようやくこの仕事も終ろうとしている。

マナベ小児科



新居浜市西町７番３号　TEL 37-0225

部　報　第30号

昭和60年5月　発行

発行者　北海道大学馬術部

札幌市北区北17条西7丁目

北大体育会内

☎(011)716-2111 内線 5597

☎(011)737-1626（直通）

編集者　部報編集委員

印刷所　北大生協　北大印刷

編集責任者　服部雅史

高橋知子

編集委員　1年目全員

表　紙　服部雅史